

590-146



1200501525481

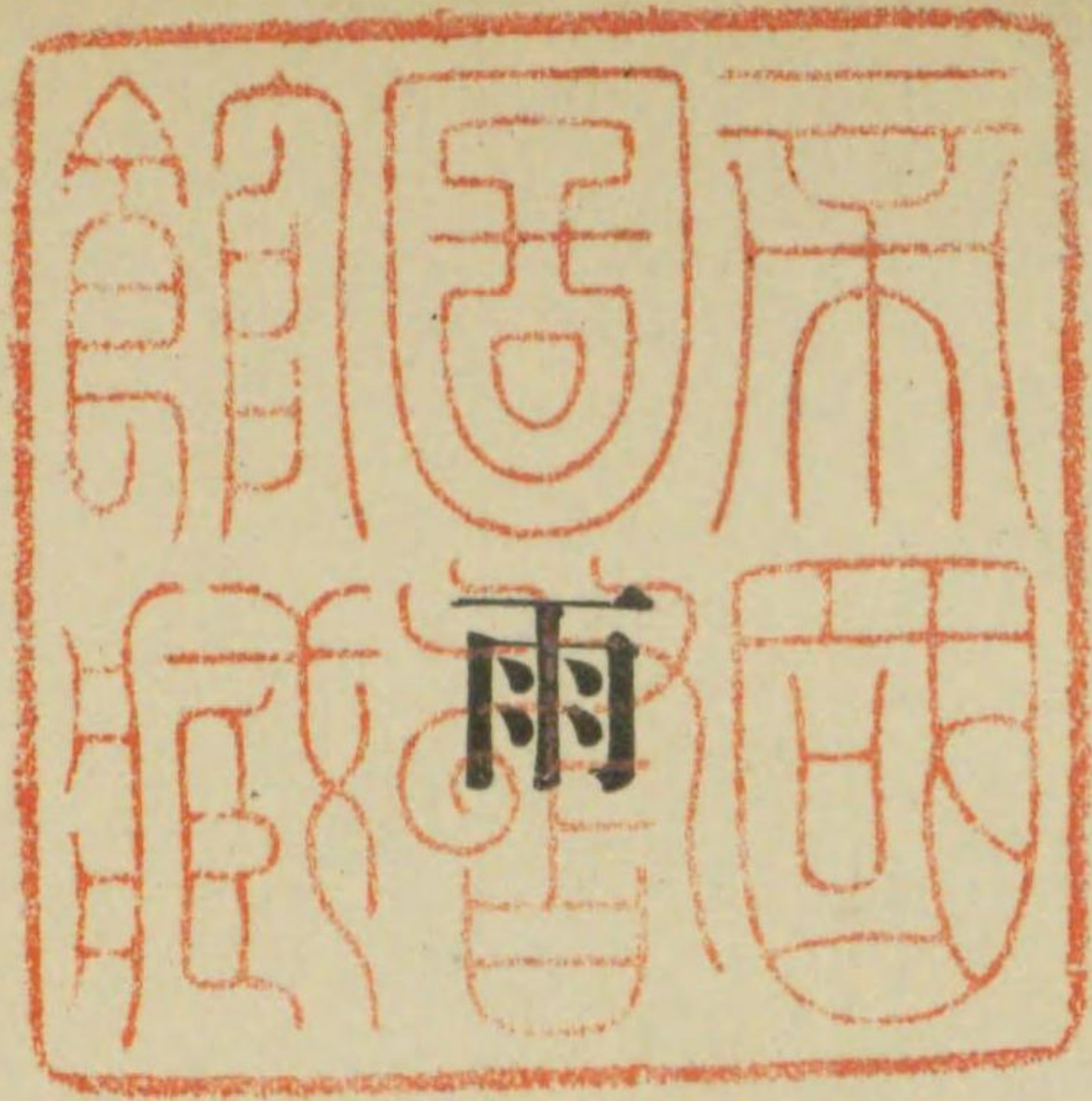
590

46

雨
滴
集

贈

呈



滴

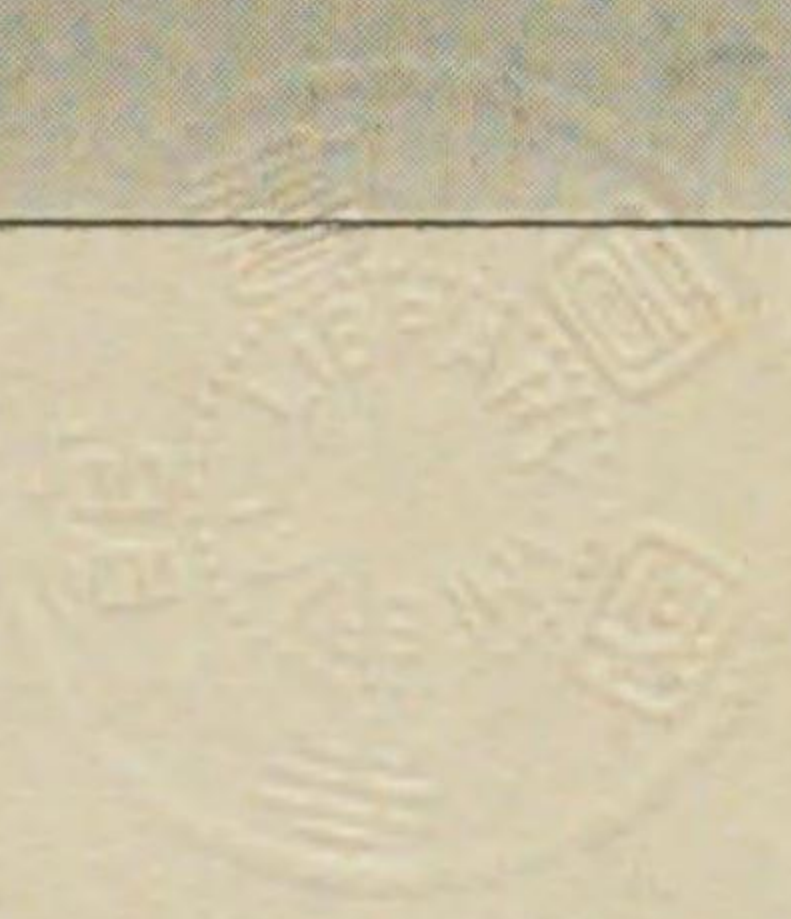
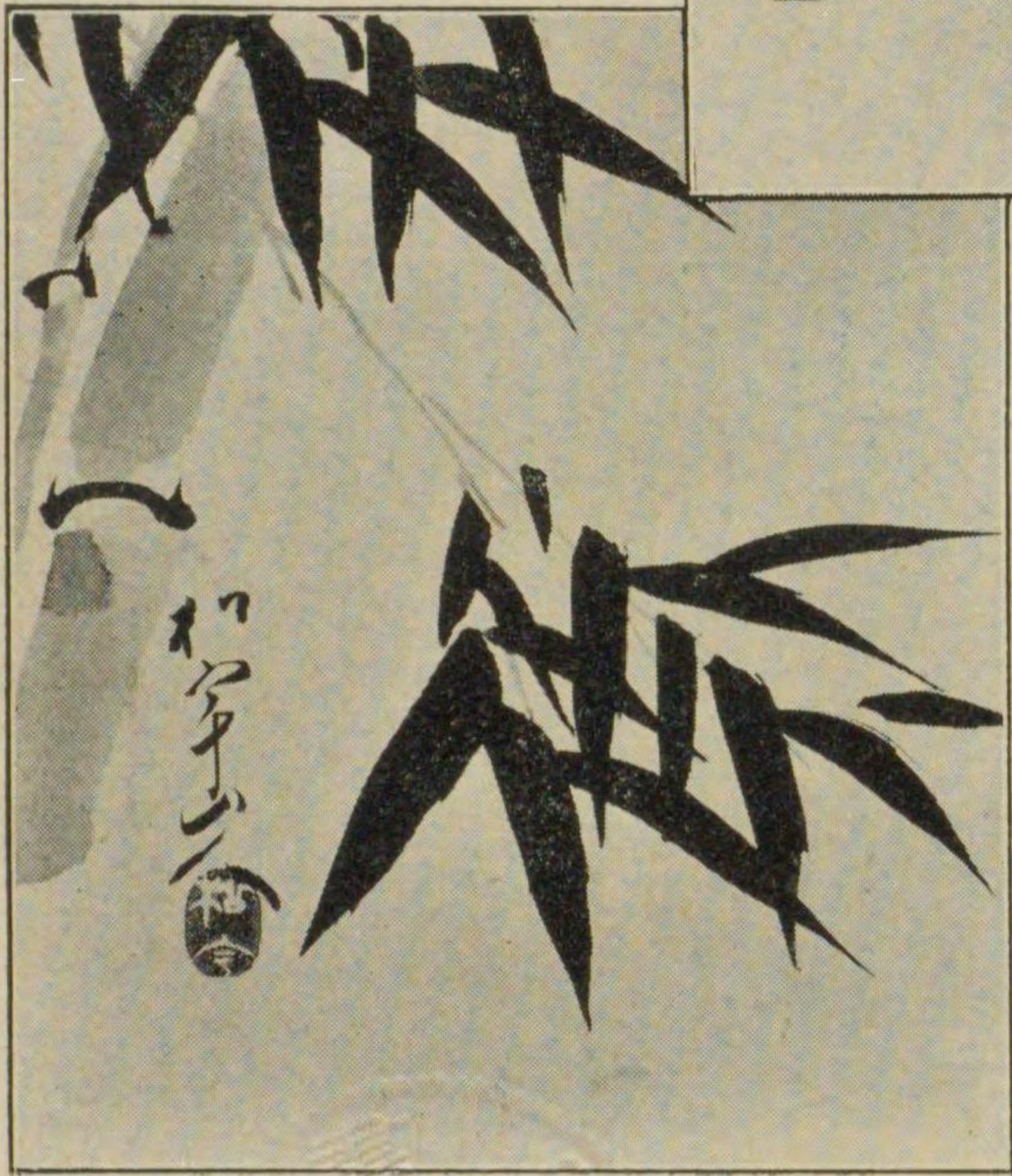
集

春雨會
記十年
出版



竹條
存
氏
寄贈本

大正
喜多美子の
暇々
松平小八
印



緒言

頃は大正九年三月風雅の同好相集りて俳句會を始む、會は折柄の春雨に因みて春雨會と名づけ、爾後毎月九日を期して例會を開く、會員は主として東都齒科醫界の俳人なれども、他方面の雅客も亦寡からず、殊に伊藤松宇翁は初より本會の師とする所なり、十二年九月偶未曾有の大震災に遭遇して一時中絶したるも、幸に復興して十二月更生の句會を擧げ、爾來連綿として今茲正に草創十年の星霜を迎ふ、於是同人相謀りて會員の舊作大約四千句を蒐め、記念として之を上梓す。書名亦春雨に因みて雨滴集と謂ふ。

昭和四年五月

吹 竿 識

青 莓 若 絹 青 青 青 糸 松 夏 馬 月 菫 日 菟 夏 紫 葵 夕 睡
 糸 瓜 葉 鈴 見 の 向
 牡 薯 の 草 花 葵 菊 蘇 顏 蓮
 柚 竹 草 芒 蔦 蘆 苗 丹 草 花 葵 菊 蘇 顏 蓮

今年竹

六四 六四 六三 六三 六三 六三 六三 六三 六三 六三 六二 六二 六二 六二 六二 六二 六二 六二 六二

秋 秋 長 秋 秋 秋 初 今 立 石 桑 瓜 茄 青
 の の の の の の 朝 の 秋 の 菖 實 子 梅
 夜 暮 月 朝 曉 日 秋 秋 秋 菖 實 子 梅
 梅の實

秋の部
 時候

前置句

六六 六六 六六 六六 六五 六五 六五 六五 六五 六五 六四 六四 六四 六四 六四

天 三 秋 秋 行 冬 秋 夜 夜 身 水 爽 漸 雨 冷 新 殘 秋
 の 日 の 惜 秋 隣 深 長 寒 入 澄 か 寒 冷 涼 暑 土
 川 月 日 秋 隣 深 長 寒 入 澄 か 寒 冷 涼 暑 土
 銀 河

天文

涼秋し 秋暑し

六九 六九 六九 六八 六八 六八 六八 六八 六八 六八 六七 六七 六七 六七 六七 六七 六六 六六 六六 六六

蟬 蚋 毛 蠅 蜘蛛 蠶 蚊 蝦 蟹 目 鱈 飛 鱧 鮎 行 浮 青 蝠 水 翳
 の 々
 蟲 圍 帖 高 魚 子 巢 鷺 蝠 鷄 翠

五五 五五 五五 五五 五五 五四 五四 五四 五四 五四 五四 五三 五三 五三 五三 五三 五二

若 若 卵 紙 羽 金 灯 羽 蟻 螢 蛞 玉 蝸 子 水 守 井 蝻
 の 龜 取
 楓 葉 花 魚 蟲 蟲 蟲 蟻 蝻 蟲 牛 子 馬 宮 守 蟬
 夏 蟲

植物

五九 五八 五八 五七 五七 五七 五七 五七 五七 五七 五六 五六 五六 五六 五六 五六

蓮 河 花 苔 畫 藻 一 萍 百 牡 杜 椎 茂 夏 紫 木 桐 夏 葉 新
 の 菖 の の の の の 木 陽 下 の 柳 櫻 樹
 花 骨 蒲 花 顏 花 八 花 丹 若 花 立 花 閣 花 柳 櫻 樹
 葉 柳

六一 六一 六一 六一 六一 六一 六一 六一 六一 六一 六〇 六〇 六〇 六〇 六〇 六〇 五九 五九 五九

雨滴集

新年之部

〔時 候〕

元旦	元旦や恩賜の布子あた、かく	曉花
元日	元日や今日は流石に鬼も来ず	三萬石
元日	元日の葉書着きけり一抱へ	朗月
元日	元日は飯も食はずに暮れに鳧	葩蜂
正月	正月の酒に汚れし袴かな	松宇
正月	正月や觀世が宿の懸袴	杉亭
正月	正月やまた酒癖に怠け癖	雲山
正月	正月は歌俳諧や碁や酒や	木公
正月	正月や酒太りせし父の顔	葩蜂
正月	正月ぢや君餅を食へ僕は飲む	朗月
正月	正月や木曾殿の衣冠新なり	猶青
正月	正月や駄馬も曳かれて襟飾	子鳴
正月	正月や猿にも着せる赤布子	猶青

睦月 ゆつたりと心落付く睦月哉 都雲

〔天 文〕

初日	雲染めて高嶺にのつと初日哉	朗月
初日	磯山や初日に染まる雲一朵	同
初日	蘇る都を照す初日かな	蕉村
初日	眩ゆさや波を射返す初日の出	同
初日	静まれる洋の初日や波さざら	都雲
初日	白壁の塀一ばいに初日かな	葩蜂
初東風	初東風や縁の戸あけて深呼吸	晋風
初東風	初東風や名なき芽生ゑ土に青し	みのる
初東風	初東風や青き親しき庭の松	十城
初東風	初東風や烏帽子正しき大宮司	葩蜂
初東風	初東風や翩翩として巷の旗	同
御降	御降の儘に夜となる大路哉	幾京
御降	御降や終日家に高笑ひ	泗水
御降	御降や千代經し松の深緑	暮山
御降	御降や松にからみし濡國旗	蕉村



〔人〕事

參賀 大官のきらびやかなる參賀哉 葩蜂
 松飾 戸袋に打付けしそれも松飾 晋風
 松飾 神洲の民米の飯 青牛
 松飾に箒目清し冠木門 みのる
 松飾門内清く掃れたり 葩蜂
 掃き均らす砂清らかに松納め 吹竿
 乗初めの岸を離る、筏かな 葩蜂
 書初を連ねて家の誇り哉 不山
 書初や一門集ふ大書院 雲山
 大筆に龍蛇躍らす吉書哉 吹竿
 初刷を繕きあきし炬燵かな 葩蜂
 出初 曉や夢驚かす出初式 雲山
 勇ましき木遣音頭や出初式 同
 藪入の夜の明けを待つ親子哉 子鳴
 藪入の矢竹心や汽車を待つ 吹竿
 藪入の辭儀の堅さよ小倉帯 杉亭
 寶引に笑ひくづる、一座かな 蕉村

福引 福引や何ひき當てし笑聲 吹竿
 羽子 つく羽子の一つ掛れり松飾り 五樂
 竹馬の子に頼みけり軒の羽根 吞于
 羽子つくや木履の鈴の音立て、 蕉村
 羽子の音に暮を静かや屋敷町 都雲
 追羽子やお妾町の晝下り 葩蜂
 双六の附録嬉しき雑誌かな 吹竿
 双六や子供に交る文學士 蕉村
 双六や一と飛びに越す箱根山 同
 惣立やかるた一枚見きなりて 松宇
 初戀の色に出でたるかるた哉 雲山
 ハイと云ふ聲も艶な歌かるた 木公
 お手付に不覺取たる歌留多哉 吹竿
 休職の父出で、讀むかるた哉 幾京
 更るま知らでかるたや戀初め 子鳴
 迎の人交り更けたるかるた哉 都雲
 かるた取る皆の眼を射る指輪哉 葩蜂
 彈初や師匠請する奥座敷 吹竿
 縫初の弟子美しく並びけり 葩蜂

初芝居 猿 舞

さそひ合ふて皆島田なり初芝居 吞于
 猿曳のたぢろぐ門やブルドック 竹栖
 猿曳の引かれて越しぬ丸木橋 蘭哉
 猿曳の見落して行く小家哉 吹竿
 猿曳や子よりも猿に初春着 五樂
 猿曳や襖の蔭に笑ふ聲 雲山
 猿曳の猿に取られし頬冠り 同
 舞猿の藝をつくして老にけり 葩蜂
 廣重の繪に鳥追の名残り哉 松宇
 鳥追や窓から覗く嬖 雲山
 鳥追の棲さばき行く雪駄かな 朗月
 鳥追や呼んで問ひたき尋ね人 幾京
 鳥追や風に吹かれて槍小唄 子鳴
 鳥追にやつして探す敵かな 都雲
 鳥追や振り返りゆく見越松 翠景
 鳥追や大門口の小料理屋 葩蜂
 新妻が屠蘇の顔見る鏡かな 蕉村
 二日目は少し飽きたる雜煮哉 雲山
 袴に祝ふ家例や雜煮餅 葩蜂

皆無事に一家揃ふて雜煮哉 蕉村
 渾沌とどろけ過ぎたる雜煮哉 同
 袴紐ゆるめて祝ふ雜煮哉 同
 むら消えの雪にどんどの埃哉 吹竿
 左義長に凍土解くる社頭哉 蕉村
 暗き灯にちび筆嚙むや店卸 吞于

〔宗教〕

初詣 千社札鳥居に貼るや初詣 葩蜂
 初詣で御洗手いまだ星の影 蕉村
 前髪にはさむ初卯の御札かな 同

〔動物〕

初雀 雪深き納屋の戸口や初雀 吹竿

〔植物〕

若菜 鶯に残す若菜や小姐 杉亭
 若菜籠添へてかへすや春曙抄 猶青
 嚴冬にめば若菜の青き哉 木公

福壽草

緋頭巾の翁健氣や若菜摘む 幾京
若菜摘み野守が妻の案内哉 吹竿
むら消えの雪間と目立若菜哉 蕉村
二本咲き二本蕾み福壽草 吹竿
窓の日や一ト花咲ける福壽草 葩蜂

〔前置句〕

大震後の都

バラツクの屋根より高き初荷哉 雲山
甦る都を祝へ今朝の春 同
江戸兒の變らぬ意氣や出初式 同
初曆地震の揺る日なかりけり 蕉村
富士山の今年は高し江戸の春 同
皆人は焼け太りけり江戸の春 同
バラツクの窓にさし込初日哉 同
皆無事の幸を語るや今朝の春 同
果もなきバラツク町や初日影 吹竿
初春や焼跡寒き假り社 同
復興の氣運目出度し御代の春 同

初鳥尾の上の雲の切れ目より 蕉村
元朝や紫匂ふ山かつら 吹竿

山色連天

元日や山々霞み天の色 五樂
遠山や曉靄地に這き初日の出 みのる
朝空にとけ入る山や初霞 蕉村
連峰のぼかされありぬ初霞 十城
山色連天彼方初鳥 都雲
東天紅大内山は紫に 青牛
初富士や日本晴の淺黄空 吹竿
山壁のくつきりと初明かな 晋風
初風や群峯澄める國境 葩蜂

河水清

初風呂に汲む河水の清さ哉 杉亭
顔うつる五十鈴の川や初手水 朗月
東雲の河水清し初手水 都雲
新春の河水清く流れけり 蕉村
水清く河は明けたり初詣 幾京
初手水みな上清き五十鈴川 雲山

〔勅題集〕

曉山雲

明けゆくや山の雲より初鳥 杉亭
茜さす雲の高嶺や今朝の春 木公
山の雲朝日ほんのり屠蘇氣嫌 五樂
元日や富士の化粧に明けの雲 同
初富士や紫雲たなびく曉の空 雲山
雲に浮く富士の高嶺や初明り 同
初鷄や金剛山の雲晴れて 青洲
初富士や曉紅の雲映ゆる湖 同
ほのくと年立つ山や雲一朶 都雲
瑞雲や山の端赤く年の朝 同
初鷄やまだ月宿す峯の雲 不山
歳の戸の雲に明け初む神路山 同
若水や曉深き山の雲 月洲
初鳥靈山の雲晴れてゆく 同
昇る陽に替るや富士の曉の雲 幾京
富士見えて雲眞紅なり曉の空 同
茜さす高嶺の雲や初鳥 蕉村

水清き大河賑ふ初荷船 みのる
さざれ石透く河水や御代の春 竹栖
初空や瑠璃に昇浮く五十鈴川 肯穂
塵もなき河水清し初日影 吹竿
年立つや曉の星澄む隅田川 葩蜂

海上風靜

風風ぎし二見ヶ浦や初日の出 雲山
靜風や海一杯の初日の出 蘭哉
直帆あげて波も靜かや貢船 吹竿
初東風や皆帆をあぐる浦の舟 猶青
初東風先伊勢の海の眞帆片帆 肯穂
穏かな風を孕むや初荷船 蕉村
大海や風靜まりて初日の出 都雲
初風や靄離れ居る沖の島 葩蜂

春之部

〔時 候〕

立春 繪暖簾に春立つ京の茶店哉 吹竿

二月
如月

彌生

春立つや海原渡る千羽鶴 閑雨
立春や木履の音も軽々と 幾京
春立つやかざす舞妓の扇より 蕉村
立春の朝よりぬく心地哉 都雲
春立つや起き返りたる園の竹 蘭哉
日南椽二月の背中丸めけり 晋風
橙のしなびてありし二月かな 葩蜂
遅蒔の麥針ほどの二月かな 雲山
如月やほろ／＼落つる崖の土 同
藪に隣る祠に寒き二月哉 都雲
噴水の尙目に寒き二月かな 同
如月や小波寒き志賀の浦 吹竿
如月や柳の風に梅の月 同
野芝居の描眉寒き二月哉 啞眠
如月の挿木に早き青芽哉 みのる
雨毎に梢は重き二月哉 肯穂
松風に二月の庭の石寒し 五黄
如月や濱行く馬車に客もなし 吞于
鹵簿過ぎし跡を陽埃る彌生哉 葩蜂

餘寒

湖の水膨れて光る彌生哉 蕉村
風少し出て暮れたる彌生哉 曉雪
産輕き人に彌生の屏風哉 同
春めくや鹽焼く濱のうす煙 雲山
炭焼いて眞晝春めく野山哉 閑雨
啓蟄やめき／＼育つ鶏の雛 吹竿
戸を繰れば山河展けて春の色 子鳴
春色や埒なき庭の丘續き 雲山
此頃や比良も煙りて春の色 肯穂
春色や隣は舞の足拍子 五黄
雨一日春色動く野面かな 葩蜂
不精髻餘寒の顔を埋めけり 吹竿
奔々と餘寒の迫る書齋かな 雲山
噓して出るや餘寒の丁字風呂 丁山
論戰の果て、餘寒を覺えけり 幾京
潮時を待つ間の舟の餘寒哉 冲舟
猿の子の重なりて寝る餘寒哉 不山
鶯舌も溢り勝ちなる餘寒哉 溪楓
風強く餘寒の夜の町淋し 都雲

春寒

牙返る

春浅し

病室のものみな白き餘寒哉 葩蜂
代り寝る看護疲れや春寒し 漁舟
灯かすかに通夜僧一人春寒し 同
春寒き水に吹き寄る芥かな 吹竿
春寒に眼鏡の曇る朝茶哉 蕉村
江戸褌をもれて素足や春寒し 朗月
酒さめて夜の郊外や春寒き 都雲
温室に日のかげり來ぬ牙返る 晋風
舟風呂や岸の柳に牙返る 杉亭
牙返り／＼五山展けたり 子鳴
月皎し犬遠吠えて牙返る 肯穂
牙返る土に冷たき植木鉢 みのる
日に細る寛の音や牙返る 蘭哉
佛燈に光る柱や牙返る 葩蜂
大寺の障子牙返る日なりけり 同
双こぼれを研く剃刀や牙返る 吹竿
引荒れし大根島や春浅し 同
春浅き雨に積藁黄なりけり 猶青
春浅し手布干したる麓茶屋 杉亭

春深し

麗

春浅き障子に揺る、葉影哉 みのる
春浅し沸し温泉ぬるき山の宿 葩蜂
春浅き大谷の川や石出る 幾京
洛外の山又山や春深し 雲山
散り残る八重山吹に春深し 溪楓
咲き盡す花とり／＼に春深し 都雲
春深く壺焼の殻積まれけり 蕉村
春深し奈良の旅籠屋三輪の茶屋 杉亭
春深き京の泊りを重ねけり 葩蜂
睨めくらツイ吹き出すや麗に 晋風
手相見る人麗に語りけり 同
麗や舟見て在れば眠うなる 吹竿
湖うら、浮木に釣す翁かな 幾京
麗や麥のさくきる鉄の音 蘭哉
麗や椽に持出す煙草盆 雲山
寤返れば眼に觸れて帆の麗けし 曉雪
麗や京は西山 東山 杉亭
麗や雞の蹴合へる背戸畑 葩蜂
麗や胸張つて啼く屋根の雞 同

長閑

長閑さや眠る兎と走る龜 三萬石
長閑さや野飼の牛の三五匹 溪楓
長閑さや海遠く干て帆の小さき 明月
長閑さや廣重の繪に旅情湧く 不山
長閑さや青海原を數ふ舟 雲山
轉寢に飴屋の笛の長閑なり 子鳴
長閑さや艦に上りし輕氣球 葩蜂
春の日や姿見曇る温泉の宿 同
竹林の靜かに暮れし春日哉 同
日永きに鐘の銘讀む眼鏡哉 蘭哉
人馴れし春日の鹿や日の永き 雲山
長病みのわれに日永き疊かな 葩蜂
看護婦に爪を切らす日永哉 朗月
大時計日永の街に響きけり 曉雪
鐘恨む春曉の別れかな 吹竿
春曉や舳揃へて纜ひ船 葩蜂
春曉の池に蛙の卵子かな 同
花嫁の居眠り出るや春の晝 蘭哉
遠乗の駒嘶くや春の晝 竹栖

春の晝

春曉

日永

春の日

暖か

春惜む

暮の春
行春

鬼の出る噂や京の町朧 曉雪
舟唄の間近うなりて朧かな 都雲
汐の香の舟に漂ふ朧かな 杉亭
朧夜や閉め残したる裏の木戸 呑宇
傳導の辻に人立つ朧かな 雲山
おぼろ夜の人美しく思ひけり 蕉村
暖かや船上の人岸の人 葩蜂
馬盥の水飲む犬や暖かき 曉雪
五形花田は打返されて春惜む 四果
伸び盡す蓬嫁菜に春惜む 吹竿
暮の春空しく黙す書齋かな 都雲
囊中の空しうなりて春の行く 同
行春の流れに投ず歌の反古 同
行春や琵琶の被ひの古錦 杉亭
眉剃つた青女房や暮の春 同
永年の公事に敗れて春の行く 雲山
雌雄の分からぬ雛雞や暮の春 同
氣にすれば殖る白髪や暮の春 吹竿
行春やいつまで人の聲撰み 同

せらぎに鳥の浴び居る春の晝 子鳴

春晝や片肌ぬいで薪を割る 雲山

春晝沈々柱に凭りて蝶の夢 五樂

春晝や京の女の長浴み 葩蜂

春夕みな影を曳く丘の松 同

燭切つて筆の辻りや春の宵 鐘朗

春の宵戀に朽ちなん男哉 雲山

金屏や局燭剪る春の宵 啞眠

傾城の膝を枕や春の宵 幾京

春の宵疲れて外す眼鏡かな 都雲

身揚りす遊女の戀や春の宵 杉亭

裏木戸に話す人あり春の宵 朗月

些かの妻がりんきや宵の春 葩蜂

一合の酒に酔ひけり春の宵 同

香炷いて春夜繙く双紙かな 都雲

聲高く男の子生れけり夜半の春 葩蜂

春の夜や辻に唄賣るバイオリン 吹竿

春の夜の夢はしたなし肱枕 蕉村

朧夜や鐘鳴り渡る天王寺 葩蜂

朧夜

春の夜
夜半の春

春の夕
春の宵

八十八夜

佐保姫

室の津の遊女の媚や春の行く 五黄
行春や餌に飽きて寝る檻の虎 不山
見渡せば散る花もなし暮の春 五樂
浮か／＼と花に過ぎ鳥暮の春 蘭哉
行春や青春の日の惱ましく 葩蜂
行春や妻美しき穢多長者 同
花散りて春も八十八夜かな 吹竿
寮爺の忘れず八十八夜かな 幾京
古羽織着て出る八十八夜哉 蕉村
海の幸八十八夜過ぎにけり 雲山
走り茶の届く八十八夜かな 杉亭
蒔き終へて八十八夜祝ひけり 都雲
霜除もとれて八十八夜かな 蘭哉
苗床を見廻る八十八夜かな 葩蜂
佐保姫の裾の明りや山櫻 雲山
佐保姫や此處は三州八橋在 幾京
佐保姫の黛青き野山かな 杉亭
佐保姫や柳の袂花の帯 吹竿

〔天 文〕

春の霜

曙や草鞋に消ゆる春の霜 杉亭
 着せ藁に春の霜見る蘇鐵哉 吹竿
 硬くなりし帆綱手繰る春の霜 雲山
 庭下駄の鼻緒の上や春の霜 都雲
 藁除けし若菜凋れぬ春の霜 蕉村
 春霜に牛乳配達通り鳧 葩蜂
 糸屑のにぢみて赤し春の雪 猶青
 鳥かけや雨だれ繁し春の雪 同
 宿酔の臉重たし春雲 雲山
 寄席はねて春の雲となりて鳧 同
 來ぬ人を待つ夜を春の雲哉 蕉村
 芹摘んで歸る野路や春雲 竹栖
 笹の葉を迂りて春の雲哉 杉亭
 店に吊る章魚灯に赤し春雲 葩蜂
 東風吹くや堀の小萬が洗髪 松宇
 皆東風に向いて浮きけり都鳥 杉亭
 東風吹くや寝て舵をとる下舟 蕉村
 磯節や東風に帆を張る舸子の聲 木公

東風

春風

東風吹く煤拂居る土手の茶屋 みのる
 夕東風や厠手拭草に落つ 葩峰
 東風吹くや白動かせば小草苗 閑雨
 春風や宗祇が髭を吹いて去る 松宇
 括られし龜をなぶるや春の風 同
 春風に振るステキの軽さかな 晋風
 天秤にくる荷籠や春の風 同
 春風や鴨の脱毛の寄る汀 朗月
 春風や利根廣うして舟遅し 同
 棟上の五色の旗や春の風 雲山
 春風に三才駒の足搔哉 同
 春風や大和根下る帆のうねり 蘭哉
 春風や大師河原の河豚提灯 同
 折鶴を脊の子廻すや春の風 肯穂
 春の風駒の勝手に任せけり 同
 春風や紙燭を庇ふ袖屏風 吹竿
 震火災の翌る春 同
 春風や焼跡を舞ふ鉋屑 吹竿
 春風や小切れ吊して呉服店 同

床屋出て輕き頭や春の風 吹竿
 染め上げて干す友禪や春の風 葩蜂
 春風に草すつて飛ぶゴルフ哉 同
 春風や衣桁を迂る緋の衣 同
 春風の辻々に貼る繪ビラ哉 同
 連れ立ちて毒消賣や春の風 同
 春風に尾を振る宿の小犬哉 都雲
 練絹の乾く匂ひや春の風 蕉村
 春風や悠々走る帆かけ船 雪窓
 笠落す馬上の人や春の風 沖舟
 春風に漂ふ沖の白帆哉 子鳴
 後れ毛を掠めて吹くや春の風 杉亭
 地に潜むもの皆萌えよ春の風 不
 春風や友禪染むる鴨河原 猶青
 春風に吹れて輕し旅衣 月洲
 勾欄に舞姫醉ふや春の風 閑雨
 直帆あげし千石船や春の風 同
 春風や猫の追ひ行く菓子袋 暮山
 春風や乳母が持ち添ふ風車 四果

春の嵐
風光る

春風や野路行く牛ののたりく 竹軒
 春の風都は柳櫻かな 三萬石
 馬子唄や五十三驛春の風 杉亭
 病癒えて娘の三味や春の風 子鳴
 春風に帆を孕ませし大河かな 同
 春風や輕やかに草履土を踏む みのる
 馥よかに木の芽木の芽や春の風 同
 春風や椽に吹込む花の雨 五樂
 産室の折鶴舞ふや春の風 不山
 もの、芽の綻るふ春の嵐かな 吹竿
 馬場先や鹵簿肅々と風光る 松宇
 銀鞍に白馬打たして風光る 木公
 陥入れて入城式や風光る 三萬石
 沖遙か大魚躍りて風光る 都雲
 筆立に孔雀の羽根や風光る 青洲
 松島や白帆ちらく風光る 子鳴
 松原の果ては海なり風光る 雲山
 海松ふさの浮つ沈みつ風光る 蕉村
 朝霞馬上に富士を見つ、行く 松宇

生さ子の戸棚に泣くや鐘霞む 晋風
 鐘霞み野霞み人のかすみけり 雲山
 霞けり風ぎけり沖の投網舟 同
 鎌を杖に烟草の煙り霞みけり 同
 霞立つ畑の彼方や牛の聲 都雲
 大海に入る大利根の霞けり 猶青
 片岡や霞の中の人と牛 都雲
 一と霞消えても霞むかすみ哉 蛙人
 我兒の渡米を送りて
 見送りぬ霞に船のわかぬまで 朗月
 灯のともる大内山や夕霞 葩蜂
 松島の松も霞むや遠眼鏡 同
 鐘霞む椅子に眠む度し耳掃除 吹竿
 一抹の煙は船か遠霞 同
 行く人の霞に入るや瀬田の橋 蘭哉
 植繼ぎの秋色櫻鐘かすみ 三萬石
 陽炎の布百反や多摩河原 杉亭
 陽炎や土堀り返す鎌の先き 雲山
 陽炎や新壁乾く日の匂ひ 同

糸遊
春の月

陽炎や小徑横ぎる青蜥蜴 翠景
 陽炎や干瀉に残る腐れ繩 月洲
 陽炎や芍薬の芽の二三寸 蕉村
 盆石に陽炎燃ゆる日向かな 雲山
 陽炎や潮を待つ間の舟掃除 同
 陽炎や舟の上また石の上 閑雨
 野に休む牛の涎の陽炎へる 都雲
 土こねて遊ぶ子供や陽炎へる 吹竿
 陽炎や石に干したる藁たわし 同
 陽炎や縁に人なき煙草盆 葩蜂
 陽炎の森を包める真晝哉 同
 陽炎や翠丸甜る繋ぎ牛 同
 陽炎や破れ帆繕ふ舟の妻 同
 陽炎や風なりに這ふ水の上 同
 糸遊や繩解かれたる畑の桑 吹竿
 猿樂に院の夜更けて春の月 丁山
 薄絹の 大行燈や春の月 雲山
 霽に浮く灯の町ぬけて春の月 竹軒
 ほろ酔の庭下駄輕し春の月 不山

隴月
 喃喃と欄に人あり春の月 朗月
 行先をだまつて出たり春の月 暮山
 三味牙ゆる濱町河岸や春の月 肯穂
 君側に侍して宴や春の月 葩蜂
 ほろ酔に躓く石や月隴ろ 蕉村
 琴に合す笛の音色や隴月 同
 祖師眠る池上山や月隴ろ 同
 浅茅生の宿訪づれん隴月 同
 月隴香漂ふや智恩院 杉亭
 高欄に袈脫ぐや隴月 同
 畏かけて野狐釣らん隴月 木公
 月隴山莊を訪ふ漁歸の客 青牛
 灯の町をぬけて上野の月隴 好石
 塔の影池に橋して月隴ろ 五黄
 我を尾行る怪しき人や隴月 葩蜂
 松にこもる甘き匂ひや隴月 同

春雨

春雨の湯島詣でや女傘 不山
 春雨や佛體刻む鑿の音 三萬石
 春雨にまさる眺めや大悲閣 幾京

鐘に暮る、京の夕や春の雨 鐘朗
 春雨に烟る柳や蛇の目傘 峽石
 戸棚繰る引手濡りや春の雨 みのる
 春雨や素足目に立つ塗足駄 蛙人
 どうしても君は歸るか春の雨 朗月
 小鼓を軒端に聞くや春の雨 五樂
 春雨や何語り行く最合傘 紫海
 湯疲れの妻美しや春の雨 月洲
 春雨に夢去り兼ねし褥かな 蕉村
 春雨や賑ふ町の灯頃 都雲
 徒然に開く文庫や春の雨 子鳴
 苔の石幾萬年を春雨す 同
 春雨や濡れて餌漁る畑の鶏 閑雨
 春の雨爪弾きもる、離れ哉 同
 鰻釣る芦分舟や春の雨 同
 盤台に泳ぐ小蛇や春の雨 葩蜂
 雫きる春雨傘や厨口 同
 春雨や枕上からぬ二日酔 吹竿
 足拭いて上る客ありの春雨 同

春雨や紺屋の門に藍の浮く雲山
 春雨や下駄の齒に付く鮑屑同
 寮の灯の流るゝ傘や春の雨同
 春雨や背のびをしつゝ大欠伸同
 筆塚や春雨煙る庭の隅同
 春雨や辻に哀れをつくし琴同
 春雨や水吸みに遣るお茶の水猶青
 初雷や置場忘れし鬼の豆蕉村
 空腹に初雷を聞く旅路哉都雲
 初雷やおしろいこぼす小傾城蘭哉
 初雷や皆片よりし池の鳥葩蜂
 春の日や文庫を探す歌の反古蘭哉
 笠を背に筏流すや花曇雲山
 花曇人馬急がず船行かす肯穂
 あの邊が都の空よ花曇蕉村
 盛装の人稍淋し花曇都雲
 花曇水に影浮く土堤の茶屋葩蜂
 午砲鳴る大東京や花曇同
 浮き出せし丹塗の塔や花曇雲山

〔地理〕

凍解 凍解や拾ひ歩るきの長谷詣 吹竿
 凍解や石も囁く谷の水 松宇
 凍解や京の山々紫に 葩蜂
 搔き寄る雪解のあとや交り土 閑雨
 雪解に小猫の足の運び哉 逸仙
 山下りて見れば雪解の巷哉 都雲
 雪解や根來法師の高足駄 葩蜂
 足跡の猫ふりかへる雪解かな 猶青
 藁屋根の雫やまざる雲解哉 葩蜂
 残雪や比良の一角雨煙る 松宇
 残雪に稍山巖の明りかな 晋風
 穴毎に長石垣の残り雪 閑雨
 残雪の丘にうすづく夕日哉 都雲
 残雪や越路を出づる藥賣り 青牛
 残雪や黒みてかたき庭の隅 みのる
 山巖や牛の寝た程残る雪 雲山
 敷松葉とれば雪あり寮の庭 杉亭
 残雪や松の下なる天王碑 葩蜂

残雪や枯木の中の里程標 葩蜂
 残雪や飛驒連峯の大夕焼 同
 國分寺や雪間くゝの古瓦 松宇
 禪僧の徑に蹴とる雪間哉 幾京
 枯草の雫に烟る雪間哉 木公
 崩れたる崖の雪間や露の臺 朗月
 鳥一羽飛んで目に立つ雪間哉 五樂
 山宿の薪干したる雪間かな 露溪
 何の芽か首を擡げし雪間哉 翠景
 何探し居るか雪間の雀二羽 都雲
 むら消えの雪間に遊ぶ十鳩哉 蕉村
 放牧の馬に戀あり山笑ふ 朗月
 笑ふ山眠れる湖をとりまいて 同
 錦着て歸る故郷や山笑ふ 童夢
 蝶鳥に喚起されて山笑ふ 紫海
 風ぎし湖に笑ふ山々寫りけり 蕉村
 戸を繰れば孤村煙りて山笑ふ 子鳴
 山笑ふ麓の家の煙り鼻 都雲
 曙や花に微笑む京の山 杉亭

燒野

春景色人に知らせて山笑ふ 五樂
 笑ふ山眺めて今日も釣り暮るゝ 雲山
 軒の巢箱に鳩解る日や山笑ふ 葩蜂
 昔から家四五軒や山笑ふ 猶青
 春の山詩囊肥して歸りけり 蘭哉
 春の山寫つる樂屋の鏡哉 曉雪
 登り行く馬の飾りや春の山 木公
 燒野來し帽子のつばや灰埃り 普風
 目を閉ぢておはす燒野の地藏哉 朗月
 百千草燒野に早き芽生哉 同
 親鳥の子を呼び狂ふ燒野哉 蘭哉
 薄月は燒野の煙に曇鼻 同
 月暈の夕となりし燒野哉 杉亭
 野火消えて夕闇に星一つ浮く 同
 月缺けて烏啼きけり燒野原 子鳴
 燻りたる石や燒野に兀として 都雲
 火の手過ぎ馬糞の曇る燒野哉 雲山
 燒くる野の煙這ひ行く湖上哉 葩蜂
 飯粒で釣れる小魚や春の川 吹竿

山笑ふ

残雪や枯木の中の里程標 葩蜂
 残雪や飛驒連峯の大夕焼 同
 國分寺や雪間くゝの古瓦 松宇
 禪僧の徑に蹴とる雪間哉 幾京
 枯草の雫に烟る雪間哉 木公
 崩れたる崖の雪間や露の臺 朗月
 鳥一羽飛んで目に立つ雪間哉 五樂
 山宿の薪干したる雪間かな 露溪
 何の芽か首を擡げし雪間哉 翠景
 何探し居るか雪間の雀二羽 都雲
 むら消えの雪間に遊ぶ十鳩哉 蕉村
 放牧の馬に戀あり山笑ふ 朗月
 笑ふ山眠れる湖をとりまいて 同
 錦着て歸る故郷や山笑ふ 童夢
 蝶鳥に喚起されて山笑ふ 紫海
 風ぎし湖に笑ふ山々寫りけり 蕉村
 戸を繰れば孤村煙りて山笑ふ 子鳴
 山笑ふ麓の家の煙り鼻 都雲
 曙や花に微笑む京の山 杉亭

春の川

春の川 飯粒で釣れる小魚や春の川 吹竿
 燒くる野の煙這ひ行く湖上哉 葩蜂
 火の手過ぎ馬糞の曇る燒野哉 雲山
 燻りたる石や燒野に兀として 都雲
 月缺けて烏啼きけり燒野原 子鳴
 野火消えて夕闇に星一つ浮く 同
 月暈の夕となりし燒野哉 杉亭
 親鳥の子を呼び狂ふ燒野哉 蘭哉
 百千草燒野に早き芽生哉 同
 目を閉ぢておはす燒野の地藏哉 朗月
 登り行く馬の飾りや春の山 木公
 燒野來し帽子のつばや灰埃り 普風
 昔から家四五軒や山笑ふ 猶青
 軒の巢箱に鳩解る日や山笑ふ 葩蜂
 春の山詩囊肥して歸りけり 蘭哉
 春の山寫つる樂屋の鏡哉 曉雪
 登り行く馬の飾りや春の山 木公
 燒野來し帽子のつばや灰埃り 普風
 目を閉ぢておはす燒野の地藏哉 朗月
 百千草燒野に早き芽生哉 同
 親鳥の子を呼び狂ふ燒野哉 蘭哉
 薄月は燒野の煙に曇鼻 同
 月暈の夕となりし燒野哉 杉亭
 野火消えて夕闇に星一つ浮く 同
 月缺けて烏啼きけり燒野原 子鳴
 燻りたる石や燒野に兀として 都雲
 火の手過ぎ馬糞の曇る燒野哉 雲山
 燒くる野の煙這ひ行く湖上哉 葩蜂
 飯粒で釣れる小魚や春の川 吹竿

日毎下る筏の數や春の川吹竿
 戯れの女釣師や春の川雲山
 春の川草履のまゝに浸りけり
 棹させば月亂れけり春の川暮山
 春の川棄てぬ化粧の餘り水不山
 渡し舟は女ばかりや春の川葩蜂
 引く網の魚みな赤し春渚同
 春の海群る、鷗の眠るなり猶青
 重砲の音かすかなり春の海同
 網逃げて光る小魚や春の海葩蜂
 山南に街展けたり春の海同
 春の浪磯の小貝を洗ひけり杉亭
 草の芽を浸して寄せぬ春の浪吹竿
 滑かに泡立つ磯や春の浪子鳴
 春水にかゝけて赤き裳かな吹竿
 春水や鯉生かしある大盥葩蜂
 ざぶ／＼と舟縁うつや春の浪同
 春田薄靄に夕月罩むる春田哉吹竿
 水温む御手洗に夕陽うつりて水温む沖舟

別れ霜
 笈まで来て谷水の温みけり蕉村
 田の畦に小鮒掬ふや水温む杉亭
 旅心誘ふや背戸の水温む雲山
 起き抜けの冷水浴や水温む同
 紙漉の唄ふや背戸の水温む同
 二夕筋の川落合ふて水温む葩蜂
 桑畑を氣遣ふ朝や別れ霜雲山
 牝雞の雛抱き込むや別れ霜同
 橙に朝日照るなり別れ霜竹生
 通夜遂げて歸る晨や別れ霜幾京
 春泥にためらう下駄の低さ哉晋風
 春泥のコート乾き揉んで見し朗月
 春泥や轍の溝に片草履杉亭
 春の泥飛び付く犬を持てあます吹竿
 春泥や牛に曳かせて肥車葩蜂
 春泥に夕日の影や塀の松同
 春泥やいろとり／＼に壺乾く曉雪

〔人事〕

爐塞いで淋しき老の早寢哉竹生
 大衆の下山爐塞ぐ日なりけり不山
 爐塞いで世に出でたりな煙草盆蕉村
 爐塞いで庵に殖へたる碁盤哉杉亭
 爐塞いで檢非違使の宿承る木公
 爐塞いで瓢に一日手入れかな朗月
 爐塞いで戸棚の前の廣さかな同
 琴の爪帯にさぐるや雛の客晋風
 一蝶の島のすさびや紙雛雲山
 古雛をまた新しく飾りけり露溪
 雛段に常の人形も侍べりけり吹竿
 雛の圖を探して開く文庫哉五樂
 雛の灯や顔にぎわしき姉妹猶青
 古雛や思出多き母者人同
 契りてもはなれ／＼や箱の雛好石
 三代に仕へて古りし雛かな都雲
 片付ける雛段下や銀の匙みのる
 雛段や時代々々の面白味雲山
 金屏や灯せば並ぶ雛の影曉雪

白酒
 母と娘の雛を取り出す戸棚哉子鳴
 雛の宵妹が小窓の灯りけり葩蜂
 窓の日や燦然として内裏雛同
 白酒の酔かくしけり袖屏風杉亭
 白酒に小さき客や小坐布團都雲
 悔りて白酒に酔ふ頭痛哉吹竿
 白酒や初戀の人まぶしくて葩蜂
 武藏野に絡らむ物なし風蕉村
 長松もお相手するや紙鳶蘭哉
 富士筑波一目に紙鳶の唸哉杉亭
 いかのぼり百萬石の城下哉葩蜂
 夕映ゆる都の空やいかのぼり同
 大震災後所見
 燒跡の町の廣さやいかのぼり吹竿
 バラックの都に高し風都雲
 燒跡に上る字風や雲早し葩蜂
 春眠や鶯の餌は人任せ五樂
 春眠や味喰する音は壁隣杉亭
 春眠や奈良は懐し旅日記肯穂

石鱗玉

春眠の屏風明るき日ざし哉 都雲
 春眠の障子にゆらぐ葉影哉 みのる
 春眠やうつゝともなき雨の音 雲山
 春眠の頸の痺れや箱枕 吹竿
 春眠の窓に影濃き柳かな 葩蜂
 石鱗玉眉を掠めて破れけり 吹竿
 石鱗玉捉れば泡沫夢幻なり 杉亭
 石鱗玉陽に映き高く消えに鳧 幾京
 石鱗玉管の先にてはじけり 蕉村
 あれ〜と云ふ間に消えぬ石鱗玉 雲山
 石鱗玉七色變り上りけり 閑雨
 石鱗玉あはれはかなき五彩哉 猶青
 流觴や歌上手なる小宰相 綠糸
 流觴や魚に揺られて向川岸 青湖
 流れ来る歌の反古や巴字の水 雲山
 出代の葉書に落す涙かな 杉亭
 出代の忘れ物せし戸棚哉 同
 出代の囊に餘る土産哉 同
 出代や姉と妹の入れかわり 閑雨

流觴
巴字盡

出代

出代のまつはる犬に涙哉 雲山
 出代女鸚鵡に其名のこりけり 蕉村
 出代や聞き分け兼ねる國訛 吹竿
 下女下男夫婦となりて出代 葩蜂
 菖蒲根分眞鯉が腹を閃めかす 同
 耕や莫産の目残る芝居跡 雲山
 子を連れた牛の耕す日和哉 同
 耕の人戻るなり井筋道 蕉村
 耕に牛追のろり〜哉 杉亭
 耕や木曾の棚田の片かげり 葩蜂
 畑打や汽車遠く森と吸はれゆく 同
 畑打の鐘に畑打やめて又祈禱る 朗月
 春日傘はやちらほらと京の街 葩蜂
 小さくて花咲く鉢の挿木哉 蕉村
 挿木不圖抜き見度き心抑へ鳧 吹竿
 二つ葉の出で香の立つ挿木哉 蘭哉
 地境の崖の崩れに挿木哉 雲山
 挿木とは見えぬ柳や川屋敷 杉亭
 接木して老の目曇る眼鏡哉 雲山

菖蒲根分
耕

畑打

春日傘
挿木

接木

摘草

隱退の舊師を訪へば接木哉 猶青
 手を止めて老木見上る接木哉 四果
 背向けて接木の翁耳疎とき 吹竿
 煙草盆提げて接木の指圖哉 杉亭
 午砲遠く聞く摘草の野なり鳧 晋風
 摘草にいつしかしめる草履哉 猶青
 摘草やいつか乾きし籠の土 同
 摘草に出て故山を懐ふかな 朗月
 ふと出て蓬摘む氣になりて鳧 同
 摘草の指に粘りし莖の汁 みのる
 摘草の土堤に騒し女達 同
 摘草の鐘に追はれて渡舟哉 杉亭
 摘草の籠にしほれて晝餉哉 同
 摘草や頭の上を汽車過ぐる 吹竿
 摘草や遅れし友をさしまねく 同
 摘草の堤の上や騎馬の人 都雲
 摘草のこぼれしきたる轍かな 閑雨
 摘草や渡舟待つ間と撰りすてし 子鳴
 摘草や里の子にきく歸り道 肯穂

野遊

鞆韃

草焼く

山燒

屋根替

摘草や富士を眞向の長堤 蕉村
 摘草や兒のさめてある乳母車 葩蜂
 野遊や臥して見出せし晝の月 松宇
 野遊に片袖縫ひし女かな 子鳴
 野遊や肥馬に跨がる小公子 蘭哉
 野遊や坊主持する二人連 杉亭
 待てどあかぬ鞆韃に兒を賺し去る 吹竿
 芝焼くや煙りなびける丘の家 葩蜂
 草焼いて募る野風を恐れけり 吹竿
 山燒や一天焦げし國境 雲山
 山燒いてあちこち残る松高し 閑雨
 山燒や村は靜に雞の聲 肯穂
 山燒いて山神怒る豪雨哉 子鳴
 屋根替に借りる庄屋の梯子哉 晋風
 屋根替の鼻黒みたる晝餉哉 杉亭
 屋根替や風は南の汐曇 竹栖
 屋根替や柳にからむ鳶の間 雲山
 屋根替や大蜂の巢を取出でし 五樂

入學 卒業式

春の灯

屋根替て洩る月迄も塞ぎけり 蘭哉
 入學や取り揃へたる本の數 吹竿
 撮影に並ぶ曠衣や卒業式 峽石
 卒業式の歌ゆるやかに響き梟 公逸
 卒業や式に辭を讀む貧の孤兒 子鳴
 春の灯の賑ひともる高座哉 晋風
 春の灯のゆれて床しや芝居街 朗月
 稍まで春の灯満てり飛鳥山 蕉村
 人形の影もゆかしや春灯 都雲
 春の灯や繪紙切り抜く手暗ぞ 吹竿
 酒の息大きく春の灯に吐けり 曉雪
 春の灯や君と逢ふ夜の面はゆき 雲山
 春の灯を袖にかくすや庭の門 五樂
 春の灯や廓賑ふ宵の雨 蘭哉
 渡舟場や一つ輝く春灯 竹栖
 福原や館々の春灯 葩蜂
 舟下りて足こそばゆき潮干哉 吹竿
 狩り暮る潮に追はる、干潟哉 杉亭
 磯くさきそだの林や潮干潟 雲山

花見 櫻餅 田樂

上潮の風や、寒し潮干狩 雲山
 鶯一羽鴉十羽や潮干潟 同雨
 潮干舟残されて行く砂の上 閑雨
 潮干狩動くものあり足の裏 同雨
 湯に入る潮干の脛のひり／＼と 蕉村
 舟は皆砂に据はれる潮干哉 鐘朗
 潮干貝どさと投げ出す燈下哉 吞于
 あんなどこに岩現はる潮干哉 葩蜂
 潮干狩女に遠く離れたり 同雨
 客もなき花見座敷や煙草盆 都雲
 皮嗅いで見上ぐる犬や櫻餅 葩蜂
 田樂の味噌に付きけり花の塵 松宇
 田樂や田舎に憎くい酒の味 蛙人
 田樂や旅僧遇す山の宿 青洲
 青饅に馬士が手酌や椽の先 吹竿
 目刺焼く煙や夕の露路の内 雲山
 黄昏を目刺匂ふや裏長屋 蕉村
 焼網を落ちて焦げたる目刺哉 都雲
 南郷や目刺かけたる濱庇 杉亭

潮干狩

目刺干す菘並ぶや濱の家 葩蜂
 取次に立ちて目刺を焦しけり 吹竿
 茄子蒔くや小匙一つを一坪に 蕉村
 苗代や權兵衛去つて月がさす 暮山
 朝夕に親しむ道や苗代田 都雲
 畏くも大内山の蠶飼哉 雲山
 毛蠶を捨て、桑賣る男哉 木公
 起されて桑摘む寝惚眼哉 吹竿
 春愁の懶さに居てほつれ髪 同
 春愁の言葉少なに別れけり 葩蜂
 春愁や病養ふ須磨の宿 同
 春の船に名所廻る日もすがら 吞于
 春の人 曉の寝不足顔や春の人 子鳴
 春の町 春の町暮れて鼓の遠音哉 猶青
 街路樹に雀の唄や春の町 吹竿
 開店の提灯赤し春の町 葩蜂
 雁風呂や雨の潮木のいづり勝 蕉村
 雁風呂や荒磯に靡く夕煙 吹竿
 夕風に雁風呂焚くや外が濱 蕉村

芝能

峰入

開帳

〔宗 教〕
 薪能松風寒むき夜なりけり 蕉村
 芝能やふりさけ見れば七日月 吹竿
 つく息の白さ見ゆるや薪能 雲山
 峰入や行者の笠に花吹雪 露溪
 峰入や身は潔齊の旅衣 雲山
 峰入や先達のみの下駄の音 好石
 一步づ、浮世に遠し順の峰 蕉村
 峰入の道嶮しさや代わらじ 曉紅
 新調の錦の幕やお開帳 閑雨
 開帳に頂いて抽く御籤哉 吹竿
 開帳の燭輝きて尊けれ 朗月
 美しき稚兒練り込むやお開帳 蘭哉
 御佛も都の花に出開帳 五樂
 開帳の稚兒に人練る巷かな 杉亭
 國寶を照り返す灯やお開帳 同
 勿體なや居ながら拜む出開帳 雲山
 開帳や奥殿暗き法の雨 同
 開帳や頭上げ得ぬお婆さん 蕉村

雁風呂

雁風呂や雨の潮木のいづり勝 蕉村
 雁風呂や荒磯に靡く夕煙 吹竿
 夕風に雁風呂焚くや外が濱 蕉村

十三詣

自ら頭さがるや御開帳 同
ゆる、燈に御像尊しお開帳 葩蜂
途に會ふ友も十三詣かな 吹竿

〔動物〕

猫の戀

戀遂げぬ猫もあんな夜もすがら 雲山
猫さかる女三の宮の渡殿かな 杉亭
月暈や猫の戀する堀の上 葩蜂
戀猫の冷めたく覗く戸口哉 春宵
戀猫や今酣の露路の闇 同
帯 結ぶ人に戯れつく子猫哉 吹竿
懷に貫ふて戻る子猫哉 同
押合ふて乳飲んで居る子猫哉 蕉村
猫の子の 一ついつしか失せに鼻 都雲
脱毛追て轉るび轉びつ子猫哉 みのる
猫の子のまつはる裾や日南椽 雲山
鈴下げし子猫眠るや緋蒲團に 閑雨
石女の頬摺やさし子猫哉 杉亭
うよ／＼と固り寝たる子猫哉 葩蜂

猫の子

自ら頭さがるや御開帳 同
ゆる、燈に御像尊しお開帳 葩蜂
途に會ふ友も十三詣かな 吹竿

鳥の巢

耕作の間に添乳や揚げ雲雀 猶青
蹴突いて仰ぐ妙義や揚雲雀 同
飛機過ぎて野は静なり揚雲雀 同
青空に聲静まりぬ舞雲雀 葩蜂
野に寝れば眩し日射し雲雀啼く 吹竿
大木を見上げ居る子や鴉の巢 葩蜂
高枝に一羽見張れる巢鳥かな 同
伐らんずる大樹を後に巢立鳥 吹竿
朝風に軒の雀巢立ちけり 雲山
巢立鳥今日晴雲の始めなり 杉亭
深草や雀交りて竹霞む 同
宮裏の日向の森や鳥交る 閑雨
一日づ、野も色めきて鳥交る 蘭哉
圓窓に影面白や鳥交る 幾京
鳥交る門見て入るや玉子買 吹竿
交みながら雀の轉ぶ藁家哉 雲山
鳥交む晝を霞むや野の藁家 葩蜂
巢立して羽ためすらし雀の子 五樂
飛を見て巢に戻りけり雀の子 蘭哉

鳥交る

自ら頭さがるや御開帳 同
ゆる、燈に御像尊しお開帳 葩蜂
途に會ふ友も十三詣かな 吹竿

巢立鳥

耕作の間に添乳や揚げ雲雀 猶青
蹴突いて仰ぐ妙義や揚雲雀 同
飛機過ぎて野は静なり揚雲雀 同
青空に聲静まりぬ舞雲雀 葩蜂
野に寝れば眩し日射し雲雀啼く 吹竿
大木を見上げ居る子や鴉の巢 葩蜂
高枝に一羽見張れる巢鳥かな 同
伐らんずる大樹を後に巢立鳥 吹竿
朝風に軒の雀巢立ちけり 雲山
巢立鳥今日晴雲の始めなり 杉亭
深草や雀交りて竹霞む 同
宮裏の日向の森や鳥交る 閑雨
一日づ、野も色めきて鳥交る 蘭哉
圓窓に影面白や鳥交る 幾京
鳥交る門見て入るや玉子買 吹竿
交みながら雀の轉ぶ藁家哉 雲山
鳥交む晝を霞むや野の藁家 葩蜂
巢立して羽ためすらし雀の子 五樂
飛を見て巢に戻りけり雀の子 蘭哉

鳥の子

耕作の間に添乳や揚げ雲雀 猶青
蹴突いて仰ぐ妙義や揚雲雀 同
飛機過ぎて野は静なり揚雲雀 同
青空に聲静まりぬ舞雲雀 葩蜂
野に寝れば眩し日射し雲雀啼く 吹竿
大木を見上げ居る子や鴉の巢 葩蜂
高枝に一羽見張れる巢鳥かな 同
伐らんずる大樹を後に巢立鳥 吹竿
朝風に軒の雀巢立ちけり 雲山
巢立鳥今日晴雲の始めなり 杉亭
深草や雀交りて竹霞む 同
宮裏の日向の森や鳥交る 閑雨
一日づ、野も色めきて鳥交る 蘭哉
圓窓に影面白や鳥交る 幾京
鳥交る門見て入るや玉子買 吹竿
交みながら雀の轉ぶ藁家哉 雲山
鳥交む晝を霞むや野の藁家 葩蜂
巢立して羽ためすらし雀の子 五樂
飛を見て巢に戻りけり雀の子 蘭哉

鶯

鶯を右と左の山路かな 泗水
鶯や手洗ひ鉢の薄氷 雲山
匙とりて初音にさめし紅茶哉 都雲
鶯や殿上人の歌合せ 猶青
金閣寺入れば鶯啼いて居る 同
鶯の高音に琴の亂れかな 杉亭
鶯に寫經の筆の鈍りけり 蕉村
往來をひらりとと燕かな 猶青
岩燕飛ぶや華嚴の虹のなか 朗月
電線に光る雫や濡れ燕 同
燕に晝は閑なる廓かな 吞宇
閨怨の婦見て涙あり巢の燕 鐘朗
乙鳥のひらりと返す街かな 幾京
乙鳥飛ぶや雨前の大御堂 三萬石
川上に虹の輪遠し飛ぶ燕 葩蜂
つう／＼と柳を交はす燕哉 同
金殿の軒に巢をくふ燕かな 露溪
啼くや雲雀麥生を渡る風温く 松宇
一つ家の裏も表も雲雀かな 雲山

燕

耕作の間に添乳や揚げ雲雀 猶青
蹴突いて仰ぐ妙義や揚雲雀 同
飛機過ぎて野は静なり揚雲雀 同
青空に聲静まりぬ舞雲雀 葩蜂
野に寝れば眩し日射し雲雀啼く 吹竿
大木を見上げ居る子や鴉の巢 葩蜂
高枝に一羽見張れる巢鳥かな 同
伐らんずる大樹を後に巢立鳥 吹竿
朝風に軒の雀巢立ちけり 雲山
巢立鳥今日晴雲の始めなり 杉亭
深草や雀交りて竹霞む 同
宮裏の日向の森や鳥交る 閑雨
一日づ、野も色めきて鳥交る 蘭哉
圓窓に影面白や鳥交る 幾京
鳥交る門見て入るや玉子買 吹竿
交みながら雀の轉ぶ藁家哉 雲山
鳥交む晝を霞むや野の藁家 葩蜂
巢立して羽ためすらし雀の子 五樂
飛を見て巢に戻りけり雀の子 蘭哉

雲雀

耕作の間に添乳や揚げ雲雀 猶青
蹴突いて仰ぐ妙義や揚雲雀 同
飛機過ぎて野は静なり揚雲雀 同
青空に聲静まりぬ舞雲雀 葩蜂
野に寝れば眩し日射し雲雀啼く 吹竿
大木を見上げ居る子や鴉の巢 葩蜂
高枝に一羽見張れる巢鳥かな 同
伐らんずる大樹を後に巢立鳥 吹竿
朝風に軒の雀巢立ちけり 雲山
巢立鳥今日晴雲の始めなり 杉亭
深草や雀交りて竹霞む 同
宮裏の日向の森や鳥交る 閑雨
一日づ、野も色めきて鳥交る 蘭哉
圓窓に影面白や鳥交る 幾京
鳥交る門見て入るや玉子買 吹竿
交みながら雀の轉ぶ藁家哉 雲山
鳥交む晝を霞むや野の藁家 葩蜂
巢立して羽ためすらし雀の子 五樂
飛を見て巢に戻りけり雀の子 蘭哉

雁歸る

耕作の間に添乳や揚げ雲雀 猶青
蹴突いて仰ぐ妙義や揚雲雀 同
飛機過ぎて野は静なり揚雲雀 同
青空に聲静まりぬ舞雲雀 葩蜂
野に寝れば眩し日射し雲雀啼く 吹竿
大木を見上げ居る子や鴉の巢 葩蜂
高枝に一羽見張れる巢鳥かな 同
伐らんずる大樹を後に巢立鳥 吹竿
朝風に軒の雀巢立ちけり 雲山
巢立鳥今日晴雲の始めなり 杉亭
深草や雀交りて竹霞む 同
宮裏の日向の森や鳥交る 閑雨
一日づ、野も色めきて鳥交る 蘭哉
圓窓に影面白や鳥交る 幾京
鳥交る門見て入るや玉子買 吹竿
交みながら雀の轉ぶ藁家哉 雲山
鳥交む晝を霞むや野の藁家 葩蜂
巢立して羽ためすらし雀の子 五樂
飛を見て巢に戻りけり雀の子 蘭哉

春の鳥

耕作の間に添乳や揚げ雲雀 猶青
蹴突いて仰ぐ妙義や揚雲雀 同
飛機過ぎて野は静なり揚雲雀 同
青空に聲静まりぬ舞雲雀 葩蜂
野に寝れば眩し日射し雲雀啼く 吹竿
大木を見上げ居る子や鴉の巢 葩蜂
高枝に一羽見張れる巢鳥かな 同
伐らんずる大樹を後に巢立鳥 吹竿
朝風に軒の雀巢立ちけり 雲山
巢立鳥今日晴雲の始めなり 杉亭
深草や雀交りて竹霞む 同
宮裏の日向の森や鳥交る 閑雨
一日づ、野も色めきて鳥交る 蘭哉
圓窓に影面白や鳥交る 幾京
鳥交る門見て入るや玉子買 吹竿
交みながら雀の轉ぶ藁家哉 雲山
鳥交む晝を霞むや野の藁家 葩蜂
巢立して羽ためすらし雀の子 五樂
飛を見て巢に戻りけり雀の子 蘭哉

鳥雲に入

耕作の間に添乳や揚げ雲雀 猶青
蹴突いて仰ぐ妙義や揚雲雀 同
飛機過ぎて野は静なり揚雲雀 同
青空に聲静まりぬ舞雲雀 葩蜂
野に寝れば眩し日射し雲雀啼く 吹竿
大木を見上げ居る子や鴉の巢 葩蜂
高枝に一羽見張れる巢鳥かな 同
伐らんずる大樹を後に巢立鳥 吹竿
朝風に軒の雀巢立ちけり 雲山
巢立鳥今日晴雲の始めなり 杉亭
深草や雀交りて竹霞む 同
宮裏の日向の森や鳥交る 閑雨
一日づ、野も色めきて鳥交る 蘭哉
圓窓に影面白や鳥交る 幾京
鳥交る門見て入るや玉子買 吹竿
交みながら雀の轉ぶ藁家哉 雲山
鳥交む晝を霞むや野の藁家 葩蜂
巢立して羽ためすらし雀の子 五樂
飛を見て巢に戻りけり雀の子 蘭哉

呼子鳥

順禮の笈脱ぐ宿や呼子鳥 杉亭

山雲

山雲に道塞がれて呼子鳥 蘭哉

呼子鳥

呼子鳥我より外に人もなし 吹竿

山姥

山姥の住みしあたりや呼子鳥 蕉村

百千鳥

百千鳥高く外れけり午砲臺 石韋

切株

切株に煙草休みや百千鳥 吹竿

百千鳥

百千鳥樂し嬉しと鳴くなめり 同

神木

神木の下掃く禰宜や百千鳥 峽石

山鳥

山鳥や旭に映る小松原 雲山

山鳥

山鳥の尾を濡しゆく谷間哉 都雲

山鳥

山鳥のおろの鏡や谷の月 杉亭

雉子

雉子啼くや繼子責なむ杣の妻 木公

朝燒

朝燒の雲の赤さや雉子の聲 猶青

雉子

雉子飛ぶや眼下に杉の溪黒し 同

宿借

宿借らん里は何處ぞ夕雉子 吹竿

地軸

地軸揺ぐ夜半物凄し雉子の聲 蕉村

石を切る

石を切る舒返しやきじの聲 同

賞ひ

賞ひ乳急ぐ山路や雉子の聲 子鳴

山寺

山寺の朝勤行や雉子の聲 雲山

白魚

片羽で犬羽叩くや打たれ雉子 閑雨

白魚

白魚や紅の着きたる箸の先き 雲山

網も

網もれて白魚こぼるゝ小舟哉 葩蜂

落日

落日に小鮎閃めく早瀬かな 吹竿

若鮎

若鮎や散り浮く花に戯れて 蕉村

若鮎

若鮎の淺瀬の笹を揺らしけり 子鳴

朝市

朝市や鮎の際の櫻鯛 猶青

ちり鍋

ちり鍋の匙に掬ふや櫻鯛 杉亭

酒を呼

酒を呼ぶ樓の灯赤し櫻鯛 蕉村

鮎割

鮎割くや濱風臭き陽の莖 葩蜂

大森

大森や戸板の上の小蛤 晋風

濱茶屋

濱茶屋や蛤描く腰障子 吹竿

蛤の殻

蛤の殻におかしや蛤細工 杉亭

深川

深川や蛤鍋匂ふ繩のれん 蕉村

燒蛤

燒蛤がくと崩るゝ爐火埃り 葩蜂

膝迄

膝迄の肘迄の水蛭採る 吹竿

晝近く

晝近く起きし日曜や蛭汁 葩蜂

世に處

世に處する術もがうなの氣輕哉 幾京

寄居蟲

寄居蟲やコトノ歩く桶の底 吹竿

寄居蟲

寄居蟲や借家と見え住ひぶり 蘭哉

足音

足音に轉がり落ちしがうな哉 葩蜂

水鏡

水鏡不圖蜷に腫移しけり 吹竿

水を切る

水を切る笊の豆腐や夕田螺 晋風

草の葉

草の葉をかませて釣る大田螺 吹竿

夕月

夕月を田螺鳴くなり靄の底 同

土吐

土吐かす桶の田螺の鳴く夜哉 雲山

税苛

税苛らき村の瘦田や鳴く田螺 葩蜂

月暈

月暈や風ぬるうして田螺鳴く 杉亭

物音

物音や田螺靜かに蓋の泡 子鳴

澄む

澄む月に歌奉る田螺かな 蘭哉

櫻貝

櫻貝きしやごと並び別の箱 閑雨

蛇出穴

蛇出穴 穴を出てすぐ殺されし蝮かな 吞于

龜鳴く

龜鳴いて月うす曇る堀江哉 葩蜂

蛙

蛙 獨り乗るしまひ渡舟や遠蛙 同

ハタ

ハたと止み又鳴き出す蛙かな 猶青

遠蛙

遠蛙星夜淋しく戻りけり 葩蜂

蜜蜂

蜜蜂の蜜吸ふ尻の動きかな 吞于

蝶

蝶 蜂一つ局が部屋の騒ぎ哉 蕉村

蝶

蝶 打ちそらす蜂に狼狽え走り鼻 吹竿

蝶

蝶 朝風に花を抜け行蝶々かな 雲山

蝶

蝶 蝶々の花粉付けたり舞衣 同

蝶

蝶 蝶々やゆるき流れを飛を行く 朗月

蝶

蝶 欄干のきほしに止る蝶々かな 同

蝶

蝶 蝶々の眠りをさます草の雨 竹雨

蝶

蝶 蝶高くもつれて寫る野川哉 葩蜂

蝶

蝶 蝶々や己が影戀ふ潦 吹竿

蝶

蝶 蝶舞ふや竿に干されし花衣 蕉村

蝶

蝶 客足らで動か馬車や蛇の飛ぶ 吹竿

蝶

蝶 春の蚊の音なく來て刺しにけり 葩蜂

蝶

蝶 手枕に蚊の鳴く春となり鼻 吹竿

梅

梅 貸筆の穂先ちぎれて梅の宿 峽石

梅

梅 月三更梅の影ふむ遊子哉 杉亭

梅

梅 梅かほる里の闇路や人の聲 都雲

梅

梅 師の門を叩けば梅の薫りけり 雲山

〔植 物〕

呼子鳥

順禮の笈脱ぐ宿や呼子鳥 杉亭

山雲

山雲に道塞がれて呼子鳥 蘭哉

呼子鳥

呼子鳥我より外に人もなし 吹竿

山姥

山姥の住みしあたりや呼子鳥 蕉村

百千鳥

百千鳥高く外れけり午砲臺 石韋

切株

切株に煙草休みや百千鳥 吹竿

百千鳥

百千鳥樂し嬉しと鳴くなめり 同

神木

神木の下掃く禰宜や百千鳥 峽石

山鳥

山鳥や旭に映る小松原 雲山

山鳥

山鳥の尾を濡しゆく谷間哉 都雲

山鳥

山鳥のおろの鏡や谷の月 杉亭

雉子

雉子啼くや繼子責なむ杣の妻 木公

朝燒

朝燒の雲の赤さや雉子の聲 猶青

雉子

雉子飛ぶや眼下に杉の溪黒し 同

宿借

宿借らん里は何處ぞ夕雉子 吹竿

地軸

地軸揺ぐ夜半物凄し雉子の聲 蕉村

石を切る

石を切る舒返しやきじの聲 同

賞ひ

賞ひ乳急ぐ山路や雉子の聲 子鳴

山寺

山寺の朝勤行や雉子の聲 雲山

白魚

片羽で犬羽叩くや打たれ雉子 閑雨

白魚

白魚や紅の着きたる箸の先き 雲山

網も

網もれて白魚こぼるゝ小舟哉 葩蜂

落日

落日に小鮎閃めく早瀬かな 吹竿

若鮎

若鮎や散り浮く花に戯れて 蕉村

若鮎

若鮎の淺瀬の笹を揺らしけり 子鳴

朝市

朝市や鮎の際の櫻鯛 猶青

ちり鍋

ちり鍋の匙に掬ふや櫻鯛 杉亭

酒を呼

酒を呼ぶ樓の灯赤し櫻鯛 蕉村

鮎割

鮎割くや濱風臭き陽の莖 葩蜂

大森

大森や戸板の上の小蛤 晋風

濱茶屋

濱茶屋や蛤描く腰障子 吹竿

蛤の殻

蛤の殻におかしや蛤細工 杉亭

深川

深川や蛤鍋匂ふ繩のれん 蕉村

燒蛤

燒蛤がくと崩るゝ爐火埃り 葩蜂

膝迄

膝迄の肘迄の水蛭採る 吹竿

晝近く

晝近く起きし日曜や蛭汁 葩蜂

世に處

世に處する術もがうなの氣輕哉 幾京

寄居蟲

寄居蟲やコトノ歩く桶の底 吹竿

寄居蟲

寄居蟲や借家と見え住ひぶり 蘭哉

足音

足音に轉がり落ちしがうな哉 葩蜂

水鏡

水鏡不圖蜷に腫移しけり 吹竿

水を切る

水を切る笊の豆腐や夕田螺 晋風

草の葉

草の葉をかませて釣る大田螺 吹竿

夕月

夕月を田螺鳴くなり靄の底 同

土吐

土吐かす桶の田螺の鳴く夜哉 雲山

税苛

税苛らき村の瘦田や鳴く田螺 葩蜂

月暈

月暈や風ぬるうして田螺鳴く 杉亭

物音

物音や田螺靜かに蓋の泡 子鳴

澄む

澄む月に歌奉る田螺かな 蘭哉

櫻貝

櫻貝きしやごと並び別の箱 閑雨

蛇出穴

蛇出穴 穴を出てすぐ殺されし蝮かな 吞于

龜鳴く

龜鳴いて月うす曇る堀江哉 葩蜂

蛙

蛙 獨り乗るしまひ渡舟や遠蛙 同

ハタ

ハたと止み又鳴き出す蛙かな 猶青

遠蛙

遠蛙星夜淋しく戻りけり 葩蜂

蜜蜂

蜜蜂の蜜吸ふ尻の動きかな 吞于

背戸暮き唯だ梅が香の薫る也 猶青
 梅林や馬乗り捨つる冠木門 同
 別荘の壊れしまゝや梅の咲く 同
 梅咲くや障子一重に絲繰る音 同
 湘南の春静かなり梅の花 蕉村
 梅ヶ枝につるしてぢぬ目白籠 同
 月の梅抱き冷たきマンドリン 葩蜂
 船酔ひの妻いたはるや梅の宿 同
 紅梅の雨に散るなり小町塚 曉雪
 紅梅に寄せて参らす文箱かな 雲山
 紅梅に張板もたす女かな 同
 紅梅や柴折戸を出る文使ひ 猶青
 紅梅や燃ゆる思を歌に詠む 吹竿
 紅梅や女匿まふ草の宿 同
 落椿開けずの門の門に 晋風
 黒塀や雀の落すぬれ椿 閑雨
 梳づる日も長閑なり島椿 幾京
 大雨の椿散らして明けにけり 猶青
 番天の夢破れけり落椿 暮山

紅椿湘南に病む女かな 青年
 巖を嚙む流れに白し山椿 好石
 僧正の遷化ありし日椿落つ 木公
 落ちくゞて水なき溝の椿哉 都雲
 大佛の御手に散りけり白椿 桂南
 白きには白き寂あり椿落 丁山
 手折らんとすれば袂に散る椿 みのる
 落椿拾つてほめて捨にけり 五樂
 姉妹絲に通すや落椿 杉亭
 椿咲く垣根の内や琴の主 蘭哉
 椿落ちて緋鯉の沈む水輪哉 吹竿
 まゝごとの庭に落つる椿かな 同
 落椿ゆるく廻りて流れけり 同
 静けさの庭に音あり落椿 雲山
 溪椿石に激する水白し 朗月
 温泉に集ふ島の女や紅椿 葩蜂
 庭椿一つ落ちたる闇の音 同
 柳分けて屋臺の店を覗きけり 雲山
 雨煙り湖岸に模糊の柳かな 露溪

紅梅

椿

柳

川端に續く柳のうねりかな 泗水
 青柳や町家に並ぶ醫師の門 吹竿
 青柳や細き灯しの賣卜者 猶青
 伸る日と共に伸びたる柳かな 蛙人
 誰待つや柳の下の澁蛇の目 同
 鳩ほつほ輪になる兒等や門柳 葩蜂
 家々のみな相似たる柳かな 同
 積んで來ぬ野菜車に桃一把 松宇
 地酒酌む娘艶なり桃の宿 翠景
 下枝に鎌掛けてあり桃の花 五樂
 薄ばたに浮たる桃の蕾かな 朗月
 桃散るや西日明るき畑の家 葩蜂
 生温き風の吹く日や桃の散る 雲山
 鮎鳴く竹垣低し李花の月 葩蜂
 汲み置湯に焚く水や李散る 雲山
 海棠や黛作る局部屋 五黄
 海棠に傾國の美人品す哉 木公
 海棠の雨に朝寝の遊女哉 吹竿
 散りくゞて風面白き櫻かな 猶青

櫻散るや筆取り出す鎧武者 猶青
 奥庭の櫻さくらの灯かな 閑雨
 舞姫の翳す扇や糸櫻 都雲
 鐘樓や右に左に初櫻 幾京
 山内も更けて静かや散る櫻 雲山
 曉の風や、寒し初櫻 同
 酔ひ伏よしや櫻の下の小半日 同
 初櫻油断の眼驚かす 吹竿
 雨の日の櫻しづかに暮れに 蛙人
 太刀を佩く僧に逢ひけり山櫻 曉雪
 山櫻有明の月すけて見ゆ 猶青
 山深く入りてなつかし遅櫻 都雲
 温泉の山や都に知らぬ遅櫻 杉亭
 なつかしや人なき雨の遅櫻 吹竿
 奥庭に並ぶ灯や遅櫻 閑雨
 川上や肥船繫ぐ遅櫻 同
 高樓に暈着る月や遅櫻 葩蜂
 花に一日暇なき身の暇かな 吹竿
 花に暮れて戻れば人の置手紙 同

桃の花

李の花

海棠

櫻

花

山櫻

遅櫻

初櫻

散る花に手拭被ぶる女かな 吹竿
 又着きし葉書や京の花便り 都雲
 花に寝て花に起きたる日數哉 同
 發句添へし花の便りの葉書哉 雲山
 石段を上りし友や花に呼ぶ 石章
 車掌臺別れ騒ぐや花の友 閑雨
 古びたる石も春なり花の影 五樂
 花に埋もる御陵の山や明けてゆく みのる
 落ちて行く袖に花散る馬上哉 曉雪
 花の山酔ふて唄ふて下りけり 蕉村
 莫蘆敷いて我天下なり花の山 同
 子を負ひし風船賣りや花吹雪 吹竿
 大溝に集ひ動かぬ落花哉 閑雨
 公園の小溝々々に落花哉 同
 片隅にたまる落花や雨の庭 同
 御社や落花に灯る石燈籠 葩蜂
 水打つて塵一つなし藤の茶屋 月湖
 かけ橋や上から覗く藤の花 蛙人
 啄木鳥のこぼして行きの藤の花 蘭哉

山吹
 藤咲くや内藤様の御門内 蕉村
 鯉にやる麩を吊しけり藤の棚 雲山
 波立て、麩を追ふ鯉や藤の花 葩蜂
 山吹や崖の崩れし儘に咲く 雲山
 山の井に崖の山吹うつるいぬ 同
 山吹や佗び人獨り酒を酌む 三萬石
 山吹の水影くづす家鴨かな 猶青
 山吹の籬みぐらす伏屋かな 蕉村
 山吹の散りて小川の瀬の浅し 子鳴
 山吹や籬の外は田と畑 都雲
 山吹や風に渦巻く潦 杉亭
 山吹や干し傘並ぶ寮の庭 葩蜂
 外風呂や葡萄の花を見て浸る 吹竿
 土手芝の中に燃え咲く木瓜の花 都雲
 花木瓜や枝にかゝれる捨草鞋 吹竿
 道芝の中に木瓜咲く峠かな 蕉村
 木瓜咲いて垣覗かる、新家哉 杉亭
 町遠き驛の官舎や木瓜の花 葩蜂
 雷鳥のたちて石楠花散らし 鳧吹竿

辛夷 山裾に只暮れ残る辛夷かな 雲山
 由緒ある朱門の寺や花辛夷 杉亭
 學遂げて辛夷の郷に戻りけり 幾京
 花辛夷土産の苞に折添へて 肯穂
 鳥飛べば辛夷崩れて山静か 蘭哉
 夷辛散るや風生温き寺の晝 葩蜂
 盆栽の松の花散る壘哉 同
 お手植の松すくくと若緑 雲山
 緑立つや下枝に古き松ふぐり 吹竿
 水かげの紅きは花か若緑 猶青
 蒲公英の丘に暫時をうつゝなる 都雲
 蒲公英や清き流れの水車 鶴歩
 貸莫蘆に辨當開く董かな 雲山
 處女といふ誇らしさあり董嗅ぐ 葩蜂
 葎簧張る茶屋のうしろや櫻草 蕉村
 櫻草の束浸けてあり洗面器 吹竿
 山僧の戀淡くして山葵かな 杉亭
 よく利いた山葵に笑ふ涙哉 雲山
 山葵漬呼べば發車の恨かな 朗月

葱の花 雨に暮る、農曇淋し葱の花 元直
 湧く水に氷もはらで芹白し 蘭哉
 葱の花一茶が庵に浴ふあたり 猶青
 花葱や十坪に餘る裏の畑 幾京
 覺悟して這入る小川の根芹哉 雲山
 摘み残す芹や繁りて花白し 五樂
 芹つむや足袋悉く泥まみれ 朗月
 水郷に芹の香高き膾かな 杉亭
 ぱつと散る小魚を見たり芹をっせ 肯穂
 芹摘の草履冷たき濕りかな 晋風
 芹つむやぐらつく石に足かき 吹竿
 芹洗ふや一ト筋ぬけて水迅し 葩蜂
 田に落す笥の水や芹の花 同
 摘を來た根芹の匂ふくりやかな 猶青
 木曾馬の小附にしる芽獨活哉 木公
 獨活の香や山家育ちと思わぬ 蛙人
 一山の詩僧酒僧や獨活膾 杉亭
 獨活掘つて客をもてなす山家哉 蕉村
 獨活掘るや白き地蟲の蠢めける みのる

鶏の藁搔く下の芽獨活哉 雲山
 獨活掘るや鋏外き芽の芳しき 公逸
 熟酔の舌に冷たき酢獨活哉 葩蜂
 草刈の虎杖嚙んで憩ひけり 吹竿
 寝た牛のこちら向きけり 蕨も 雲山
 野火跡に太りて出でし蕨かな 蕉村
 蕨採り蛇見て踵返しけり 吹竿
 長々と伸びし蕨や茨の中 雲山
 蘆の芽や入江に泳ぐ家鴨の子 同
 滿潮や舟底を擦る蘆の角 蕉村
 綱つめて馬繫きけり豆の花 吹竿
 牛放つ埒を境や豆の花 雲山
 隣から這ふて咲きけり豆の花 蘭哉
 畦道に危く踏むや豆の花 杉亭
 村鬻の裏道細し豆の花 葩蜂
 木戸口は菜の花盛りや村芝居 雲山
 菜の花や道を塞いで肥車 吹竿
 菜の花や水車のきしる音遠く 蕉村
 菜の花や向ふに見ゆる文化村 葩蜂

嫁菜 摘み暮れて籠に溢る、嫁菜哉 葩蜂
 一つかみ垣根の嫁菜摘みに 雲山
 暖き手に摘まれたる嫁菜哉 蕉村
 戀塚をめぐりて摘みし嫁菜哉 吹竿
 崖崩れ地肌あらはに露の臺 雲山
 朽ち果て古葉かぶりぬ露の臺 同
 塵搔いて餌あさる雞や露の臺 吹竿
 露の臺踏まれしまゝにほう鼻 同
 雪折の竹その儘や露の臺 蕉村
 藁塚の間にいでぬ露の臺 都雲
 雞に搔き出されけり露の臺 蘭哉
 青麥に乗合馬車の埃かな 吹竿
 捨白を薪に割る日や下萌ゆる 同
 若草や寝牛に似たる石一つ 同
 若草や戀知り初めて羊飼 猶青
 若草に搾りこぼすや牛の乳 杉亭
 若草や雨の度々染まりゆく 五樂
 若草に大宮人の蹴鞠かな 朗月
 若草の土手にはさまる流れ哉 都雲

若草にいさゝか沈む草履かな 葩蜂
 若草に鼻うごめかす小牛哉 雲山
 草の芽に虹立つほどの小雨 曉雪
 萩の芽に晴れ行く雨の滴れり 葩蜂
 水草生ふ 水草生ふ一文渡舟渡しけり 同
 若芝 若芝の踏み心地よき素足かな 同
 海苔 潮引いて匂ふ色香や磯の海苔 蘭哉
 海苔粗朶や品海廻る見張船 子鳴
 引潮や海苔搔ぎ急ぐ粗朶の中 吹竿
 摺り薯に掛たる海苔の青さ哉 朗月
 海苔干すや日のかり來し濱家並 葩蜂
 海苔採るや薄紫の上總山 蕉村
 乾ひ着く磯の小貝や干若布 吹竿
 若布

夏 大花瓶の花萎れけり夏眞晝 みのる
 住み古りて池藻に夏の匂ひ哉 吞于
 忘れかねて見る卯月の吉野山 松宇
 雨の日の數へて多き卯月かな 雲山
 木雪のしきりに落ちぬ庭卯月 朗月
 湖のいさゝか濁る卯月かな 葩蜂

夏之部
 〔時候〕
 君ひとり天路の旅や春霞 五樂
 静けさの庭に音あり落椿 雲山
 行く雁の花に別れし泪かな 杉亭
 思出の涙に月の朧かな 吹竿
 墨堤の櫻ちらしぬ夜半の風 朗月
 かつて句座をともしせし 同
 青牛氏を悼む 晋風
 髻ありし君と覺えて春寒き 同
 ふとちる梅に星のまたゝき 同

〔前置句〕
 市川青牛君追悼句(於朗月居)
 梅ちるや江東の野におしませ 蕉村
 佛の霞みて見ゆる今宵かな 蘭哉
 惜まる、橋の袂や春の雪 都雲

四月 山間の水車明るき四月哉 呑杉亭
 五月 屋根草に蝶飛ぶ五月日和かな 吹竿
 六月 水無月の曇目を射る城下哉 同
 初夏 初夏の竹伐つて引く笕かな 同
 初夏 初夏や葉越したに院の朝灯 猶青
 初夏 初夏の湖にさやけし倒富士 同
 初夏 初夏や漸く青き海の色 同
 初夏 初夏や網に溢引く濱の家 蕉村
 初夏 初夏の光眩ゆき日射しかな 雲山
 初夏 初夏の月亂れたる岬かな 子鳴
 初夏 初夏や木の下蔭の金魚賣 都雲
 夏浅し 夏浅き水に卸すや貸ポト 吹竿
 夏浅し 夏浅しふら／＼伸びる草の蔓 同
 夏至 夏至の間に今年も夏至となりけり 蘭哉
 夏至 夏至の日や一本道に牛車 閑雨
 植付も 植付も濟んで乞けり夏至の雨 幾京
 滞りなく 滞りなく山田も植も夏至の雨 雲山
 忘れ居し 忘れ居し夏至の日を見る曆哉 蕉村

薄暑 夏至の晝泥足乾く框かな 葩蜂
 土用 伸び足らぬ茗荷畠の薄暑哉 同
 大溝に 大溝に土用の水の腐れかな 晋風
 大空の 大空の雲は動かぬ土用かな 蘭哉
 雨三粒 雨三粒落して晴れぬ土用雲 吹竿
 風もなき 風もなき土用の空や鱗雲 肯穂
 青田十里 青田十里土用の草のいきれ哉 芽風
 瑠璃玉の 瑠璃玉の土用三郎五郎かな 杉亭
 山雲に 山雲に稻戦きし土用かな 子鳴
 たつぷり たつぷりと一雨欲しき土用哉 雲山
 照り込 照り込青田ほめたる土用哉 同
 牡丹餅 牡丹餅の腹にもたる、土用哉 葩蜂
 強ひら 強ひられて車に暑し河原道 松宇
 樂隊を 樂隊を犬吠え立つる暑さ哉 呑于
 電車下 電車下りて石疊行く暑さ哉 都雲
 お相手 お相手の烏鴛戦す暑さかな 朗月
 馬すね 馬すねて曳けど動かぬ暑さ哉 蕉村
 松の葉 松の葉の埃りに白む暑さかな 杉亭
 荷車の 荷車の石嚙む音の暑さ哉 同

涼し

寝ころべば 寝ころべば暑き疊や裏二階 吹竿
 暑き日も 暑き日も花瓶に睦む女かな 蘭哉
 夕風に 夕風に雲も動かぬ暑かな 猶青
 祭る首に 祭る首に錆槍光る暑かな 同
 雲じつと 雲じつともの息づまる暑さ哉 葩蜂
 暑き日や 暑き日や脂の垂れたる松の瘤 同
 下手に 下手に吹く笛も涼しや橋の上 松宇
 笛一聲 笛一聲涼しさ流す小舟かな 五樂
 遠くから 遠くから聞えて涼し瀧の音 退司
 涼しさや 涼しさや友待ち合す松並木 紫海
 風に灯を 風に灯をとられて涼し海の月 幾京
 入れ換へ 入れ換へて疊涼しき匂ひ哉 呑于
 涼風に 涼風に銀波揺ぐや下り舟 閑雨
 谷風に 谷風に涼みて急ぐ飛脚哉 同
 召しませ 召しませと茶汲む娘の襟涼し 猶青
 水郷の 水郷の昔間の月に風涼し 同
 涼しさや 涼しさや唯松風の須磨の宿 同
 涼しさや 涼しさや舟べりに聞く琵琶の曲 古城
 涼しさや 涼しさや灯もなき寺の大伽藍 同

暑さ

舟漕げば 舟漕げば涼しき笛の遠音哉 同
 涼しさや 涼しさや葉越しの月が座敷き 杉亭
 朝涼や 朝涼や思はず歩く一里二里 同
 夕涼の 夕涼の床にお江戸の話し哉 同
 谷水の 谷水の音に涼しき温泉宿かな 都雲
 涼しさの 涼しさの風や拂子の動きより 同
 電燈に 電燈に木影涼しき社務所哉 同
 雨涼し 雨涼し竹に灯りし一軒家 葩蜂
 涼しさや 涼しさや脛にこぼる、芋の露 同
 紹を透 紹を透きて腕輪涼しき光哉 同
 涼しさや 涼しさや家をめぐり嵯峨の竹 同
 味方皆 味方皆勝ちて涼しき歸陣かな 曉雪
 須磨寺 須磨寺の小徑や松の風涼し 同
 涼しさや 涼しさや鏡を頬にあて、見る 朗月
 石おきて 石おきて涼しき庭となりけり 同
 涼しさや 涼しさや瀧のしぶきの飛ぶ所 同
 涼しさや 涼しさや月も碎ける池の面 雲山
 涼しさや 涼しさや飛沫のかゝる瀧の茶屋 同
 涼しさや 涼しさや夕濱風に松の聲 同

夏の朝

涼しさや足まで届く波頭 同
抜き放つ正宗に涼味湧きにけり 猶青
涼しさの風切つて行く電車かな 吹竿
涼しさや矢を射る様な流れ水 蕉村
雑兵の月に楯敷く涼みかな 猶青
山寒く夏の曉目覚めけり 吹竿
寢亂の姿涼しき夏の朝 四白
夏の朝障子明けたる座敷哉 笑壺
川風の樓に満ちけり夏の朝 蘭哉
脚を病んで土に馴染む夏の朝 杉亭
箒もちて富士仰ぎけり夏の朝 雲山
朝立の軽るくしき夏の旅 同
郊外に氣を養ふや夏の朝 幾京
蟬鳴かぬうちの散歩や夏の朝 都雲
家々に野風呂煙るや夏夕 蕉村
明け放つ金殿の灯や夏夕 猶青
移り香の女床しや夏夕 同
灯を入れて風よぶ夏の夕かな 同
夏夕蟹提げ戻る裸かな 忍々洞

夏の夕

夏の夜

烟立つ雨後の藁屋や夏夕 閑雨
水やりて蘇る草や夏夕 雲山
色電気灯のカフェーや夏夕 芭蜂
起き出で、夏の夜半の散歩哉 都雲
夏の夜や明けまで橋を往來する 蘭哉
夏の夜の旅装解きたる温泉宿哉 蕉村
夏の夜やしもの、めかき鰻釣り 雲山
夏の夜や床几持出す店の先 吹竿
夏の夜や隕火落ちる由良ヶ崎 芭蜂
搔い卷を抱て寝る子や宵暑し 吹竿
暑き宵ふとうつむけば鼻衄哉 吞于
短夜の陣に將士の假寝かな 四果
短夜や嘶なかばに雞の聲 紫海
短夜を三度蚊焼きて明けにけり 古巢
明易き大戸あくれば入る燕 朗月
明易き夜や窓一つ明けて寝る 曉雪
大雨の小雨となりて明易き 同
短夜のあけを待ちけり病める人 都雲
短夜の汽笛に明けし港かな 同

暑き宵

短夜
明易し

夏寒し

夜の秋
秋近し
秋隣

夏の空

星涼し
夏の月

こゝも又夏の秋なり須磨明石 杉亭
魔の淵や静かに暮れて夏寒し 木公
釣り橋や夏尙寒き木曾の谷 吞宇
静寂の肌犯す風や夏寒し 木公
夏寒や曉静なる峯の寺 芭蜂
流星のしきりに飛ぶや夜の秋 閑雨
更くる夜の空にも見そ秋近し 雲山
秋近き風に小笹の戦ぎかな 朗月
晝顔の末咲小さし秋隣る 同
秋近き風にあふちや古簾 吹竿
仰ぎ見るもの皆眩し夏の空 同

〔天文〕

星涼し更くるがきに瀬鳴り澄む 芭蜂
堀に添ふ溝の匂ひや夏の月 晋風
水貫ふ庵は留守なり夏の月 猶青
旅情きき水のヴェニスや夏の月 同
夏の月流れに舟をまかせけり 幾京
風過ぐる庵に灯のなし夏の月 蘭哉

夏の秋

短夜の下駄間違へて戻りけり 吹竿
短夜やはれ手枕のまゝなり 猶青
短夜や驛長室の釣ランプ 芭蜂
船窓に短夜の波白みけり 同
短夜も時計は寝ねずありにけり 蕉村
旅立の支度する夜を明易き 杉亭
短夜や水郷の夢おぼる氣に 同
短夜の門叩かるゝこともあり 同
短夜の雨に次ぎ足す朝寝哉 雲山
短夜の寝言癖ある男かな 同
媒酌人の話上手に明易き 同
明易き妻戸に響く電車かな 蕉村
遠來の友訪れて明易し 雲山
明易き町起し行く電車かな 吹竿
明易し夜干しの衣の白きより 同
連れて退く女の脚に明易き 同
雑舎に來し狐は逃げて明易き 同
里の子の髪もおどろや夏埃り 吹竿
夏の秋鼻毛しきりにこぼゆき 芭蜂

雲の峯

蚊帽越しに語る親子や夜の月雲山
 簾皆揺れて居るなり夏の月曉雪
 水樓や鎖すに惜しき夏の月五樂
 寄する波磯に碎けて夏の月猶青
 夏の月漣染て上りけり蕉村
 夏の月妹の家まで送りけり芭蜂
 雲の峯海に入る人出づる人雲山
 雲の峯裏に入日の光かな閑雨
 田の中に腰伸す人や雲の峯雲山
 雲の峯五山の鐘に崩れけり蕉村
 海原の果てと見せけり雲の峯同
 雲の峯牛のつそりと起き上る吞宇
 黒潮や帆を呑まんとす雲の峯杉亭
 雲の峯天文臺の晴の旗猶青
 雲の峯藍をたへし日本海同
 隧道を出て鐵橋や雲の峯同
 雲の峯海賊船の行衛かな同
 午後の日に白帆光るや雲の峯吞宇
 山の湖の帆影静かや夏の風子鳴

夏の風

夏の雲
風薫る

月明や松吹き渡る夏の風忍々洞
 夏の風大粒の雨誘ひけり猶青
 吹き抜く灯もなき宿や夏の風吹竿
 矢走まで眞一文字や夏の風杉亭
 砂原に夏の風湧く埃かな曉雪
 聖堂に經書講ずや夏の風蘭哉
 夏の風兩肌ぬいで吹かせけり蕉村
 甲板に時を忘るゝや夏の風雲山
 簾吊る河岸の二階や夏の風芭蜂
 夏の雲時に温泉町を包みけり吹竿
 薫風や窓の下なる小石川晋風
 銀婚を祝すアーチや風薫る蕉村
 戦勝の歸陣や馬首に風薫る猶青
 新刀の土壇拂ひや風薫る同
 釣上げし鯉の躍るや風薫る雲山
 灣口や帆は皆西に風薫る公孫子
 九重の舞樂洩るゝや風薫る肯穂
 鯉を割く大組や風薫る芭蜂
 竹林に人なき卓や風薫る曉雪

青嵐

青東風

麥嵐

薫風に僧一千の讀經哉曉雪
 薫風や一枚拾ふ孔雀の尾芭蜂
 薫風や光こぼるゝ網の魚同
 薫風や湖見て下る駕籠の中吹竿
 明け放つ列車の窓や薫風同
 薫風や皆緋絨三千騎猶青
 鞭打ては悍馬に風の薫りけり同
 青嵐華嚴の飛沫浴びにけり吹竿
 水を抽く芦一莖や青嵐芭蜂
 鞍置かぬ馬上の人や青嵐子鳴
 青東風や松に網干す須磨の家芭蜂
 青東風や芦間はなるゝ鷺一羽吹竿
 高く低くなぐれ雀や麥嵐芭蜂
 夕立に草おのゝきて青みけり子鳴
 夕立の雲ひろがるや富士筑波杉亭
 夕立のおいて行きけり二日月蘭哉
 夕立や落合ふ川の片濁り雲山
 夕立の晴れて美しくし港の灯蕉村
 荒磯の一本松や夕立す朗月

雷

夕立や蟹這ひ上る噉道雲山
 夕立や那須を横りて鹿島灘同
 夕立に馬糞流るゝ山路哉同
 夕立に比良の一角隠れけり同
 茜さす夕立晴れの山河かな都雲
 夕立や着のまゝ、乾く旅衣同
 夕立の亂れて椽を打ちつあり猶青
 夕立や馬の腹帯帯する同
 夕立や鳴り増さるゝ戸樋の音芭蜂
 雷去りてまた店頭のラデオ哉吹竿
 よく饒舌る女黙ははたゝかみ雲山
 磔と止む工女の唄やはたゝま同
 遠雷や電燈の灯の明滅す肯穂
 雷や傳令の一騎衝いて出づ猶青
 見開きて又眠る獅子や雷神同
 名僧が振る拂子より雷の音蕉村
 石室に火を圍み聞く雷雨哉閑雨
 雷雨晴れて星あらはるゝ古江哉同
 遠雷や干瓜かけし軒の稜杉亭

旱

炎天や雀の下りる干飯策 吹竿
炎天を毒消賣の二人行く 猶青
四辻や旱續きの暴れ馬 松宇
瘦せ畑の鍬はね返す早哉 雲山
街路樹のあはれに萎へて早哉 同
井戸に錠かけて幾日や早つぐ 晋風
永旱繩繼ぎ足すや車井戸 蕉村
濠の藻の底に錆びたる早哉 子鳴
名にし負ふ瀧も細りし早哉 同
早して休み續きぬ水車小屋 蘭哉
早雲さすがに残す一顆 杉亭
草萎へて牛の喘へぐや早雲 同
石垣の苔皆離る早かな 猶青
大鳥毛觸れて埃立つ早かな 同
雨跡の佗しく残る早かな 同
旱續く都大路は家ばかり 同
早して海は愈々碧き哉 同
川柳や入日まぎはの夏日影 閑雨
地に印す大煙突や夏の影 幾京

夏の影

船干せば夏の影濃き砂上哉 曉雪
片よりて道行く人や夏の影 雲山
原中に夏の影濃き一樹かな 蕉村
アカシヤのそよとも揺れず夏の影 葩蜂
塀に木に夏の影濃し日の匂ひ 吹竿
階前の梧桐婆娑たり夏の影 杉亭

富士の雪解

〔地理〕
齒にもや富士の裾野の雪解水 蕉村
富士の雪解けて裾野の湖巡り 雲山
朝富士の色濃く晴き雪解けち 葩蜂
夏山や雨を含みて風騒ぐ 松宇
むくくくと雲湧く夏の山深し 雲山
雲湧て趣得たり夏の山 青牛
大空は瑠璃に明けたり夏の山 猶青
濡色に明けてさやけし夏の山 同
漠々と下界は雲よ夏の山 同
吹く風に緑波打つなり夏の山 曉紅
夏山を仰いで浸る温泉哉 吹竿

夏の山

五月山

夏山や瀧のしるべの札新た 朗月
夏山や登りくくして雲の上 蕉村
富士筑波連ねて近し五月山 肯穂
開け放つ披露の宴や五月山 幾京
禽飛んで谷風寒し五月山 蘭哉
我家に迫るが如し五月山 都雲
雨模様全山動く五月山 閑雨
大原女の行手に迫る五月山 碧村
雨に迂る赤土逕や五月山 吹竿
五月山雨にぼかして暮迫る 雲山
雲湧くや鼻の先なる五月山 曉雪
雨衝いて水見の衆や五月川 吹竿
夏川や夜釣に今日も曉の鐘 五樂
ひたくと月に白馬や夏の川 子鳴
水上は雲斗りなり夏の川 杉亭
遊ぶ子の皆ふくり出し夏の川 吞于
夏川や月に追ひ込む裸馬 吹竿
夏海 錢投げて鮑とらすや夏の海 同
土用浪 大龜に酒やる濱や土用浪 朗月

瀧殿

土用浪夜中に宿を替へにけり 五樂
川口によする芥や土用浪 葩蜂
緑蔭に瀧の半は隠れたり 都雲
短冊に瀧畫かれてすがくし 同
大瀧や雲に入りたる小山伏 蘭哉
瀧しぶき華嚴は雲に隠れけり 杉亭
千丈の瀧に隴の響かな 子鳴
白雲や瀧の音遠く聞きすます 忍々洞
瀧しぶき浴びて粟立つ肌哉 雲山
毛の孔も膨る、瀧のしぶき哉 蕉村
しぶき浴びて千丈の瀧見上げ 猶青
吹き飛す帽子に瀧のしぶき哉 同
瀧殿の障子濡りや夕灯 葩蜂
登山人にラムネ漬けある泉哉 晋風
笠脱いで靈峰仰ぐ泉かな 幾京
滾々と石槽の泉流れけり 三省
駕籠下りて兩手にむすぶ泉哉 蘭哉
竹逕は十歩に盡きて泉哉 杉亭
大牛の音たて、吸ふ泉かな みのる

泉

白雲の中に音する泉かな 五樂
 祠の灯光る泉や洞の奥 閑雨
 峠茶屋裏で肌ふく泉かな 同
 歌も詩も湧き出づる山の泉哉 蕉村
 山百合の影美しき泉かな 同
 山中に暮れて明るき泉かな 同
 澄む底に砂ふいてる泉哉 葩蜂
 山蔭に晝の星見る泉かな 同
 割れ岩や草に清水の迸り 晋風
 木苺の熟してありぬ苔清水 蕉村
 名山の清水に毛穴ふくれけり 同
 呼樋して月を浮かせる清水哉 蘭哉
 醍醐味は初瀬の寺の清水かな 杉亭
 山苺落ちて溢れし清水かな 同
 名も知らぬ鳥の啼き苔清水 五樂
 木立出て清水の聲を聞にけり 忍々洞
 仰ぎ見る杉の根元や清水湧く 雲山
 掬ふ手を半分漏る、清水哉 同
 誰か撒きし米粒沈む清水哉 同

夏野
 巖角に踏ん張つて汲む清水哉 吹竿
 絶壁の緑り風呼ぶ清水哉 子鳴
 缺け古茶碗に酌むや岩清水 同
 釜風呂に引く眞清水や山の宿 葩蜂
 石垣に柄杓さしある清水哉 同
 雨迫る夏野飛ばしぬ裸馬 猶青
 雲影の草を掠むる夏野哉 吹竿
 幾度か蛇に怖ぢたる夏野哉 雲山
 雨一過夏野の千草蘇へる 朗月
 村雨や青田を急ぐ破れ笠 閑雨
 吹くや夕べ十萬石の青田風 朗月
 青田道口笛軽く戻りけり 吞于
 松並木見通す月の青田哉 同
 月待ちて青田風ある端居哉 子鳴
 うねり行く青田の果や帆掛船 蛙人
 雨からり晴れて青田の月夜哉 猶青
 走る汽車窓一パイの青田かな 同
 里富んで水足と青田展けたり 同

〔人事〕

端午 恩賜刀今は遺品の端午哉 猶青
 端午祝ふ此處に子福者子煩惱 同
 總領の子に太刀祝ふ端午哉 葩蜂
 初孫に端午を祝ふ酒宴哉 蕉村
 菖蒲太刀佩いて跨がる木馬哉 吹竿
 菖蒲湯 晝閑に菖蒲片よる湯槽かな 葩蜂
 青天に幟大きく吹かれけり 同
 夕映や屋根に垂れたる大幟 同
 五月鯉をりく窓にかけり 同
 心地よき風に勢ふや鯉幟 雲山
 來合して一つつまみぬ嘉定喰 月洲
 敗軍の兵は語らず嘉定喰 都雲
 婚殿の約束なれり嘉定喰 幾京
 水飯の髭に残るや嘉定喰 杉亭
 一座皆笑ふて濟ます嘉定喰 雲山
 打敗けて片腹痛し嘉定喰 蕉村
 祝ひまつる歌短冊や地久節 杉亭
 川止にあひてものうき旅寝哉 都雲

更衣
 傾城の肩の細りや更衣 五黄
 衣更へて翡翠のかさし選び 猶青
 衣更へて大姿見を拭ひけり 同
 衣更へて嬉しき子等の背丈哉 同
 衣更へて父者の遺品を偲び 子鳴
 衣更へて日曜の日や髪を理す 朗月
 衣更へて立居に軽き心かな 蕉村
 衣更へて軽き袂にふと寒し 吞于
 これはさて身丈短かや更衣 公孫子
 人形も衣更へるや飾窓 葩蜂
 衣更へて帯高々と結びけり 雲山
 衣更へて樟腦臭し古女房 吹竿
 衣更へて尼僧の眉の青さかな 杉亭
 襷して腕の白さよ初給 吹竿
 初給固き疊に座りけり 同
 薄色の給目立つや電車道 閑雨
 セルを着て帯ゆるやかに結ぶ 吞于
 潮先に単衣まつはる歩みかな 都雲
 単衣着て背中に海の風孕む 同

單衣着て這ふた子供は歩き鳧
 藍の香の高きは嫁の單衣哉 子 鳴
 糊強くつんつるてんの單衣哉 蕉 村
 かくされぬ乳の膨れし單衣哉 蘭 哉
 須磨寺の松風寒き單衣かな 葩 蜂
 水色に千鳥染め抜く浴衣哉 古 巢
 浴衣着て舟漕ぐ人の袖輕し 露 溪
 浴衣着て馬に跨かる山路哉 都 雲
 電燈を避けて浴衣の二人哉 雲 山
 夜目遠目美人の多き浴衣哉 同
 子持とは見えぬ若さの浴衣哉 同
 大柄の浴衣よく似合ふ女哉 葩 蜂
 瀧道を四五人づれや貸浴衣 同
 帷子や少しつばる肌觸り 同
 羅に目立つ美人の腕輪かな 蕉 村
 羅や袂に重き琴の爪 猶 青
 羅や匂ふ美人の丁字風呂 子 鳴
 戸をさゝで蚊帳に月呼ぶ庵哉 蘭 哉
 貴人の夢に月さす蚊帳哉 曉 雪

朝風や天井に蚊帳を吹つける 曉 雪
 蒸し暑き夜をぬけ殻の蚊帳哉 青 洲
 銀簪の落ちて光るや蚊帳の裾 蛙 人
 蚊帳低し電燈ともる臍の上 吹 竿
 草の戸や開き月夜を蚊帳の中 閑 雨
 蚊帳越しに語る親子や月明り 雲 山
 夕月や紹蚊帳に戦ぐ竹の影 葩 蜂
 俣下りて夏手袋を脱ぎにけり 猶 青
 夏帽子吹飛ばしけり汽車の窓 同
 夏帽や抱へて走る俄雨 吹 竿
 夏足袋や持つて生れし脂足 同
 夏足袋の埃はたくや上り端 同
 移り香のたゞ床しさよ夏蒲團 葩 蜂
 椽に居る客にすゝめぬ夏蒲團 吹 竿
 夏蒲團折つて丸寝の枕かな 同
 夏羽織脱いで月待つ宴かな 子 鳴
 打解けてやがて脱ぎ鳧夏羽織 雲 山
 代診のゆき丈長し夏羽織 蘭 哉
 夏羽織印籠のせてたゞみ置く 葩 蜂

夏帯や暑さに弱き太肉 吹 竿
 水枕滲みて濡れし寢衣哉 同
 氷砕く音に目覚めぬ水枕 猶 青
 電燈を消して蚊遣の端居哉 子 鳴
 雨雲にはづす日覆や風はらむ 猶 青
 挽割りし板を木小屋の日覆哉 吹 竿
 日除刎ねて豆腐屋を呼ぶ女哉 同
 裏町の日覆よこれし飯屋かな 葩 蜂
 蚊遣して稿書き終へ一と夜哉 幾 京
 蚊遣すや一足早き野良歸り 四 果
 獨酌の亭主裸で蚊遣哉 碧 村
 碁の客にまた焚き繼ぎ蚊遣香 吹 竿
 佗住の世にくすぶりて蚊遣哉 同
 燃え立ちて額の字見る蚊遣哉 蘭 哉
 蚊遣焚くや臆て月さす膝頭 曉 雪
 沈香を蚊遣にいぶす奢り哉 蕉 村
 蚊遣して夕刊を見る食後哉 雲 山
 與作まつ小萬が門の蚊遣哉 杉 亭
 繪日傘を疊めば伽羅の薰り哉 猶 青

琴の爪忘れて戻る日傘哉 蛙 人
 日傘人雨にためらふ姿かな 都 雲
 腕かけの時計が光る日傘哉 杉 亭
 棧橋に日傘をたゞむ渡舟かな 同
 馬の尻大きく廻る日傘哉 吹 竿
 繪日傘や一人は高き嶮道 雲 山
 浪飛沫及ぶ濱邊の日傘哉 幾 京
 繪日傘や母さしかくる乳母車 葩 蜂
 編笠の梵論憩ひ居る木蔭哉 同
 編笠や新内流す廓町 猶 青
 石室に菅笠を脱ぐ疲れ哉 晋 風
 菅笠や日本橋を金魚賣り 子 鳴
 黄昏を菅笠戻る野道哉 蕉 村
 菅笠の中に捨兒や堂の椽 杉 亭
 道連れは富山訛りや菅の笠 肯 穂
 菅笠や着莫産を煽る草の風 吹 竿
 菅笠や富士の裾野の朝深靄 忍々洞
 菅笠を脱きて佇む瀧の下 五 樂
 菅笠の富士仰ぎ見る裾野哉 蘭 哉

扇風機

風鈴

釣床

青簾

簾

花莫蔭

菅笠や登山の印べたと捺す朗月
夕鐘や菅笠腕いで一稼ぎ雲山
生温き風を啣つや扇風機同
舞了へて衣脱く人や扇風機猶青
這ひかゝる兒に片寄る扇風機吹竿

風鈴や短冊舞ふて續け鳴る閑雨
風鈴や美女待んべらす屋形船猶青
風鈴や短冊ゆるゝ椽の先雲山
風鈴の音も床しけれ小短冊蘭哉

釣床やゆらりと夢に入る吹竿
急ぎ行く跣足の人の埃かな都雲
足輕き波打際の跣足哉朗月
船までの淺瀬を渉る跣足哉吹竿

青簾かけて市井に隠れ栖む吹竿
湯上りの美人化粧いぬ青簾雲山
寢覺して月に冷たし簾杉亭
詩に倦みて肘を枕や簾吹竿

花莫蔭や添乳の妻が肱枕同
花莫蔭や添乳の妻が肱枕同

竹婦人

葭戸

蠅帳

雨の日や寵衰へし竹婦人
戀さめの冷たき夢や竹婦人吹竿
雨音に淋しく抱くや竹婦人閑雨
みめよくて人妻憎き葭戸哉晋風
電燈や佳き人見ゆる葭戸越し吹竿

寝返れば夕月見ゆる葭戸哉蕉村
蠅帳に雨の厨の小蠅かな葩蜂
打水や遠くに雷の音を聞く青牛
打水や此處も彼處も月の影杉亭

打水や庭木新しくなりにけり露溪
打水に葉毎の月やきらりと同
打水で遠雷を聞く山家哉都雲
打水で風を待ちけり夕月夜同

打水や涼しさを呼ぶ佗住居紫海
打水やかこち顔なる草履ばき同
打水で見付出したたり三日の月終一
打水や波の花散る不夜城裡同

打水や日に乾く音ひしくと古城

打水や淡き月浮く潦同

打水に格子を覗く遊女哉猶青

水打てば良友を待つ端居哉同

水打てば灯せば風通ひけり同

火の如き夕焼雲や水を打つ吹竿

水打てば石燈籠に月がさす閑雨

水打てば月の宿らむ潦同

庭草に打水残る月夜かな同

暮なんととして裸男の水を打つ朗月

打水や夕餉の膳に呼ぶ子供同

水打つて梧桐の庭に塵もなし同

打水に樹々蘇へる茶寮哉幾京

行水や黍の彼方の稻光り葩蜂

涼み臺に髪洗ひたる女かな古城

老ぬれば若きを語る涼み臺猶青

竹亭に月影清き納涼哉幾京

大方は納涼がてらの詣哉雲山
小波に月碎かる、納涼かな都雲

登山

水泳

四手網

町内の噂の種や納涼臺蘭哉
三味の音や駒形あたり涼み船朗月
納涼や月諸共に船の中五樂
山の湖帆を孕ませて涼みけり子鳴
夕納涼橋からころと舞妓ゆく葩蜂
燈臺の消えては灯り濱納涼同
磯端に月の出を待つ涼みかな都雲
籐椅子にもたれて涼む別墅哉同
月出で、川逆上る納涼かな同
涼み舟すて、淺瀬を渡りけり古巢
流星のしきりに飛ぶや橋涼み閑雨
夜氣ひしと迫る障子や登山宿葩蜂
水泳の美人を射つて夕づく日忍々洞
競泳や先頭を切る赤帽子葩蜂
足の裏大きく白し泳ぎ人閑雨
外人の腕たくましき泳ぎかな同

四手網に泡立つ濠の藻屑哉子鳴
日に光る四手の網の雫かな蕉村
雨上り小川に並ぶ四手網五樂

箱庭

晝寢

夏瘦

水明り透すや夜の四手網 雲山
 月さして魚光りけり四手網 蘭哉
 纜ひ舟に高く掲げし四手哉 葩蜂
 椽台に箱庭据えて理髪店 吹竿
 箱庭や橋に佇む唐の人 肯穂
 箱庭に豆電燈を點じけり 杉亭
 箱庭や稗より低き家二軒 曉雪
 箱庭に霧吹いてを灯入れに 雲山
 懶げに時計見上る晝寢哉 同
 北窓の下に晝寢や夏の風 五樂
 新薙敷いて晝寢や杉の影 蘭哉
 晝寢すや机の下に足入れて 吞于
 大杉や八幡堂に晝寢人 閑雨
 顔につく疊のあとや晝寢起 吹竿
 山雨沛然晝寢の夢を醒しけり 朗月
 晝寢さめて疊に長し椎の影 葩蜂
 耳に來し蠅こそばゆき晝寢哉 同
 鶴嘴は投げたる儘の晝寢哉 猶青
 後れ毛の亂れに夏の瘦見えぬ 五黄

汗

裸

寢冷え

扇

夏瘦せて才子多病の恨みかな 吹竿
 夏瘦の笑顔淋しき美人哉 同
 夏瘦や刀にさはる腰の骨 葩蜂
 鐵腕を撫して夏瘦わらひけり 猶青
 味方勝つて汗拭く選手迎へ 同
 兜刎ねて汗拭く武者は女なる 同
 嶮を衝く汗冷や、かや雪千古 同
 裸人井戸から西瓜抱へ來る 月洲
 月清し裸で裏戸締めに行く 都雲
 椰子蔭に象の牙切る裸かな 葩蜂
 起きがけを寢冷に急ぐ廁哉 晋風
 瘦腹を擦りて寢冷せりと云ふ みのる
 參籠の夜氣に打たれて寢冷哉 雲山
 寢冷すなど疲も母の手や動く 閑雨
 姑の叱言は孫の寢冷かな 幾京
 頭痛膏の女なまめく寢冷哉 蘭哉
 手枕の噓にさめて寢冷哉 杉亭
 寢冷人に粥冷えてあり枕上ミ 葩蜂
 暇乞ふて靜かに扇た、みけり 猶青

團扇

夏芝居
天瓜粉

繭

田植
早乙女
早苗取
田掻き

屋根船の中に動くや絹團扇 松宇
 羽團扇の美人倚り梟棕櫚の欄 朗月
 轉寢の尻にしかれし團扇哉 吹竿
 吹き拔き風に遊べる團扇かな 同
 幕間を吹かれに立つや夏芝居 同
 裸兒やとらまへて打つ天瓜粉 同
 天瓜粉に鏡のぞく兒ませし哉 吞于
 山里や繭百貫の當り年 子鳴
 繭賣つて足長々と寢たりけり 猶青
 繭賣つて苙ばかりの廣さかな 杉亭
 繭賣つて小袖に替へし娘かな 雲山
 繭賣つて娘の曠衣買ひにけり 幾京
 繭買ひの駄引強さ憎みけり 吹竿
 爺婆々の曲りなりにも田植哉 蕉村
 早乙女のどの菅笠が唄ふやら 古巢
 勇ましやぞろりと並ぶ田植笠 紫海
 大利根の水溢れ來ぬ早苗とり 杉亭
 あか／＼と土堤の夕陽に田掻馬 葩蜂
 笠の端を雲影渡る田植哉 古城

田草取
苗賣

戀とげて田植に唄ふ夫婦哉 古城
 植え終へて田毎の月を戻り梟 朗月
 嫁が唄今日の田植に聞かれ梟 同
 誰が爲と姉様かぶりの田植哉 猶青
 千枚の田や點々と田植人 同
 田植人笠のみ目立つ遠望哉 都雲
 夕暮や小川賑ふ田植人 同
 日の落ちて一際高し田植唄 雲山
 神田の標石古き田植かな 同
 月影に手足を洗ふ田植かな 同
 さんざめく今日を終る田植哉 同
 本家分家一つになりて田植哉 同
 聲に年とらぬ媪や田植唄 幾京
 田植唄昔を偲ぶ媪かな 同
 其昔聲で戀せし植女哉 同
 動く手の唄につれ行く田植哉 同
 田植女や一人唄へば皆唄ふ 吹竿
 水に寫る夕燒雲や田草取 同
 苗賣の聲に目覺めし廓かな 蕉村

火串

苗賣の肩かへて聲張り上ぐる 雲山
 苗賣や荷足の早き屋敷町 杉亭
 松風にゆれて明るき火串哉 笑壺
 遠くから狐火と見し火串哉 蕉村
 曉け方や火串に迫る山の風 月洲
 消え勝ちに雨の寂見る火串哉 蛙人
 釣利あらず鵜飼の宿を叩き覺 青牛
 疲れ鵜に曉近き篝火かな 曉雪
 晝は鵜に仕へてやさし鵜の翁 幾京
 鵜飼果て、さる覺えぬ曉の冷え 吹竿
 宵暗の川筋染めて鵜の篝 蕉村
 山峽の嶮しき與瀬の鵜飼哉 雲山
 篝火の河原に届く鵜飼かな 同
 鵜篝や焼け爛れたる水の面 葩蜂
 鵜を綱に世を渡り行く鵜匠哉 都雲
 灯の點々として鵜飼哉 同
 鵜飼果て、只の長良となりに覺 雲山
 月代に光る鵜繩の手かな 杉亭
 月を背に歸る鵜舟のどよみ哉 同

川狩

捌く手に魚の數知る鵜匠哉 杉亭
 篝火に鵜の目鏝めし如くなり 猶青
 川狩や淀深に寄れる五六人 子鳴
 宵暗や川狩の灯の松を透く 蕉村
 窓下の夜釣に聞くやさしめ言 五樂
 裸火に讀むや夜釣の魚の數 猶青
 川狩の築に子供の草履哉 杉亭
 葛水の茶碗に落ちし松葉哉 吹竿
 葛水や茶碗に浮かぶ雲の色 蘭哉
 葛水に埃浮いたる茶碗哉 葩蜂
 甘酒や茶碗ふせたる釜の蓋 晋風
 かきまぜて浮く塵もぬ砂糖水 吹竿
 砂糖水一氣に呑んで甦る 葩蜂
 客に出す麥湯冷すや深き井戸 蕉村
 大釜に柄杓だぶつく麥湯哉 曉雪
 冷えきつた麥湯にのどを鳴し覺 雲山
 贈られし新茶紐とく香かな 都雲
 店先に新茶のビラの目立ち覺 蕉村
 占ひて人待つ宵の新茶哉 みのる

鵜飼舟匠

掌に新茶の葉並較らべけり 吹竿
 圓窓に樹々の影濃き新茶哉 葩蜂
 新茶煮るや茶溢に浸し缺土瓶 同
 讀經に先づ參らする新茶哉 猶青
 水飯の茶碗を洗ふ筧かな 蕉村
 酒に飽きて水飯白き灯かな 葩蜂
 麥飯や大百姓の子澤山 同
 鮒鮓や賣聲高き大津驛 幾京
 蓋とれば笹縁なり折の鮓 同
 川風や寛ぐ膳の洗ひ鯉 吹竿
 延繩に數の獲物や沖膾 同
 潮風を背にして酌むや沖膾 吞于
 瓜揉 華奢の手で瓜揉刻む娘哉 蘭哉
 冷し瓜 冷し瓜腹もつめたくなりに覺 曉雪
 梅干 梅干や夕陽に赤き板庇 蕉村
 干梅や噂の嫁の面やつれ 肯穂
 梅干す背戸に隈なき眞晝の陽 葩蜂
 素麵 素麵の膳に月待つ夜なりけり 子鳴

素麵を盛りたる器大いなる 蕉村
 晝寢覺と素麵冷えてありに覺 忍々洞
 素麵や筧を引いて峠茶屋 蘭哉
 素麵に老僧非時を呼ばれけり 杉亭
 大笹に素麵冷す筧哉 葩蜂
 杉箸を走る雫や冷奴 葩蜂
 舌に觸れて冷たき匙や道明寺 晋風
 茶にも倦き酒に縁なし道明寺 蘭哉
 道明寺行脚の僧にとらせけり 吹竿
 山荒れや道明寺喰ふ柚が家 都雲
 徴兵検査 新緑の母校に徴兵検査哉 吞于

〔宗 教〕

夏神樂 拾ひ讀む掛行燈や夏神樂 雲山
 灯に映ゆる糺の森や夏神樂 杉亭
 川風を孕む素袍や夏神樂 蕉村
 松風の音の絶間や夏神樂 都雲
 簾越しに祭興がる局かな 猶青
 魚の荷の村に入りけり夏祭 雲山

不二詣

形代

花笠に續く日傘や夏祭杉亭
學校の窓から見ゆる祭かな
吹竿
雲の海脚下に雷や不二詣
月洲
今來たる道見上げけり不二詣
呑子
石室に佗しき雨や富士詣
吹竿
形代にうき戀流すよしもがな
同
形代や和子の寝顔の恙なき
雲山
形代や清き河瀬の淀みなき
蕉村

鹿の子
時鳥

閑古鳥

〔動物〕
神垣を潜りぬけたる鹿の子哉
吹竿
闇を縫杉に聲あり時鳥
杉亭
山莊の月や、まろし時鳥
葩蜂
時鳥啼くや夜釣りの水明り
雲山
森深く古陵を秘めて閑古鳥
蕉村
斧の音森より洩れて閑古鳥
都雲
奥山の淋しさ増すや閑古鳥
五樂
己が咳に耳そばだてぬ閑古鳥
雲山
洞なる大楠や閑古鳥
朗月

水鶏

水鶏奴に又欺されぬ渡し守
紫海
水鶏聞く明けつばこの草屋哉
都雲
水鶏啼く木曾の棚田や月斜め
葩蜂
雨意動く水郷の灯や遠水鶏
同
水郷や水鶏を友の肘まくら
蕉村
戀に寝ぬ夜をだまさる水鶏哉
露溪
宵闇や水鶏の聲に村淋し
同
一つ家に待ち人遅し啼く水鶏
同
流星の彼方に遠き水鶏かな
猶青
歌成らず早寝して聞く水鶏哉
同
人戀し水鶏聞き飽く佗住居
同
歸省して雨夜懐かし啼く水鶏
朗月
風呂近く水鶏の馴れて叩く哉
同
水鶏啼くや曉かけて靄深し
杉亭
圍碁の手の合間々々や鳴く水鶏
同
水洩れし草深ふして水鶏哉
同
待つ戀や水鶏に返す獨り言
雲山
木魚よりやさしく叩く水鶏哉
同
雨垂るとぎれ／＼や水鶏啼く
同

老鶯

羽拔鳥

翡翠

閑古鳥父の歸りの待遠し
葩蜂
山ばかり／＼今日も閑古鳥
猶青
老鶯や木曾川下る筏舟
不山
鶯の老を啼きけり椎の雨
杉亭
鶯の里遠く來て老にけり
蕉村
亂鶯に草鞋はき代ふ峠哉
葩蜂
老鶯や水上曇る馬入川
同
羽拔鳥ぬけ羽啞へて立もせぬ
晋風
悉く砂浴びて居し羽拔鳥
子鳴
おどましや卵も産まず羽拔鳥
雲山
蹲る姿もうしや羽拔鳥
幾京
脚あげて顔搔く鳥や拔羽散る
吹竿
藪垣に淋しき聲や羽拔鳥
蕉村
濡れ杭に翡翠見つむる波間哉
しと
翡翠の見つめて居るや水の皺
蕉村
翡翠の樋の口覗と眞晝哉
杉亭
翡翠や杭より起る水の紋
猶青
翡翠の水切つて嚙む獲物哉
みのる
翡翠や柳の河岸の曲り角
都雲

蝙蝠

青鷺

浮巢

轉寢の柴の戸叩く水鶏哉
雲山
徒然の書見を叩く水鶏哉
同
蝙蝠に急ぐ無燈の車かな
吹竿
蝙蝠に塔影暗し三日の月
猶青
蝙蝠の晝を飛ぶなる大伽藍
同
門に繋ぐまだらの牛や蚊喰鳥
雲山
蝙蝠や聲をかくれば人違ひ
同
暮れ残る藏壁白し蚊喰鳥
同
青鷺に蘆の風立つ夕かな
五黃
青鷺や月を背にして蘆の中
閑雨
青鷺や泥鰌くはへて高廻り
同
水神の杜に青鷺騒ぎけり
吹竿
石打てば浮巢離れて鳩の浮く
雲山
釣あぐむ眼にふと入る浮巢哉
吹竿
江に臨み出茶屋掛けたり行々子
雲山
魚籃輕き太公望や行々子
同
耳遠き茶屋の親爺や行々子
同
舟寄する葦間騒がし行々子
溪楓
釣人は釣に夢中や行々子
吹竿

鮎

葭切や汐と眞水の二瀬川 杉亭
軒先に寄せ来る汐や行々子 雲山
行々子鳴くや湖畔の捨小舟 蕉村
鮎群れて遊ぶ五十鈴の川清し 同
川風にはねる炭火や鮎を焼く 吹竿
川床の砂利美しく鮎迅し 都雲
鮎掛や曉かけて立つ早瀬 雲山
鮎釣や脚立を洗ふ浪淺し 吹竿
飛魚や残照紅き波頭 葩蜂
飛魚の光羽らして飛びにけり 同

鯉

飛魚の光羽らして飛びにけり 同
水塊を透いて見え居る小鯉哉 同
手拭で目高掬はん巧み哉 雲山
水泡を追ふて群れ来る目高哉 蘭哉
小溜のこんな處に目高哉 蕉村
底砂の陽に透く川や目高浮く 葩蜂
缺茶碗拾ふて入れし目高哉 吹竿
掌の水に游がす目高哉 同
足音に沈む目高やうす濁り 猶青
蟹の甲をこわく押へ捕へ鼻 都雲

目高

手拭で目高掬はん巧み哉 雲山
水泡を追ふて群れ来る目高哉 蘭哉
小溜のこんな處に目高哉 蕉村
底砂の陽に透く川や目高浮く 葩蜂
缺茶碗拾ふて入れし目高哉 吹竿
掌の水に游がす目高哉 同
足音に沈む目高やうす濁り 猶青
蟹の甲をこわく押へ捕へ鼻 都雲

蟹

蟹の甲をこわく押へ捕へ鼻 都雲

蝦

小雨降る磯の繩手や蟹上る 雲山
蟹の穴出潮に消えて失せに鼻 忍々洞
策の目に無念の相や平家蟹 子鳴
つゝく子に蟹振り上げし鋏哉 吞于
足音に逃げ出す蟹の迅さ哉 蕉村
釣ね日の魚籃と蝦蛄買ふ戻り哉 晋風
飯盛や蝦蛄の爪切る店の先 杉亭
なほ日暮端居に酌む蝦蛄の味 都雲
船宿に二日の酔や蝦蛄の味 幾京
蝦蛄を煮る蟹が苦家や浪の音 吹竿
蝦蛄舟や夕日落入る波頭 葩蜂
獨り寝をなぶり顔なる藪蚊哉 杉亭
朝戸出の袂に寒き藪蚊哉 同
待人のおそきにそと寄る蚊哉 同
やせし蚊のこりつきたる獄舎哉 古巢
蚊の聲の中に眼を閉す静座哉 蕉村
蚊を追ふ手の動き止む添乳哉 紫海
禪僧の打たんともせぬ藪蚊哉 幾京
蚊の聲に暮れて早寝の小家哉 都雲

蚊

やせし蚊のこりつきたる獄舎哉 古巢
蚊の聲の中に眼を閉す静座哉 蕉村
蚊を追ふ手の動き止む添乳哉 紫海
禪僧の打たんともせぬ藪蚊哉 幾京
蚊の聲に暮れて早寝の小家哉 都雲

暮

三昧の人を圍みて鳴く蚊哉 朗月
夕風や蚊柱低く又高く 葩蜂
蚊を打ちて血に汚したり青疊 雲山
大粒の雨暮どのは聾かな 猶青
踏切ぞ急いで通れ暮 吹竿
黄昏や葉蘭の影の暮 雲山
何處迄も悟り顔なり蟾蜍 失名
蜘蛛の圍に蜘蛛の留守なり雨一日 松宇
日のさして蜘蛛の圍光る五色哉 五樂
花剪れば蜘蛛の巢からむ鋏哉 蕉村
蜘蛛の圍のみな破れたる大雨哉 葩蜂
禪僧の蠅に動かぬ拂子哉 蛙人
蠅一つ暗きランプをさまよへり 猶青
むづかしき寢起の顔や蠅の飛 吹竿
背に浪を打せて這へる毛蟲哉 蕉村
翳す火に丸まり落ちし毛蟲哉 吞于
文使ひはたとためらふ毛蟲哉 猶青
釣床に毛蟲落ちたる騒ぎかな 杉亭
姦しや毛蟲に騒ぐ女ども 雲山

蜘蛛の圍

蜘蛛の圍に蜘蛛の留守なり雨一日 松宇
日のさして蜘蛛の圍光る五色哉 五樂
花剪れば蜘蛛の巢からむ鋏哉 蕉村
蜘蛛の圍のみな破れたる大雨哉 葩蜂
禪僧の蠅に動かぬ拂子哉 蛙人
蠅一つ暗きランプをさまよへり 猶青
むづかしき寢起の顔や蠅の飛 吹竿
背に浪を打せて這へる毛蟲哉 蕉村
翳す火に丸まり落ちし毛蟲哉 吞于
文使ひはたとためらふ毛蟲哉 猶青
釣床に毛蟲落ちたる騒ぎかな 杉亭
姦しや毛蟲に騒ぐ女ども 雲山

蠅

蠅一つ暗きランプをさまよへり 猶青
むづかしき寢起の顔や蠅の飛 吹竿
背に浪を打せて這へる毛蟲哉 蕉村
翳す火に丸まり落ちし毛蟲哉 吞于
文使ひはたとためらふ毛蟲哉 猶青
釣床に毛蟲落ちたる騒ぎかな 杉亭
姦しや毛蟲に騒ぐ女ども 雲山

毛蟲

姦しや毛蟲に騒ぐ女ども 雲山

蝸

毛蟲焼くや朝朗らかに梨晶 葩蜂
ふり拂ふ袖の毛蟲や庭掃除 吹竿
蝸飛ぶや暮れ兒の遊ぶ畦の道 笑壺
欠びして蝸の飛び込む野原哉 四白
金色に沈む夕日や蝸の群れ 蕉村
立話したゝか蝸に食はれ鼻 月洲
釣人の無心に搔くや蝸の痕 吹竿
馬洗ふ川に風なし蝸の群れ 蘭哉
草むしる泥手に蝸を拂ひけり 雲山
夕雨やしきりに痒ゆき蝸の痕 葩蜂
杉並木御廟尊し蟬時雨 子鳴
あわたし鳥に追はる蟬の聲 雲山
後から蟬の飛び立つ夜道哉 閑雨
破れ堂に眠る乞食や蟬時雨 吞于
策の蟬もがき疲れて静かなり 曉雪
婆娑として啞蟬淋し枝移り 吹竿
繼ぎ足を竿へなくや蟬逸す 同
大佛やあたりは木々の蟬時雨 同
人暫し絶えし社頭や蟬眞晝 同

蟬

人暫し絶えし社頭や蟬眞晝 同

一山は眠るが如し蟬時雨 猶青
はねる尾を残して逃し蜥蜴哉 吹竿
蟲追ふて草に影迅き蜥蜴哉 葩蜂

井守 舊道は石ばかりなり青蜥蜴哉 猶青
徒渉る水に井守を恐れけり 吹竿
水搔けば浮ぶ朽葉や井守這ふ 同

守宮 つながりて水底を廻る井守哉 閑雨
石うてば石に隠る、井守哉 子鳴
水底に花もつ草や井守這ふ 葩蜂

守宮 國寶の壁畫は古りて守宮這ふ 蕉村
落書の障子に影や這ふ守宮 閑雨
門燈に透して見ゆる守居哉 雲山

守宮 夜氣深き燈法につく守宮哉 同
昨夜見し守宮の今朝はあまたし 猶青
軸ゆれて守宮は破れし壁に入る 子鳴

水馬 壁を這ふ守宮に暗き洋燈哉 吹竿
水馬夕日に影の長きかな 閑雨
濁り江の流れもあへず水馬 雲山

子子 子子やおち残りたる瘦金魚 晋風

玉蟲 玉蟲や秘め螺鈿のて小引出 朗月
玉蟲や女嫁しづく飾箱 蘭哉

蛞蝓 うす葉に玉蟲秘めし文函哉 葩蜂
蛞蝓や雨に蛞しき外後架 杉亭
下町は出水の沙汰や蛞蝓 案子

螢 雨幾日腐る土臺やなめくぢり 猶青
船出せば螢亂る、蘆間哉 吹竿
馬洗ふ背戸の河原や螢飛ぶ 雲山

螢 羅の袂にうつる螢かな 葩蜂
兒が握る手を透し見る螢哉 同
瀧しぶき縫ふて螢の闇夜哉 子鳴

螢 魔が淵や風をさまりて螢飛ぶ 閑雨
もつれ螢一つは高く逃げ消る 同
更けくゝて交々光る籠螢 同

螢 貫ひ來て葉に包みたる螢哉 猶青
燈台の裾を縫ひ行く螢かな 蘭哉

螢 高樓を飛んで消え行く螢哉 都雲
螢一つ飛んで賑はし町の宵 杉亭
蟻棲んで不動の劔を侵しけり 猶青

子子の囊を叩けば沈みけり 吞于
子子や佛の水に二つ三つ 子鳴
子子や江戸の名残りの天水桶 同

子子や月のそき居る手水鉢 忍々洞
子子や陽筋立ちたる雨後の沼 蕉村
御手洗に子子湧きて神寂ぬ 杉亭

蝸牛 蝸牛の庵は雨憂し人稀に 三萬石
古瓶や蝸牛二つ雨の後 閑雨
蝸牛や傘すぼめたる露路の垣 雲山

蝸牛 留守の木戸叩けば落ちぬ蝸牛 吹竿
雨垂や蝸牛の這ふつるべ棹 不山
蝸牛や地藏の背を筋違に 蕃村

蝸牛 蝸牛の井桁を廻る一日哉 杉亭
石燈籠の障子に影や蝸牛 都雲
木の股に雨を待つ哉蝸牛 蕉村

蝸牛 蝸牛の行止まりけり竿の先 肯穂
笹の葉をこぼる、雨や蝸牛 葩蜂
蝸牛に雛子の親の來來と鳴く 猶青

芭蕉葉や唯一點のかたつむり 同

羽蟻 大木や蟻一軍の列つくる 猶青
城趾の石朽ちずし大羽蟻哉 木公
朽ち残る椎の大樹や羽蟻飛ぶ 雲山

羽蟻 燒残る山門に湧く羽蟻哉 三省
電燈に羽蟻の群る、今宵哉 幾京
朽ちかゝる門に群る羽蟻哉 都雲

灯取蟲 電燈に鼻づら打つや灯取蟲 蕉村
夏蟲に思はぬ筆の狂ひ哉 雲山
金佛の御顔打ちけり灯取蟲 子鳴

灯取蟲 夏蟲や温泉町の辻の釣り箒 朗月
灯取蟲片羽焼かれて狂ひけり 吹竿
山宿や障子にあたる夏の蟲 葩蜂

金龜蟲 夕月や金龜蟲飛ぶ葡萄棚 吹竿
跳ね返り茶碗に落ちし金龜蟲 雲山
風風と雨後の日和や羽蟲立つ 蕉村

紙魚 師の庵や古短冊に紙魚の跡 曉雪
拜領の目録古るし紙魚の跡 吹竿
遺言の家書古りたり紙魚の跡 子鳴

〔植 物〕

卵の花 卵の花や波み溢ふれたる洗面器 晋風
 卵の花に溝川家を廻りけり 同
 卵の花に雨を含みし夜風哉 雲山
 牛避けて崖の卵の花散らし鼻 同
 卵の花や鍋釜漬けて背戸の川 吹竿
 卵の花や釣瓶失せたる古井筒 葩蜂
 しとど降る雨に明ら花卵都木 公孫子
 卵の花や隧道を掘る崖の上 蕉村
 土に伏す垣の卵の花雨上り 外雨
 卵の花に日暮の遅き既哉 肯穂
 卵の花や汗馬を洗ふ宵の雨 木公
 卵の花や暮れ行く背戸の水明り 竹生
 黄昏の卵の花里や牛の聲 都雲
 卵の花に隠士の住居見付たり 幾京
 卵の花や暮れても白き水の色 蛙人
 卵の花に世を捨て人の庵哉 杉亭
 柿若葉吹矢の的の吊られけり 晋風
 若葉洩る小風戀しく椽に座す 公孫子

瀧の音たどりて降りし若葉哉 吞于
 雪見ゆる富士の裾野の若葉哉 露溪
 谷水の響きに揺る、若葉哉 蕉村
 湯槽から眺むる山の若葉哉 同
 襟を吹く風の冷たし若葉山 蘭哉
 山腹に雨雲晴る、若葉哉 葩蜂
 谷水の渦まく淵の若葉かな 幾京
 若葉して昔語るや城の趾 同
 きら／＼と若葉照らす雨後の月 都雲
 汽車の窓に送り迎ふる若葉哉 都雲
 麥笛に在所の知れる若葉哉 杉亭
 谷水の碎けて白し若葉影 同
 唐招提寺にて
 若葉映ゆる朝集殿の秘佛かな 同
 嬉々と啼く若葉の蔭や村雀 紫海
 初旅の見渡す限り若葉哉 同
 遠足や若葉がくれの一騎二騎 同
 溪流の若葉に奇岩奇石哉 曉雪
 街道の若葉に低き家並哉 同

兩岸の俄に迫る若葉哉 曉雪
 古寺や若葉に茂る楠のかげ 閑雨
 集れの喇叭の聲や若葉蔭 同
 銅像にひよこり出合ふ若葉蔭 同
 若葉蔭深さの知れぬ水の上 同
 谷川に風起し行く若葉哉 同
 若葉して山相變る峠哉 雲山
 朝まだき深呼吸せん若葉蔭 同
 若葉して落付く人の心かな 同
 水更へし泉水に若葉搖ぎけり 同
 夕陽すべる鼈甲色の若葉哉 同
 やまめ釣る人の子き見ゆ谷若葉 朗月
 艦聲緩く若葉の湖を渡りけり 同
 五重の塔若葉の中にそびえ鼻 同
 温泉の宿は若葉の雨となし鼻 同
 眠る湖や若葉の山につまれし 同
 若葉して雲湧く山となりし鼻 吹竿
 寝ころんで雨見る庭の若葉哉 同
 雨やみて障子明るき若葉哉 古城

若 楓 煙立つ若葉がくれの小家哉 古巢
 堂塔と瀧のしぶきや若楓 猶青
 温泉の山や雲去來して若楓 杉亭
 新 樹 朝霧の新樹滴る雫哉 蕉村
 參道に朝風わたる新樹哉 雲山
 水に影藍を浸せる新樹哉 都雲
 薄眠き新樹の下のベンチ哉 杉亭
 駒止めて暫し新樹に憩ひけり 幾京
 晴る、かの風に新樹の雫哉 吹竿
 溪流に釣橋かゝる新樹哉 葩蜂
 葉櫻や傘さして行く城の跡 閑雨
 葉櫻や陽がこぼれ居る潦 葩蜂
 葉櫻や雨靜かなる如意輪寺 猶青
 雨の戸の軒燈青し夏柳 吹竿
 夏柳ポット繋いで皆上がる 同
 魔ヶ淵や藍を湛へて夏柳 都雲
 水郷の葉柳べりの渡舟かな 子鳴
 景色かな葉越しに月の夏柳 五樂
 葉柳や雨の燕の横さまに 忍々洞

葉柳や鍋炭流す門の川 雲山

葉柳や比良から嵐す通り雨 肯穂

葉柳に孤島の色を深めけり 猶青

舟風呂を出れば月あり夏柳 杉亭

花桐や張り板乾く背戸の晝 葩蜂

馬盥に明るき影や桐の花 同

木下閣 下閣や蛇と見たるは物の蔓 吹竿

紫陽花 灸据えて紫陽花熱う眺めけり 都雲

紫陽花や茶室にたぎる釜の音 朗月

紫陽花や井桁に濡れし箱釣瓶 同

紫陽花や尼にもなき獨り住む 五黄

紫陽花や竿に干されし女衣 蕉村

夏木立 畏さや御陵を秘めて夏木立 猶青

藍湛ふ湖に影あり夏木立 同

夏木立馬曳き入る、兵士哉 雲山

杉並木茂つて晝も暗き哉 都雲

日も洩れぬ鱗が豁の茂り哉 閑雨

七堂は皆それくの茂りかな 子鳴

魔の淵の藍湛えたる茂かな 同

椎の花 石徑に椎の花ふむ草履かな 吹竿

森深く茂りて椎の花盛り 都雲

御手洗に椎の花浮く且かな 雲山

世の憂目見えぬ葉蔭や椎の花 蕉村

開け放つ二階の窓や椎の花 葩蜂

杜若 見事なる短冊の繪や杜若 蕉村

杜若 杜若我れ金閣の主哉 猶青

牡丹 後苑に玉沓輕し白牡丹 五黄

官邸の牡丹我黨の天下かな 吹竿

牡丹に猗頓の富を誇りけり 同

牡丹の庭に八佾舞はせけり 同

大まかに雄ノ鳥せまる牡丹哉 吞于

大牡丹廻廊の凝寶珠吞まんま 同

長谷寺にて 牡丹散つて畫廊閑なり亭午哉 杉亭

宿醉のだるき眼に牡丹日午なり 葩蜂

廢帝の淋しくおはす牡丹かな 同

百合の花 百合活けて花瓶に傳ふ雫哉 晋風

麓路や草踏み分も百合を切る 吹竿

萍 山百合にかゝる温泉の煙かな 吹竿

投入の花瓶は古し百合の花 雲山

百合の咲く崖から落つる小瀧哉 曉雪

山百合の影仄揺る、花瓶哉 葩蜂

涌き水の滴る崖や百合の花 同

萍の片寄る波のうねりかな 吹竿

萍や置鈎配る鰻釣り 同

一八 一八の屋根の上行く列車哉 同

藻の花 藻の花や漣立て、蛇渡る 雲山

晝顔 晝顔や町の端れの車宿 曉雪

晝顔の水車にからむ早かな 吹竿

晝顔や砂の焼けたる河原道 雲山

苔の花 はつきりと讀の碑文や苔の花 同

千年の古刹尊し苔の花 蕉村

細瀧や石皆濡れて苔の花 葩蜂

石碑は千古の儘や苔の花 猶青

浮橋や風楚々として花菖蒲 五黄

花菖蒲 欄に凭れば虹湧き起る花菖蒲 竹雨

花菖蒲池を迥かや能舞臺 三萬石

河骨 繪筆洗ふ娘艶なり花菖蒲 猶青

雨の日や小荷駄に添へ花菖蒲 幾京

菖蒲剪る主に傘をさしかけし 吹竿

河骨の花に野川の芥かな 同

河骨に只足長き蟲居たり 都雲

河骨に飛ぶ魚ありぬ雨の中 同

河骨や鷺の羽浮く江の汀 蘭哉

河骨や鷺の涉りし濁り水 同

河骨の稍ゆれて緋鯉逃り失せたり みのる

河骨や芥に染まぬ花の艶 蕉村

河骨や源氏の窓の水鏡 幾京

河骨の花黄に咲いて晝の月 杉亭

河骨に雨した、かの眞晝かな 月洲

河骨やはなやと降る夕日照雨 葩蜂

魚逃げて河骨揺る、濁り哉 晋風

静けさを衝く白蓮の咲く音よ 子鳴

白蓮や清淨無垢の朝心 雲山

蓮咲くや上野を出づる明鴉 同

寮の灯の池に届くや白蓮花 同

若竹や皮むけきらぬ幼なぶり 蘭 哉
 風雪にまだくせもなし今年竹 終 一
 若竹になよやかなの風渡りけり 蕉 村
 雨過ぎてゆる、若竹なほ青し 猶 青
 若竹の雨聴く宵となりけり 同
 若竹や節さへ多く親まさり 露 溪
 若竹や藪の中なるこふのもの 杉 亭
 親竹は元の畠や今年竹 幾 京
 若竹の一本高く戦ぎけり 葩 蜂
 若竹に隙間洩る灯の揺ぎけり 雲 山
 若竹や奥の祠に灯のともる 同
 破垣をくぐりて出でぬ今年竹 都 雲
 若竹の書齋の窓に近づきぬ 同
 丸窓の障子の影や今年竹 同
 灯のとゞく若竹なれば雨もよ 春 宵
 若竹に早馴れ初めし雀かな 吹 竿
 若竹に雨疎々として苔の庭 朗 月
 若竹を折りて試む駿馬かな 同
 若竹の伸びて佛を庇ひけり 同

莓 崖鼻の莓つまむや及び腰 吹 竿
 青 柚 葉隠れて葉よりも青き青柚哉 同
 青 梅 青梅のしきりに戀し母の寺 猶 青
 梅の實 買ひ足して庭の梅の實漬に梟 吹 竿
 青梅を探す子供や草の中 雲 山
 青梅の落ちたるま、や寺の庭 葩 蜂
 紫の茄子の露照る朝日かな 曉 雪
 相觸れてきしむ茄子や籠の中 葩 蜂
 汁の實に鉢植の茄子もぎに梟 同
 瓜番も月に嘯く夜なりけり 松 宇
 瓜畑や糸瓜に似たる瓜二つ 子 鳴
 荷を置きて瓜喰ひ散る木影哉 吞 于
 初瓜や糠味噲漬けの鹽加減 雲 山
 初瓜や別莊守の自慢顔 五 樂
 吹井戸に瓜おどきや宿場茶屋 肯 穂
 投込みし瓜躍るなり瀧の茶屋 猶 青
 瓜番の瓜盗みたる月夜哉 杉 亭
 瓜賣の瓜喰ふ淀の夜舟かな 同
 瓜むくや若き夫婦のさし向ひ 蕉 村

瓜 瓜漬ける粕ぬすみ喰ひ酔と梟 葩 蜂
 塵塚や雨に白けし瓜の皮 同
 桑の實 桑の實の紫染まる袂かな 吹 竿
 石 菖 石菖に机上の涼味占めにけり 五 樂
 石菖を植えて奇石を愛しけり 吹 竿

〔前置句〕

紐育小品
 スカートにまつは蝶の夏野哉 みのる
 陽沈む墳墓の丘やポプラの樹 同
 芙蓉花に蜂の争ふ夏真晝 同

秋之部

〔時 候〕

立 秋 玉川の水すみまさり秋の立つ 雲 山
 秋立つと呷く笹の戦ぎかな 同
 秋立つや佗しらに聞く波の音 五 黄
 立つ秋の曉寒むき寝ざめ哉 蕉 村

今朝の秋

今朝の秋 今朝の秋雲冷かに流る、よ 猶 青
 よく眠る愛兒の顔や今朝の秋 都 雲
 飯の數忘れて聞きぬ今朝の秋 蕉 村
 潮波や肌に覺えし今朝の秋 雲 山
 大寺の人氣少なし今朝の秋 吹 竿
 風見のポプラ並木や今朝の秋 葩 蜂
 踏む土の冷え初秋の箒取る 晋 風
 冷やくと早初秋の夜となく 幾 京
 初秋や硯に浮ぶ雲の色 蘭 哉
 初秋の灯涼しう眺めけり 都 雲
 初秋をいとと煤けし障子かな 吹 竿
 初秋や潮鳴り長く磯つとぎ 子 鳴
 秋の日の釣瓶落と暮れにけり 雲 山
 秋の日やとり込む衣の生乾き 同
 水底の小石に秋の夕日かな 曉 雪
 秋の日や大根太る噉道 鐘 朗
 秋の日や園に集ふて素焼など 公 逸
 秋の日や軒に鸚鵡の獨り言 朗 月
 秋の日の木蔭静けき流れ哉 都 雲

秋の日

秋の日 秋の日の木蔭静けき流れ哉 都 雲
 秋の日や軒に鸚鵡の獨り言 朗 月
 秋の日や園に集ふて素焼など 公 逸
 秋の日や大根太る噉道 鐘 朗
 水底の小石に秋の夕日かな 曉 雪
 秋の日やとり込む衣の生乾き 同
 秋の日の釣瓶落と暮れにけり 雲 山
 初秋をいとと煤けし障子かな 吹 竿
 初秋や潮鳴り長く磯つとぎ 子 鳴
 初秋の灯涼しう眺めけり 都 雲
 初秋や硯に浮ぶ雲の色 蘭 哉
 冷やくと早初秋の夜となく 幾 京
 踏む土の冷え初秋の箒取る 晋 風
 風見のポプラ並木や今朝の秋 葩 蜂
 大寺の人氣少なし今朝の秋 吹 竿
 潮波や肌に覺えし今朝の秋 雲 山
 飯の數忘れて聞きぬ今朝の秋 蕉 村
 よく眠る愛兒の顔や今朝の秋 都 雲
 今朝の秋 今朝の秋雲冷かに流る、よ 猶 青

秋 曉

秋の朝

秋の目をへぼ茄子漬ける芥子き 峽石
 秋曉の水騒がしき小川かな 呑于
 寝餘りて秋曉の散歩哉 吹竿
 すつきりと締る心や秋の朝 蘭哉
 秋の朝冷たく向ふ鏡かな 杉亭
 長病の床に目覚めぬ秋の朝 公孫子
 蓮に水溜りて散りぬ秋の朝 朗月
 庭掃けば蟬死してあり秋の朝 みのる
 魂を置き替ふ時や秋の朝 肯穂
 大空に響く汽笛や秋の朝 葩蜂
 長月や夕焼寒き雲の色 吹竿
 長月や残る花咲く庭の隅 呑于
 秋の暮山紫にならびけり 猶青
 叱かられて泣寝入る兒や秋の暮 吹竿
 植木鉢見廻る秋の夜風かな 蕉村
 秋の夜や寢床こ入りテラデオコ聞く 呑于
 秋の土用 朝夕の風秋めける土用かな 蕉村
 残暑 秋暑く芋掘る人の黒さかな 煙灰
 秋暑し 秋暑し新開町の馬肉店 木公

新涼

秋暑し旅人の笠走り見ゆ 露溪
 降り足らぬ雨に残りし暑哉 雲山
 避暑客の歸りを延ばす残暑哉 同
 秋暑き夕日さし込む小家哉 都雲
 門先に日まわり咲きて秋暑し 終一
 實になりし日葵草の秋暑し 朗月
 歸り來て残暑の机掃ひけり 吹竿
 新涼の眼に清々し雨後の山 松宇
 新涼や笥の水の亂れがち 猶青
 秋涼し白き屏風に松の影 都雲
 新涼や障子に換へし屋形船 みのる
 新涼の灯のゆらめきや舟料理 杉亭
 新涼の机に向ふ著作かな 吹竿
 新涼に月を待つ夜となりて鳧 子鳴
 新涼や待焦れたる慈雨の後 雲山
 新涼や關白殿の大嚏 幾京
 新涼の空廣う澄む山家哉 葩蜂
 ピアノ打つ眞白き指や冷かに 晋風
 うらいて剃らすうなじや冷かに 吹竿

冷か

冷かや庭土にある朝しめり 蕉村
 質草も盡きて冷つく夜風哉 蘭哉
 冷かや碁石をつかむ掌 葩蜂
 雨冷の宿靜かなり一人旅 都雲
 雨冷や拾の羽織黴臭し 五樂
 雨冷に廓の灯まばらなる 雲山
 雨冷や雫傳はる柄漏傘 吹竿
 雨冷に首すくめけり外後架 杉亭
 雨冷に一閑張りの濕り哉 閑雨
 小鳥ふくれて雨冷な檐なにあり みのる

漸寒

や、寒やシャツ一枚の渡し守 閑雨
 稍寒や軒端に細る蟲の聲 朗月
 稍寒や思はず圍む角火鉢 五樂
 や、寒の膝に啼き寄る小猫哉 呑于
 爽かや水齒磨の口あたり 葩蜂
 灰汁桶の水澄む上や竹の影 晋風
 水澄みて苔に小魚の動かざる 子鳴
 水澄むや大河の底のさゞれ石 杉亭
 水澄んで底干なく見る星の數 蕉村

朝寒

水澄むや研師の庭の星月夜 肯穂
 水澄む投げ入れて見る紙の切 みのる
 澄む水に動かぬ影や金閣寺 吹竿
 見下すや瀬々を合せて澄む水 公孫子
 水澄んで焼双匂ふや刀鍛冶 雲山
 澄む水に鶴鴿が来て映りけり 葩蜂
 銀屏や更けて身に入む隙間風 雲山
 朝寒や眼鏡曇らす粥の湯氣 吹竿
 朝寒や廊下の長き温泉宿 雲山
 朝寒や宿を去る日の洗面所 都雲
 朝寒の汽車は出たり遅れけり 朗月
 風邪心地夜寒の屏風廻しけり 晋風
 彈丸の古創痛む夜寒哉 終一
 敵討て刃を拭ふ夜寒哉 閑雨
 順禮の親にはぐれて夜寒哉 冲舟
 乗合の渡船待つ間の夜寒哉 雲山
 月高く犬の聲遠き夜寒かな 桂南
 女連れ墓場にかゝる夜寒かな 都雲
 發心に先づ酒断ちし夜寒哉 猶青

夜寒

水澄むや大河の底のさゞれ石 杉亭
 水澄んで底干なく見る星の數 蕉村

夜長

夜寒さの厠に薄き寝衣哉 吹竿
 移り来て酒なき里の夜寒哉 五黄
 船宿の行燈疎き夜寒かな 同
 木枕に馴染まぬ旅の夜寒哉 同
 通夜の灯の耿々として夜長哉 閑雨
 夜や長し汽車に寝返る窓枕 煙灰
 小説の怪異におびゆ夜長哉 子鳴
 覺めて又電車の音に夜ぞ長き 紫海
 長老の經寫し居る夜長かな 青牛
 長き夜や閑居に偲ぶ古英雄 猶青
 淨瑠璃に村の衆を呼ぶ夜長哉 終一
 古襖鼠のかぢる夜長かな 雲山
 押入の鼠追出す夜長かな 同
 援兵を待つ城内の夜長かな 都雲
 文豪の稿書きす、む夜長かな 幾京
 長き夜や鼠かゝりし柵落し 葩蜂
 柱たゞ冷たく光る夜長かな 同
 師の僧の黙々として夜長かな 木公
 寂然として妻も子も夜長哉 同

秋深し

野も山も錦飾るや秋深し 蘭哉
 秋深し落葉とび込む座禪堂 五樂
 藤の實の黒くさがりて秋深し 朗月
 秋深し板戸を叩く木の實雨 杉亭
 木に寄れる蔓の哀れや秋深し 都雲
 秋深き夜を鹿の音や奈良の里 みのる
 神寂びし鳥居の高く秋深し 子鳴
 籠り居てそぼ降る雨や秋深し 雲山
 秋深う日々縮み行く頸かな 蕉村
 渡る雁うつる古江や秋深し 閑雨
 秋深し黒くなりたる吊し柿 葩蜂
 戸口迄粗の俵や冬隣り 松宇
 切り張りや冬を隣りの古障子 吹竿
 親睦の葱鮪の味や冬隣 木公
 日光湯本にて

冬隣

行秋

白樺の點々たちて冬隣 子鳴
 行秋の日毎に細る篋かな 吹竿
 手にあまる抜毛に秋を惜み 呑于

秋の日

三日月
 天の川
 銀河

〔天文〕

とつぷりと秋の日落ちぬ長堤 松宇
 秋の日や障子に猫の影法師 葩蜂
 締と出る倉の戸前や三日の月 吹竿
 天の川眞下流る、大河かな 子鳴
 十州の山河眠りて天の川 木公
 飛行船漂ふ空や天の川 露溪
 渡月橋詩趣尙深し天の川 幾京
 天人の茲に泳がん天の川 也水
 怒濤寄す岬の松や天の川 朗月
 船行くや湖の上なる天の川 杉亭
 並木出て濱邊に仰ぐ天の川 閑雨
 天の川七卿落ちてほの白し 猶青
 枚を衝む決死隊あり天の川 同
 寝もやらぬ軍師仰ぐや天の川 雲山
 更けくして襟に冷たし天の川 同
 船に寝て小便近し天の川 曉雪
 天の川つうりて淋し山の湖 吹竿
 手まさぐる夜釣の綸や天の川 同

月

名月

提灯の眞上に銀河横はる 猶青
 硯屏の影ひく月の机かな 晋風
 月に碎く波又碎く小船かな 猶青
 月明や富士をたづねん清見瀉 同
 風呂を落して暫く月を眺め 朗月
 よき月に浮れ出たる濱邊かな 蕉村
 思切つて窓しめて寝る月の秋 五樂
 月見えて波ほの白し雨の湖 閑雨
 一羽飛べば皆飛ぶ月夜鴉かな 曉雪
 あのあたり鹿啼きや山の月 蘭哉
 皎々の月に棹さす渚かな 都雲
 稍更けて障子に月や船住居 同
 水樓の宴や疊の月明り 子鳴
 満月の河原に名馬洗ひけり 同
 いたいけの唄高らかや月の庭 雲山
 漣や月に笛吹く船の中 同
 芋の葉に溜る夜露や月の秋 吹竿
 月の路地米買ひに出る女あり 同
 名月や雫こぼる、水車 猶青

名月や船までつゞく小波猶青
 名月や近き白の音遠砧同
 名月を乗せて戻るや漁り船雲山
 名月に腸洗ふ澁茶かな同
 名月や鋸山の齒のこぼれ同
 あぢきなな寝てしき曇雨の月吹竿
 香焚いて獨りかもねん雨の月雲山
 明月の影うつしけり銀屏風蘭哉
 待宵や船に風呂たく夕煙雲山
 待宵や皆詩に遊ぶ一と莖曉雪
 待宵を忙はしき雲の去來かな吹竿
 待宵や琴の手入をする娘蕉村
 待宵の海ほの白し島廓葩蜂
 待宵の椽や靜かに獨り酌む呑于
 うた、ねの疊冷たし後の月蕉村
 後の月大湖に薄う暮れんとす子鳴
 稲妻に顔かくしけり野雪隠杉亭
 稲妻に芒うつせし障子かな子鳴
 稲妻に谿行く人の見えにけり閑雨

河渡る馬嘶くや稻光閑雨
 稻妻に慣れて女の夜道かな雲山
 亂礁にひしめく波や稻光葩蜂
 崖の上の一軒家稻妻しばくす同
 稻妻や貝殻白き濱の屋根同
 稻妻や引しめて行く馬の口蕉村
 稻妻のたゞならぬ雲見せに曇猶青
 表裏青に紫に稻妻す同
 荒海や稻妻強き戻り船都雲
 歌行脚須磨の夜更けて秋の聲猶青
 笹すれの頻りに淋し秋の聲肯穂
 大徳の振ふ拂子より秋の聲青牛
 更けくして身に迫り曇秋の聲雲山
 絶壁に立ちて遙かや秋の聲葩蜂
 夕陽や眞紅に染めし秋の雲子鳴
 油然と富士を覆ひぬ秋の雲同
 秋晴や飛を失せたる草の種子葩蜂
 秋晴や磯山續き富士も見え雲山
 秋晴の空高く打つ午砲かな呑于

秋晴や島を飛び立つ朝鴉閑雨
 秋晴や運動會のはやし聲猶青
 山門の蜂巢見上ぐる秋日和芽風
 網干せる浦靜なり秋日和蘭哉
 島出島遠山見えて秋日和閑雨
 天高く肥馬に鞭うつ秋日和杉亭
 賑ふや上野の山の秋日和朗月
 日限りを急ぐ普請や秋日和幾京
 田に畑にうごめく人や秋日和蕉村
 秋日和その日くを馬の背に子鳴
 釣船の出拂ふ朝や秋日和雲山
 秋日和草は實もあり花もあり肯穂
 甘藷島掘り返しあり秋旱葩蜂
 秋雨や木の間隠れの風呂灯閑雨
 秋雨やカンテラ下り坑に入る同
 石垣の崩る、音や秋の雨同
 仰ぎ見る窓にピアノや秋の雨峽石
 待つ人もなき獨酌や秋の雨猶青
 秋の雨古書繙くによかりけり同

秋雨や既小暗き馬の顔吹竿
 庭に鳴く蟲の音細し秋時雨朗月
 羽織着てまだ薄寒し秋時雨蕉村
 市に出す薪一駄や秋時雨吹竿
 山と積む停車場の炭や秋時雨みる
 親雞に抱かる、雛や秋時雨葩蜂
 溪流の岩嚙む音や霧の海雲山
 朝霧や旗を伏せたる三百騎猶青
 棧橋の夜霧に赤き灯かな吹竿
 軒燈に雫たまれる夜霧かな葩蜂
 秋風に吹かれて京に歸りけり吹竿
 秋風にふいと倒れし衣桁かな朗月
 秋風や裏返りたる芋大葉葩蜂
 秋風や驚き易き猫の耳同
 後れ毛の亂れ勝なり秋の風同
 酔ひ醒き見れば悔あり秋の風雲山
 柿をもぐ梯子の人や夕野分晋風
 旅に寝て家路を偲ぶ野分かな蘭哉
 怒濤地を撼かす浦の野分かな吹竿

初嵐

野分止んで月残したる山河哉 子鳴
吹切つて海に去りたる野分哉 都雲
野分してあからさまなり伊勢が家 杉亭
ありくと野分の雲や甲斐盆地 葩蜂
水郷や群鳥ばつと初嵐 子鳴
墨の香や繪絹の上の初嵐 不山
高樓や詩箋吹き散る初嵐 雲山
初嵐山の裸温泉溢れをり 葩蜂
濱宿のあけぬ二階や初嵐 吹竿
驚みな土堤に上るや初嵐 閑雨
朝市や露其の儘に船のつく 猶青
露深し黎明を行く狩衣 松宇
並んでは通れぬ野路や露深し 雲山
露負けに女痒がる夕べかな 同
紙燭して眞葛が原の露路かな 幾京
露深き牧場に乳をしぼりけり 朗月
露深く馬踏み入れし草の丈 閑雨
露臭き一茶が宿の畳かな 杉亭
露暗れの御牧に遊ぶ仔馬かな 葩蜂

露

水霜 露おきし御廟の朝の静かなり 猶青
水霜や冷たく光るトタン屋根 蕉村
水霜やメ縄張りて鐘を鑄る 肯穂
水霜や雀の拾ふこぼれ米 蛙人
水霜や汲む手冷たき桔槔 蘭哉
水霜や干竿拭ふ朝朗ら 吹竿
水霜や小川に沿ひし嘍道 雲山
水霜に婢にるや井戸の端 杉亭
水霜ややがて旭のさす土堤葎 葩蜂
露寒 露寒き淺茅にしめる草履かな 吹竿
露の霜 鷄頭の花の黒みや秋の霜 同
秋霜や豚放し飼ふ荒れ島 葩蜂

〔地理〕

秋の丘 栗柿の故郷戀し秋の丘 吹竿
秋の山 きのふ今日は色濃し秋の山 蕉村
秋の川 蘆に入る船の灯細し秋の川 五黄
秋出水 淵は瀬に瀬は淵となり秋の川 雲山
秋出水 秋出水田船は丘に上りけり 杉亭

秋出水

崩れたる線路歩むや秋出水 杉亭
橋桁の落ちた儘なり秋出水 雲山
草伏して芥かゝるや秋出水 同
埋れ木の流るゝ秋の出水かな 子鳴
二階より船に物いふ秋出水 五樂
近道の橋流れけり秋出水 蘭哉
秋出水芥かゝりし水車かな 葩蜂
洪水跡の崖かゝると見上げ鼻 同
早稲中稲晩稻穂に出て落し水 煙灰
落し水國勢調査の戻りかけ 同
月に出で草に濡れけり落し水 子鳴
ひや／＼と小雨降る日や落し水 雲山
近郷の憎まれ爺や落し水 露溪
喜色溢る顔満々や落し水 無外
落し水足跡に鮎の喘ぎかな 青牛
藻の浮きし小田の泡水落し鼻 朗月
水落す門田に立つや庄屋殿 都雲
秋の海島から島へ飛ぶ鴉 閑雨
島鴉群れて戻るや秋の海 同

落し水

初潮 初潮や蛸の上りし濱畑 雲山
初潮や纜張りし大船 葩蜂
初潮に浮く辨天や巖島 閑雨
月の江や初潮に帆の溯る 曉雪
初潮や船に飛込む魚一つ 吹竿
初潮の港に並ぶ巨船かな 都雲
初潮や今日ぞ下さん五大力 猶青
初潮、日を淋しと見と花野哉 晋風
朝鴉花野にゆるく下りけり 公逸
馬子翺り／＼花野や二人旅 不山
巡禮の親子淋しき花野かな 五黄
花野出で花賣る京の女かな 猶青

花野

震災の時住むに家なく

刈田

名も知らぬ人と假寝の花野哉 子鳴
亂れ咲く花野の中や小町塚 吹竿
刈伏せし稻田をあさる鴉かな 蕉村
御野立の記念碑近き刈田かな 幾京
刈田廣く雞餌をあさりけり 雲山
用もなき案山子居残る刈田哉 五樂

秋の海

秋の海島から島へ飛ぶ鴉 閑雨
島鴉群れて戻るや秋の海 同

こぼれ糺芽をふく門の刈田哉 蘭 哉
雨啼れて水一面の刈田かな 閑 雨
御城下は百萬石の刈田かな 朗 月
川下に洲のあらはれし刈田哉 葩 蜂
姨捨の刈田は月を待つ許り 子 鳴
村境近くなりたる刈田かな 杉 亭
入日して榛の木高き刈田かな 同

〔八 事〕

硯洗ふ 硯洗ふや爪に残りし墨の痕 吹 竿
燈籠 七草の模様侘しき燈籠かな 蕉 村
燈籠の影美しき夜なりけり 都 雲
抱き上げて子をあやしたる燈籠哉 雲 山
壁に影うつして廻る燈籠かな 吹 竿
眺めては佛偈ぶ燈籠哉 蘭 哉
神苑や十六の御紋高燈籠 子 鳴
父戻れば燈籠消して釣り替へ 朗 月
燈籠船つい目の先を下りけり 同
雨垂れの太く光れる燈籠かな 葩 蜂

草市

草市や麻幹かたげし戻り道 杉 亭
戀風も立つや廓の草の市 五 黄
草市の草むるゝ香や雨催ひ 吹 竿
草市の更けて露けき灯かな 雪 草
草市や抱えて戻る袖に露 雲 山
草市や提げて戻れば螢飛ぶ 蘭 哉
草市の序でに廻る夜店かな 都 雲
草市の灯ゆれて露のうるみ鼻 子 鳴
草市の果たる跡や月皎し 肯 穂
草市や早秋めける風の音 蕉 村
孤兒の抱いて戻るや市の草 同
八朔の馬ももてなす一日かな 吹 竿
烏帽子や、歪める酔や菊の宴 晋 風
重陽や榮華を餘所の菊の主 蘭 哉
赤飯に妻の鱈や菊節句 雲 山
曾孫玄孫連れて舞けり菊の宴 杉 亭
谷川に草根洗ふや薬掘 吞 于
薬掘るや木樵も行かぬ山の奥 吹 竿
菊合せ列ぶ千株の香りかな 朗 月

秋扇 秋扇叩いてわびし替女の唄 吞 于
捨團扇 捨團扇拾はれて行く厨かな 吹 竿
秋 裕 さすり見る秋素裕の腕かな 同
連子して二度目の妻や秋裕 葩 蜂
カナリヤの籠の罽を別れかな 晋 風
轉宅をさかひに罽の別れかな 蕉 村
別れ罽天井高き一夜かな 閑 雨
色褪せて乾すも恥かし別れ罽 雲 山
別れ罽明るき閨の敷布かな 吹 竿

秋の蚊帳 ふと見ゆる大綻びや秋の蚊帳 同
今はとて秋の蚊帳干す一日哉 同
飛入に物言つきし相撲かな 子 鳴
組合ふて同體に落つ相撲かな 同
突立て勝ちたる相撲小兵かな 公孫子
腹に波打せて笑むや勝相撲 雲 山
又してもあの手で負けし相撲哉 同
女敵の精一ばいや草相撲 肯 穂
どれ見ても負けさうなき相撲哉 杉 亭
米搗と見えぬ相撲の捌きかな 蘭 哉

砧

踊

手足直似て勝負語る相撲歸り みのる
呼だしと行司の茶目や村角力 朗 月
四肢ふんで背の瘤高き相撲哉 葩 蜂
近づけば我が家なり鼻小夜砧 雲 山
川沿ひの一軒家月に砧澄む 葩 蜂
宵々の砧に馴れて讀書かな 吹 竿
月を見に出れば聞ゆる砧かな 蕉 村
踊子の輪になる頃や七日月 杉 亭
我思ふ人はまだ來ぬ踊かな 吹 竿
知らぬ間に婆々も踊の仲間哉 紫 海
見て居たる奴割込む踊かな 猶 青
降り出して踊半に崩れけり 雲 山
うき人も知らぬ顔して踊り鼻 同
松影に半分闇のおどりかな 同
面白う臀振りかはす踊かな 都 雲
月いでていよゝ盛る踊かな 吞 于
隣同志誘ひ合はして踊かな 葩 蜂
松ヶ枝に太鼓吊せし踊かな 同
庭下駄をちんばに履て月見哉 葩 蜂



夜學

主用果て、心落ち付く夜學哉 雲山
草の戸や親は繩綯ひ子は夜學 松宇
松風に燭つぎ惱む夜學かな 五黄
ながくと討論盡きぬ夜學哉 青牛
母獨り夜學子待つや針仕事 芽風
一つ灯に机持ちよる夜學かな 吹竿
紙走るペンの響きや夜學の灯 同
夜學子の懐寒き食氣かな 公逸
夜學終へて名月高く眺めけり 鐘朗
蟹が家の障子煤けし夜學かな 葩蜂
初獵の夢に大物逸しけり 子鳴
初獵や田の面の翁口小言 五樂
栗に寄り茸に散らばり山遊 吹竿
蟲送る灯に吹募る夜風かな 同
麥蒔いて二度の勤め案山子哉 雲山
落武者の立ち止りし案山子哉 同
一枝下り鴉の覗く案山子かな 閑雨
からくと靄吹きはる鳴子哉 吹竿
水汲やもたげて潜る鳴子繩 同

崩魚築

糸紡ぐ片手間に曳く鳴子かな 蘭哉
鍬投げて鳴子を引きに走り 雲山
刈了へて鳴子用なき日となり 子鳴
稻負馬横につるせる鳴子かな 閑雨
鳴子二度曳いて里女の戀路哉 杉亭
洗はれし木の根からむや崩築 蕉村
處々石あらはれて築崩る 蘭哉
何あさる河原鴉や崩魚築 吹竿
片よりて落葉流れず崩築 肯穂
魚一つからびてありぬ崩築 都雲
掛稻や社の前の赤鳥居 松宇
掛稻や月に傘さす宵の口 雲山
掛稻や馬の尻に立つ群雀 葩蜂
稻掛けて見えぬ我が家哉 吹竿
新蕎麥に隣のお母呼びにけり みのる
新そばや田毎の月をほめながら 蕉村
婿入に打つ新蕎麥の馳走かな 雲山
姥捨ての姥に打ちけり走そば 朗月
豊年を祝ふ新酒のかほりかな 紫海

新酒
今年酒

牛買ふて祝ふ一家の新酒かな 雲山
村人に禰宜も交りて新酒かな 同
新酒積む千石船や日本晴 猶青
新酒一駄太刀一文字掣引出 同
日の本に住む嬉しさよ今年酒 終一
神殿に巫女の捧ぐる新酒かな 閑雨
娘ありて新酒買はする樵者哉 木公
村の衆の寄合果て、新酒かな 青牛
馬市の逸物を得て新酒かな 朗月
醸し得て我秋安き新酒かな 吹竿
強られて不覺の酔や今年酒 同
惜みのむ古酒や少なき壺の中 都雲
災厄を又免かれて古酒甘し 肯穂
廻り逢ひし昔馴染や古酒の客 吹竿
雲丹の罐封切る古酒にあこがれ 晋風
驛路に馬子と濁酒を酌みに梟 五黄
芋汁や砕け茶碗を疎み見し 子の鳴
芋汁に温麥飯の香りかな 閑雨

芋
柚釜
栗飯

芋汁や公衆食堂の怪氣焔 朗月
芋汁に腹ふくる、夜月圓し 峽石
泰平の御代や芋掘る豫備後備 吹竿
炭はねて柚釜傾く溢れかな 同
栗飯の鼻衝く許り盛られけり 同
栗飯を炊く迄自炊馴れにけり 晋風
むくつけき手に栗飯の馳走哉 肯穂
栗飯やいぶせき寺の夕餉膳 公孫子
栗飯を僧に参らすお初かな 子鳴
栗飯の栗許り選る子供かな 都雲
栗飯の湯氣あまき盛られけり 葩蜂
茸狩の上手は一人離れけり 雲山
秘め置きて友も誘はず茸狩 同
昨日採らぬ悔や空しき茸狩 同

〔宗 教〕

秋祭 秋祭日晴れてどつと囃しけり 幾京
秋祭更けては袖をかき合せ 雲山
田圃來て灯の明るさや里祭 吹竿

豊けさの秋も定まる祭かな
秋祭生れた里のよかりけり
神うけて人寄る家や秋祭

船灯島にも秋の祭かな
金屏に映ゆる衣裳や秋祭

孟蘭盆や僧に従ふ役男

送火

送火や寂莫として夜の風
送火に恨み侘びたる一夜かな

送火に小雨をほ降る廂かな

送火の消えて淋しや雨の音

門火焚く露深草の小家かな

送火や黍の葉風に一なびき

送火の灰悲しさよほると散る

墓

錦着て歸る故郷の墓参かな

島墓に参りて戻る渡船かな

墓参すや昔の友も亡き數に

ぬかづけば涙新らし墓参り

名代に孫選ばれし墓参かな

草を這ふ香の煙りや墓参り

後の彼岸 御彼岸やコスモス添へ配り物

一日々々寂び行く秋の彼岸哉

秋彼岸淋しき我に妻もなし

鹿

鹿啼くや旅情深めし雨の奈良

宮島や小雨に暮る、濱の鹿

鹿啼くや三笠の山に月細し

伐り株に立ちて背高し月の鹿

鹿啼くや炭焼小屋の雨宿り

其角に似合ぬものや鹿の聲

鹿啼くや都へ百里旅の宿

猪射るや萬山動く閑の聲

猪の逆毛吹とる野風かな

猪の風切つて行く山深し

手負猪富士の裾野を一文子

猪煮るや柱にかゝる火繩銃

曉の江に秋鳥の群れ居たり

出島から島に渡るや秋の鳥

雁

神苑の寂深めけり秋の鳥

秋の鳥日暮れの樹々にうづみけり

秋の鳥名はさまざまにありながら

柿の木の陽に寄來るや秋の鳥

雁鳴くや孤燈の下に文を書く

雁鳴くや暮れなんとと湖白し

月過ぐる雁に遊女の涙かな

近江路や雁低く行く湖の上

水に影落して低し雁の棹

鳴立つや戻りを急ぐ僧一人

鳴立つや舟繋ぎ去る夕間暮

鳴立る暮れ残りたる富士の山

野戻りの黄昏道や鳴の立つ

船やれば飛立つ鳴や沼の暮

鳴一羽古江に飛で暮れんとす

技先に鳴のとまりし焼みかな

此高枝にありとばかりの鳴の聲

群雀を壓して鳴の高音かな

澄む空に貫き透す鳴の聲

眼白

眼白來し枝ぬすみ見て刺繡哉

籠持ちて逃げたる眼白追に梟

椽先に餌を摺る鉢や眼白啼く

裏山の日射せる丘や眼白啼く

眼白啼く藁屋の背戸の熟し柿

水かくれば眼白叩く椽日向

啄木鳥の暮して陽は入りぬ

啄木鳥や刻々穿つ木曾の朝

啄木鳥に有髪の尼の耳敏し

啄木鳥や半分朽ちしはねつゝ

うき我を残して歸る燕かな

きらくと旭まばゆし渡り鳥

夕陽さす森に群れ來つ渡り鳥

不忍の森をかすめて渡り鳥

棧橋に渡船待つ間や鳥渡る

猪

猪の逆毛吹とる野風かな

猪の風切つて行く山深し

手負猪富士の裾野を一文子

猪煮るや柱にかゝる火繩銃

曉の江に秋鳥の群れ居たり

出島から島に渡るや秋の鳥

秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

鳴

神苑の寂深めけり秋の鳥

秋の鳥日暮れの樹々にうづみけり

秋の鳥名はさまざまにありながら

柿の木の陽に寄來るや秋の鳥

雁鳴くや孤燈の下に文を書く

雁鳴くや暮れなんとと湖白し

月過ぐる雁に遊女の涙かな

啄木鳥

啄木鳥の暮して陽は入りぬ

啄木鳥や刻々穿つ木曾の朝

啄木鳥に有髪の尼の耳敏し

啄木鳥や半分朽ちしはねつゝ

うき我を残して歸る燕かな

きらくと旭まばゆし渡り鳥

夕陽さす森に群れ來つ渡り鳥

鳴

神苑の寂深めけり秋の鳥

秋の鳥日暮れの樹々にうづみけり

秋の鳥名はさまざまにありながら

柿の木の陽に寄來るや秋の鳥

雁鳴くや孤燈の下に文を書く

雁鳴くや暮れなんとと湖白し

月過ぐる雁に遊女の涙かな

渡り鳥

夕陽さす森に群れ來つ渡り鳥

不忍の森をかすめて渡り鳥

棧橋に渡船待つ間や鳥渡る

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

出島から島に渡るや秋の鳥

秋刀魚

鳥渡る植物園の日和かな 葩蜂
夕暮や秋刀魚の匂ふ河岸の宿 蕉村
夕暮や秋刀魚の匂ふ裏長屋 蘭哉
秋刀魚焼く烟に鎖す持佛かな 五黄
五丁船に波乗つきそ秋刀魚船 みのる
冠木門あけて秋刀魚の走り哉 杉亭
音立て、脂燃立つ秋刀魚かな 雲山
秋刀魚焼く焰明るし夕厨 葩蜂
釣り上げて鯿の飛沫や船底に みのる
大鯿の竿鳴り曲げて釣られ梟 公逸
暮れ易き夕日の波や鯿の飛ぶ 都雲
月昇る上潮時や鯿の飛ぶ 雲山
鯿飛ぶや潮膨れ来る防波堤 葩蜂
鯿焼くや挿鉢にある辛子味噌 同
釣れ盛る鯿に傾く夕日かな 吹竿
鯿釣りとや乗合船の竿の数 雲山
鯿焼くや串に破りし古扇 朗月
鯿釣や蘆に夕日の沈むまで 蕉村
鯿釣や片手に持てる握飯 松宇

鯿

鯿 鱒

落鮎

落鮎や瀬の水減りて石の垢 葩蜂
さび鮎や雨の肌に泌む旦 雲山
黄色の腹して鮎はさびにけり 蕉村
澁鮎や荒川筋の濁り水 同
蟲鳴くや獨り抱へし膝頭 吹竿
婆娑と来て鬚振る蟲や小提灯 同
離亭の灯蟲鳴く草を照しけり 幾京
蟲の聲さては嵯峨野に近づきぬ 同
蟲籠に月さしかゝる軒端かな 雲山
草深き無縁の墓や蟲の鳴く 同
神苑の暮れて蟲鳴く大鳥居 子鳴
蟲の音に暮れて一叢風のあり 同
暮れて行く堤に尾花地藏かな 同
水神の渡船離れて蟲の聲 同
蟲の聲配所に書を讀む夜かな 閑雨
何蟲か知らねど聲の奇きし哉 木公
蟲賣を呼ぶや雛妓の聲高き 紫海
誰人の墓とも知らず蟲の聲 終一
草深き文豪の墓碑や蟲の聲 煙灰

蟲

蝸

馬病みて見舞ふ厩や蟲の聲 朗月
蟲鳴くや七堂伽藍寂として 猶青
蟲籠をすかして月の上りけり 同
淋しさや籠の蟲の音日に細る 蕉村
蟲籠に傾く月や待乳山 葩蜂
鈴蟲の晝鳴く山の小寺かな 閑雨
馬追の蚊帳に來て鳴く雨夜哉 吹竿
飛び込んで蝸の越ゆる野川哉 同
重さなりて二ツとられし蝸哉 同
ゆれながらさくすくす鳴く小籠哉 公孫子
籠底に鳴く月夜のきりくす 子鳴
きりくす鳴く堂裏の残暑哉 閑雨
泥鉢を起せば出づる竈馬かな 曉雪
庭織る土間に鳴き寄るいと哉 五黄
椽に來て猫に追はるゝいと哉 朗月
文を讀む夜半の友なり鳴くいと 蕉村
雨漏りに壘あぐればいとぞ哉 雲山
蓑蟲の盆栽遂に賣られけり 子鳴
蓑蟲や蓑あむ納屋の藁庇 吹竿

竈馬

蝸

蝸

馬追

鈴蟲

蓑蟲

静けさの庭に蓑蟲聞く夜かな 蕉村
だしぬけに蝸鳴いて森夕日 晋風
蝸や鐘撞堂に夕日照る 蘭哉
蝸のフイと飛びけり匆つるべ 猶青
蝸や米研いて居る寺男 同
蝸に宿さだまらぬ旅路かな 都雲
蝸や椎の葉光る雨上り 朗月
蝸や五山の鐘に暮迫る 杉亭
蝸や宿場外れの大銀杏 蕉村
蝸や雨一三點聲涼し 五樂
蝸や夕榮淡き丘の松 葩蜂
惱みじつと堪えて蝸聞きすま 同
船宿や藻に鳴く蟲の聲近し 蕉村
打上り藻に鳴く蟲や須磨の宿 雲山
夜は藻に蟲鳴く網の干場かな 曉雪
時化近く藻の蟲鳴くや蟹が庭 葩蜂
夕焼や庭の小松に赤蜻蛉 閑雨
川風に上り兼ねたる蜻蛉かな 同
蜻蛉を籠に伏せたる童かな 杉亭

蜻蛉

藻に住む
蟲鳴く

つなかりて二つ飛び蜻蛉哉
吹竿
大空を陽に酔ひとべる蜻蛉哉
葩
もち竿に高く飛びたる蜻蛉哉
雲山
汽車道に蜻蛉斧を揮ひけり
蕉村
蜻蛉や斧ふり怒る草の風
同

秋の蚊
葩
血ぶくれて秋の蚊飛べぬ疊哉
同
秋の蝶地をすれに五六尺
雲山
散り残る花に侘しや秋の蝶
蕉村
秋の蝶草吹く風に消えにけり
吹竿

蚯蚓鳴く
葩
蚯蚓鳴くや星が流るゝ闇の底
同
垣くゞる犬に啼き止む蚯蚓哉
雲山
消えがちに秋の螢の小さよ
吹竿

秋の螢
吹竿
消えがちに秋の螢の小さよ
同
溪谷に水絶えもせて河鹿啼く
子鳴

河鹿
同
釣橋の溪流に啼く河鹿かな
同
細流の水音に和す河鹿かな
蕉村
河鹿啼く溪水白き月夜かな
同

雨誘ふ風や河鹿の啼きしきる
吹竿
月落ちて河鹿に負けし瀬音哉
杉亭
河鹿啼くやそゞる戀し山の宿
猶青

河鹿啼く瀬の音瘦せて峰の月
葩
提灯に出岩傳ひや河鹿啼く
雲山

〔植 物〕

葛
葛に葛まつはりて葛の茂り哉
みのる

木犀
木犀の肌隠しけり葛の蔓
雲山
葛の這ふ窓洩れ来るや樂の音
蘭哉

木犀
木犀の枯木に映ゆる社頭かな
蕉村
木犀や狎に頬する椽の人
晋風

木犀
山門の闇や香に立つ木犀花
吹竿
木犀や聲高く説く法の道
不山

木犀
木犀や晝閑にして廣書院
雲山
闇の庭木犀の香の流れけり
同

木犀
木犀の香に竹めば琴の音
五樂
木犀や機織る窓に匂ひ入る
都雲

色變へ
ぬ松
色かへぬ松染めかねし立田哉
杉亭
老の杖ついても變へず松の色
蛙人

紅葉
雲山
色かへぬ松聳え立つ谷間かな
同
右は伊豆左は相模紅葉かな
朗月

芙蓉
吹竿
陽は家の中より暮れぬ谷紅葉
蕉村
隠れ住む美人の宿や花芙蓉
吹竿

芙蓉
吹竿
破垣や暮色に奢る白芙蓉
杉亭
芙蓉咲くや朝の禱りの鐘淋し
葩

梅嫌
同
大風のおとの夕陽や梅嫌
同
竹の春
詩に瘦せし僧ある寺や竹の春
同

草紅葉
幾京
馬盃の捨湯煙るや草紅葉
同
開墾の鉄も届かず草紅葉
雲山

紫苑
吹竿
丸窓に影あり月の花紫苑
同
高々と籬の上の紫苑かな
雲山

萩
吹竿
猫塚や溝萩そへし欠茶碗
同
柴折戸や萩のこぼるゝ局口
猶青
庭に下りて蟲追ふ猫や萩の月
吹竿

桔梗
雲山
踏み分り脚胖に萩のこぼれ哉
同
朝露の桔梗にぬらす鉢かな
五黄

白桔梗
同
白桔梗さすや局の香合せ
同
水汲みに通ふ徑や桔梗咲く
雲山

白菊
都雲
白菊のちらと見え透く籬かな
同
千輪の菊の根元を覗き見し
みのる

大鉢
閑雨
大鉢に揃ふ菊花や根を覗く
同
幾代を神に仕へて菊作り
蕉村

小雀
蘭哉
小雀の羽根も匂ふや菊島
同
丹誠の大輪の菊香りけり
雲山

懸崖
子鳴
懸崖の菊それゝの香りかな
同
大隠の市井に菊を弄しけり
吹竿

霜に傲る折り残されし垣の菊
五樂
菊日和大宮人の宴かな
杉亭
菊薫る御宴まばゆき灯かな
猶青

朝顔
露
朝顔や音高き起床喇叭かな
同
朝顔や木戸開けて来る郵便夫
葩
轉宅に朝顔惜む垣根かな
露

朝顔のつる伸びて咲く隣り哉 猶青
 朝顔の咲くや念佛に先立ちて 杉亭
 朝顔や庭で受取る新聞紙 雲山
 敗荷に水濁し去る緋鯉かな 葩蜂
 蔓珠沙華 懺悔する若き尼僧や蔓珠沙華 雲山
 古塚に通ふ徑や蔓珠沙華 蕉村
 灯ともせば机に落ちぬ蘭の影 吹竿
 踏み迷ふ深山の奥や蘭の花 都雲
 清貧に處して愛づるや鉢の蘭 同
 蘭並ぶ温室狭く通りけり 朗月
 花蘭や卓にちらばる歌の反古 葩蜂
 カンナ 黄カンナの花 落咲き葉と葉哉 同
 芭蕉 大風の風ぎて月夜の芭蕉かな 都雲
 破れ芭蕉うれたき雲の足迅し 朗月
 静座して芭蕉に雨を聞く夜哉 雲山
 禪庭に雨呼ぶ風の芭蕉かな 不山
 芭蕉葉に雨の流るゝ灯影かな 吹竿
 大風の月影亂す芭蕉かな 葩蜂
 ピアノ弾く庭の小雨や鶏頭花 みのる

芒 野の川の芒分け行く田舟かな 閑雨
 長々と土龍の道や芒原 同
 網干せし漁師の庭の芒かな 同
 吹上げてふとく戦ぐや巖芒 同
 汽車過ぎて芒に動く風ありぬ 吹竿
 段々に哀れますほの芒かな 同
 峠茶屋芒の中に沈みけり 朗月
 芒野や一徑通ず曾我の墓 同
 古沼の半埋りて芒かな 葩蜂
 曉澄んで野に穂芒の亂れけり 同
 庵の窓富士を隠せし芒かな 猶青
 大江の見ゆる限りは芒かな 同
 首塚の夜風に戦ぐ芒かな 都雲
 秋の香の穂に出にけり花芒 終一
 月踏んで馬子の唄ふや芒原 雲山
 一陣の風に芒の亂れかな 同
 戀塚に立てば一本芒かな 同
 斷層のあやうき事よ花芒 肯穂
 月の出て庭の芒に風渡る 幾京

芒野を越して行くなり村祭 紫海
 汎濫の水に漂ふ芒かな 露溪
 頭巾せる地藏のはたの芒かな 子鳴
 風に行くなりになびくや花芒 蕉村
 蘆の花 蘆咲くや船に飯たく夕煙 松宇
 鬼灯 鬼灯の盗人追へば下駄の鈴 同
 鬼灯やまだ戀知らぬ妹の振り 雲山
 鬼灯や亡き子に手向く親心 五樂
 鬼灯や妹が手植の二三本 吹竿
 切火して鬼灯鳴らす女かな 子鳴
 コスモス たわましてコスモス渡る雀哉 閑雨
 コスモスの庭に洩る灯のピアノ哉 公逸
 コスモスの庭廣うてピアノ哉 朗月
 コスモスの日和に住る小家哉 葩蜂
 安藝宮島にて
 コスモスの孤亭破れたり水もなし 子鳴
 秋草の土堤すれくや遊覧船 みのる
 秋草や白磁の鉢の活け手前 幾京
 一鉢に秋の七草咲せけり 吹竿

無花果 無花果をもぐ手に乳の雫かな 晋風
 紫に無花果熟す西日かな 杉亭
 無花果や風を苦にする女郎蜘蛛 肯穂
 熟れ切つた無花果落き潰れ鼻 蕉村
 降り續く雨に無花果腐りけり 雲山
 無花果や日を遮りて厠窓 公孫子
 無花果や釣瓶のさる井戸の端 蘭哉
 無花果に鴉向ひて啼かずあり 子鳴
 柘榴割るや壘に走る紅水晶 葩蜂
 柘榴割れし澁柿二つ溝の中 閑雨
 澁柿や手の届くだけ爪の痕 蘭哉
 澁柿も色に變りはなかりけり 雲山
 澁柿の只徒らにたわゝなり 猶青
 澁いとほ嘘だと柿をとる子哉 蕉村
 木の実 一と庭木の實を干して末寺哉 葩蜂
 袂から木の実こぼるゝ壘かな 雲山
 國寶の山門古りて木の實降る 猶青
 團栗 團栗も仕舞はれてあり玩具箱 吹竿
 椎の実 闇深く椎の實落つる板屋かな 葩蜂

朝寒や堀立小屋の古浴衣 雲山
 名月に無心の子等の唱歌かな 同
 提灯を便る都の夜寒かな 同
 秋雨に灰汁の流る、街路かな 同
 バラツクに滴る露の夜寒かな 同
 無慙なる魂にそ、ぐや秋の雨 蕉村
 虫鳴くやなるに破れし壁の隙 同
 疊さへなき假住の夜寒かな 同
 荒れ果てし都を歸る燕かな 同
 冷かに焼野照らすや後の月 同
 大地揺るや怪雲高き秋眞晝 葩蜂
 花芙蓉に天日燠ず霞火かな 同
 雲を透く日の色赤しなるの秋 同
 秋風や灰吹上ぐる大路小路 同
 假小屋に團子もなくて月見哉 同
 避難者の天幕住ひや月の秋 同
 鶏頭や土塀崩れし寺の庭 同
 鐘樓に人住める灯や秋の雨 同
 草に寝て曉寒し露の音 同

冬之部

〔時 候〕

嚴冬の襖外づして軍議かな 木公
 水も氣も荒みて山河冬來る 都雲
 林透く遠山澄んで冬來る 吹竿
 湯豆腐に酒のうま味や冬來る 蛙人
 山透いて海音近し冬來る 蘭哉
 禪門に酒の香もれて冬來る 杉亭
 床の軸掛け替々冬に入る日哉 みのる
 ふさくと狎の手伸ぎ冬に入る 葩蜂
 黍鼓の風除け垣や冬來る 雲山

崖下の埋もれし家や花木 同
 橋杭にかゝる骸や稻光り 同
 焦土の蒸る、異臭や秋暑し 同
 物皆の亡びし上や二十日月 同
 被服廠跡追弔會
 白骨の山と積まれて秋悲し 同

初冬

初冬や糸より細き二日月 蕉村
 初冬の日ざし乏しき小家かな 都雲
 初冬やいつまで床の一つ軸 五黄
 初冬や顔そむけたる夕北風 蕉村
 初冬や土盛り掛けし葱畑 葩蜂
 今朝の冬 大空の晴れきき寒し今朝の冬 同
 驚みな土堤に背を干す小春哉 閑雨
 小春日や頭巾氣にする新法主 好石
 小春日や溪を流る、温泉の匂 朗月
 輕装に暮れては寒し小六月 都雲
 小春日に猫戯れて居し赤手毬 子鳴
 羽織脱ぎ庭の手入れや小六月 蘭哉
 井の端に漬菜洗ふや小春風 雲山
 椽先きに猫の爪とぐ小春かな 同
 野外劇にパラソルさす小六月 同
 小春椽蹲まり居て頭垢を搔く 吹竿
 烏瓜捨てし徑や小六月 芽風
 濡れ椽に猫脊伸すや小六月 杉亭
 藥草の椽に香高し小六月 肯穂

小春
小六月

欄に干す緋裏蒲團や小六月 蕉村
 小春日や犬と芝生にたわむる、 猶青
 糞蟲の首出してるる小春かな 葩蜂
 霜月や日脚届かぬ持佛堂 杉亭
 霜月や堆肥に上る朝煙 雲山
 霜月や嫁ぐ妹娶る兄 朗月
 自轉車を押して坂行く師走哉 吹竿
 間違の電話うるさき師走かな 同
 刻々と師走をきざむ時計かな 不山
 師走人電車に物を忘れけり 雲山
 宿直の飯食ひに出て師走かな 葩蜂
 短日の禪解く間もなかりけり 吹竿
 短日をかこちながらも煙草哉 肯穂
 窓に日のしばらくあゝ冬至哉 葩蜂
 冬の朝 冬の朝上る満都の煙哉 閑雨
 冬の夜 冬の夜の夢あた、かし金襖 松宇
 霜夜 鳥鳴いて霜夜の宮の靜寂かな 煙灰
 鈴振つて踏切番の霜夜かな 子鳴

寒さ

冴ゆる

鐘冴ゆる

冬ざれ

春隣

父母のために菜摘みや袖寒し
御書院の壘眞青き寒さかな
月冴えて只松風の募りけり
灯點々郊外いと冴ゆるかな

冴ゆる夜や貝殻道の下駄の音
舳燈の冴えて港の眠りかな
驛遠く軌道に冴ゆる月皎し
厨灯に葱白々と冴ゆるなり

鐘冴ゆる奈良の灯やまばら
冴ゆる鐘壁なき家に響きけり
鐘の音の湖にこぼれて冴え
添乳して泣兒賺すや鐘冴ゆる

合ひ客の狸寝入や鐘冴ゆる
冬ざれや閉まの二軒茶屋
冬ざれて蛇籠に遠き流れかな
冬ざれの庭に目立つや實南天

春近し

春待つ

歳の暮

歳の瀬

年惜む

除夜

井の端に積む洗ひ菜や春隣り
張替にやる三味線や春近し
春待ちて一壺の酒の縁なる
大錠をかけて春待つ土藏かな

三たび来て留守なる家や年の暮
あれば憂し無ければ寒し年の暮
爲す事もならで歳のみ暮れんとす
歳の瀬を鼓打たする人もあり

行年の帳合に手の痺れかな
行年や蓑蟲の蓑脱ぎもせで
雑音の交々年の行く街よ
行年の巷に踏むや馬の糞

無爲にして年惜む齡となり
落着かぬ心に年を惜み
顧みて爲す事多し年惜む
年惜む酒事のあり太夫部屋

春宵

吹竿

同

同

同

同

五樂

松宇

都雲

肯穂

松宇

朗月

春宵

吹竿

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

松風や五山に響く除夜の鐘

魔の年を早く撞き去れ除夜の鐘

除夜の鐘聞つゝ浸る錢湯かな

おのゝし年も終りぬ除夜の鐘

湖を遠く渡りて除夜の鐘

信濃路は雪深からめ除夜の鐘

突き崩す炭團の粉火や除夜の鐘

除夜更けて漸く淋し下駄の音

除夜の鐘聞くだけ聞いて寝る

皆灯るホテルの窓や大晦日

大晦日

冬の日
カーテンに遮られたる冬日哉
水行の背中に白し冬の月
立枯の上野の杉や冬の月
鐘撞て見下す町や冬の月
我影に引かれて行くや冬の月
立枯れの松一本や冬の月
捨てらる木に住む猫や冬の月

寒月

初雪

雪

雪

雪

敵討て刀ぬぐふや冬の月

冬の月晴れて照すや難破船

寒月や石人石馬寂として

寒月や我背のまるき影坊師

宿願の水垢離すなり寒の月

寒月や五條の橋に荒法師

虎吼えて寒月高し西比利亚野

寒月に嶺々とがりたる起伏哉

寒月を別荘守の寝酒哉

初雪や御苑の松に鶴の聲
初雪や厠の窓の薄明り
初雪や厠の前の實南天
大雪に諸國の人と泊りけり
静けさや電線に積む闇の雪
巢探がして雀蹴落す樋の雪
横の葉にまるく積るや牡丹雪
枯木下りて鴉あさるや森の雪
朝鴉飛ぶや崩るゝ松の雪
息かけて手先温くめつ雪まる

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

閉雨

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雲山

同

吹雪

降り映ゆる雪や丹塗の大伽藍 吹竿
校庭や健兒の集ふ雪いくさ 幾京
街道に消えて残んの雪達磨 同
巻煙草吸盡したる雪見かな 五樂
繪襖の雪見事なり智恩院 露溪
炭部屋に道の付きけり雪の朝 同
雪の日や片戸下せし町外れ 雲山
沖暗く雪に暮れけり泊り船 同
カーテンの隙間覗くや夜の雪 同
大雪や晝を灯れる藪の家 葩蜂
すく／＼と葱の葉先や雪の畑 同
屋根の雪落ちて泥とぶ日向哉 同
雪の日や名木たいて馳走粥 三萬石
何邊に目鼻を付けん雪こかし 好石
カーテンをあげる玻璃戸今朝の雪 みのる
晴れて日に煌めく雪の野道哉 朗月
巻煙草咬へて雪の野道かな 都雲
吹雪く夜の一軒灯る酒屋かな 松宇
落人の吹雪に惱む鳥羽竹田 幾京

時雨

金網を覗く兎や初時雨 葩蜂
高輪や海へなぐれし一ト時雨 松宇
宮島や時雨て暮る、大華表 如水
馬市の引けて時雨る、古驛哉 不山
時雨る、や松の木の間の長樂寺 杉亭
時雨る、や煙草を刻む里の家 蘭哉
時雨る、や橋錢なげて駕急ぐ 朗月
蕎麥賣りの聲寒げなり小夜時雨 五樂
癩起す旅の女や夕時雨 吹竿
時雨る夜を静かき温泉槽哉 都雲
いとけなき辻賣や小夜時雨 同
青丹よし奈良は時雨の名所哉 五黄
きぬ／＼や時雨て寒き駕籠の膝 同
燈臺の灯影沈みて時雨けり 蕉村
暗間見て渡る大井の時雨かな 同
夢迷ふ枯野淋しく時雨けり 同
かん酒に臍あた、まる時雨哉 葩蜂
秩父嶺のまた暗うなる時雨哉 同
月の面を雲掠め去る時雨かな 同

冬の空

波百里吹雪狂ふや佐渡ヶ島 杉亭
灰色に行手の暗き吹雪かな 秋月
追ひかけて呼べど聞えぬ吹雪哉 雲山
行暮れて吹雪に惱む聖かな 蛙人
行過ぎて一足戻る吹雪かな 吹竿
冬空や一とこ明き湖の上 葩蜂
飛石の周り／＼に霰かな 閑雨
戸樋を打つ霰を聞くや厠中 同
振る鹽に霰交るや漬菜桶 雲山
蛸壺に霰たばしる小船かな 葩峰
宵霰霰交りとなりけり 同
階前の棕櫚音もなく霰れけり 同
馬で越す關所の跡や初時雨 蕉村
初時雨裾野の村の暮れ早き 肯穂
燃えしふる根株の煙や初時雨 みのる
初時雨小雀いとど膨れ居り 閑雨
なす事もなき夜なり梟初時雨 都雲
雀こぼれし庭の小渦や初時雨 芽風
麥蒔のうねの濕りや初時雨 雲山

霽

初時雨

虎落笛

島出島かき消して行く時雨哉 閑雨
波見へて月を包める時雨かな 同
終點や時雨に散りし電車客 同
馬追の唄に時雨る、孤村かな 雲山
さく／＼と棕櫚の葉すれり小夜時雨 同
傾城の寝物語りや小夜時雨 同
門に立て唄賣る女時雨けり 同
時雨る、や坊主乗せたる跛馬 同
時雨れんか比良を離れし雲 同
アンテナを危む兒等や虎落笛 朗月
捨猫の聲いぢらしや虎落笛 都雲
怪談の始まる頃や虎落笛 みのる
月落ちて卒塔婆の下や虎落笛 杉亭
しび積た船もやひけり虎落笛 蕉村
獨居の異郷に聞くや虎落笛 肯穂
吹き付ける巷の砂や虎落笛 雲山
虎落笛麓の藁屋灯りけり 葩蜂
巻煙草踏消して去る冬の風 青牛
背向けて避ける埃りや冬の風 吹竿

冬の風

北風から

北風や庭吊せし納屋の口雲山
 北風や隙間をもる、破れ襖同
 北風に吹かれて痛みまぶた哉蕉村
 から風に背むけてつゞ煙草哉みのる
 北風や戸前見にゆく小提灯杉亭
 北風に更けて疎らや夜店の灯吹竿
 北風や御用をきくも懐手蘭哉
 風の暗に消え行く一騎かな猶青
 風の市に狂へる奔馬かな雲山
 風の風ぎて星降る夕かな杉亭
 風や捨兒に添へし頼み状暮山
 木枯や星降る夜の町淋し子鳴
 風に暮る、渡船場人稀に失名
 風や馬賊に煙る家三戸木公
 風をきざんで聞くや山寺の鐘桂南
 風に老骨細る思ひあり蕉村
 木枯に不安の一夜過しけり雲山
 風のあとや夕日の秩父山五黄
 風に吹かれて一人瀬田の橋同

初霜

風や辻説法の聲高く幾京
 木枯やめげず厭はず辻説法同
 風の日ねもす吹きて月夜なる都雲
 木枯や蘆間にゆる、捨小舟同
 風の止まで其の儘暮れにけり猶青
 風や岩に砕くる波頭同
 風や鴉のさわぐ森の家葩蜂
 風に月は小さく落ちにけり同
 木枯や川上遠き渡船の灯同
 木枯や後ろ吹かる、頬冠吹竿
 宿願に踏むや霜置く石疊猶青
 終ひ湯の歸りの道や霜白し冲舟
 橋畔の霜踏んで行く飛脚かな都雲
 蹴付けたる石に聲あり霜の月葩蜂
 初霜や見ゆる限りの麥島同

〔地理〕

冬の山 薪割の斧の響や冬の山閑雨
 酒買ひに一僧冬の山下る幾京

山眠る

吹き暮れて今日も人なし冬の山吹竿
 陽受けて海山共に眠るかな猶青
 船ならぶ入江抱くや眠る山同

冬の川

冬川や更けて橋守る灯の細き都雲
 冬川や待つ連れもある渡し船五黄
 みなかみの山皆白し冬の川吹竿

石一つ沈みて白し冬の川葩蜂

冬の海

大巖に下る枯藻や冬の海同
 枯野行く跛の馬の荷揺れかな晋風

枯野

鐵路坦々雨は斜に枯野かな青牛
 我立てる庭は枯野に續きけり十城
 丸木橋隔て、續く枯野かなみのる
 誰が墓ぞ荒れて枯野に啼く鴉子鳴
 編笠の只一つ行く枯野かな木公
 鳥影も瘦せて見えたる枯野哉五樂
 野晒に鴉群れ鳴く枯野かな杉亭
 枯野ゆく姿や寒き瘦法師五黄
 星飛んで松只黒き枯野かな蕉村
 幌馬車を待つ客一人枯野茶屋葩蜂

冬田

崖下の道ほそくと冬田かな葩蜂
 御手洗の氷に柄杓とられけり杉亭

氷

盛り上る手洗鉢の厚氷雲山
 庖丁の刻む氷や朝煙蘭哉

氷柱

摺れ合々軒の氷柱と牛の角と松宇
 大佛の鼻から三つ氷柱かな杉亭
 茶の席に軒の氷柱も馳走かな露溪
 奇しき哉偉人の眠る大氷柱幾京
 水車音絶えて柳の氷柱かな子鳴
 玲瓏と夜明くる軒の氷柱かな吹竿

煤掃 煤掃の煤の中にも煙草かな 杉亭
厄拂 聲のよき男を呼んで厄拂 都雲
身なりより聲の美し厄拂 蕉村
紙包目方を引くや厄拂 杉亭

寒聲 厄拂更けて戻るや木賃宿 雲山
餅搗 餅を搗く隣に早く起されし 吹竿
餅を搗く響に揺らぐ灯かな 同

除隊 盃を下戸にも配る除隊かな 杉亭
營門に名残を惜しむ除隊かな 肯穂
紋付のお辭儀可笑しき除隊哉 みのる

冬支度 カーテンを赤に換^りや冬支度 閑雨
冬座敷 床の間の人形寒し冬座敷 吞子

冬構 美しく繩張る松や冬構 蕉村
窓に富士覆ふ芋殻や冬構 子鳴

冬籠 石積で冬構へたる山家かな 閑雨
晩年の俳畫習ふや冬籠 蕉村

聖賢の道を尋ねん冬ごもり 雲山
待命の物足らずして冬ごもり 沖舟
冬籠る猫のあくびのかげる^る 子鳴

冬籠る老公^が訪ふ大臣かな 猶青
冬籠土堀めぐらす豪家かな 葩蜂

避寒 母一人子四五人や冬ごもり 同
梅一輪入れて避寒の便りかな 朗月

年の市 年の市明寒う店をた^くみけり 曉雪
年の市辻尺八の哀れなり 閑雨

古曆 雪空をほんのり染めて年の市 石山
年の市箒かついで歸りけり 沖舟

古妻や物買慣れて年の市 吹竿
古妻の破れ襖や古こよみ 朗月

捨て難き吉日ありき古曆 蛙人
三四枚めぐらであるや古曆 葩蜂

破れ袴着て鼻聲や曆賣り 蕉村
大聲に物知り顔や曆賣り 雲山

曆賣四角張つたる男かな 都雲

煮凝 煮凝や厨の隅の猫の飯 葩蜂
煮凝の溶けこむ飯の熱さかな 吹竿

鍋焼 鍋焼や日蓮講に更けし路地 葩蜂
乾鮭や隣へ佗ぶる猫の罪 肯穂

乾鮭の鱗光りぬ夜店の灯 朗月
乾鮭を提げて夜道や狐啼く 吹竿

乾鮭や霰たばしる馬の背 雲山
乾鮭の鰓にはさみし名刺かな みのる

竈火や乾鮭かゝる煤柱 葩蜂
風邪聲や夜具^がく^と埋れ居て 同

火の番 火の番の挨拶交はずや町境 雲山
火の番や風吹き募る夜の辻 葩蜂

雪空を赤く染めたる大火かな 同
火事見るや辻の夜風に慄^るえつ^く 吹竿

大根引

火事

火の番

風邪

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

火の番

風呂吹

風呂吹に梵妻の口の尖りかな みのる
風呂吹に地酒親しむ寒さかな 同

納豆

納豆に辛子を添へて飯熱し 都雲
徒然を語る尼僧や納豆汁 蕉村

格子拭く手をやめて買ふ納豆哉 吹竿
喰はず嫌^ひ去年^{まで}ありし納豆哉 朗月

二階から納豆を呼ぶ自炊かな 葩蜂
宗論を聞きつ煮過ぎぬ納豆汁 猶青

熱爛

無事な顔今年も見せて曆賣り 吹竿
嚴めしき髯の主や曆賣り 猶青

熱爛に氣焔を吐くや夜の群 杉亭
熱爛に耳押へたる笑かな 晋風

熱爛や風によれ合ふ繩暖簾 肯穂
熱爛や行燈暗き屋臺店 雲山

熱爛に親みて海苔の香かな みのる
熱爛の五體を廻る利那かな 都雲

熱爛やすき腹えぐる灘の味 蘭哉
熱爛やいさゝか^な風邪の氣味 朗月

熱爛にバーの灯赤く更けに鼻 葩蜂
熱爛に辛子を添へて飯熱し 都雲

冬の灯 侘しさや壁の穴もる冬灯 吹竿

天井に欄間の影や冬灯 同

冬の灯に心澄み来て寝ともまじ 子鳴

冬の町 卷煙草投げて電車や冬の町 吹竿

日向ぼこ 鉤裂や羽目にもたれし日向ぼこ 同

樂書や日向ぼこの悪太郎 猶青

莖 漬 漬菜樽重石あぶなく置かれ鳧 吹竿

〔宗教〕

寒念佛 肉も凍る比叡風や寒念佛 蕉村

遠く近く高く低く寒念佛 葩蜂

夷 講 借袴すつこけ易し夷講 晋風

禿頭の番頭首座に夷講 青牛

店員の皆健かに夷講 都雲

芭蕉忌や時雨、夜半に人戀し 肯穂

芭蕉忌やあれば猶よき雨の音 蛙人

芭蕉忌や時雨れて戻る草の宿 雲山

芭蕉忌や噓ひどける大伽藍 みのる

迷はざる人の集ひや翁の忌 蕉村

一桶の澤庵漬けて翁の日 葩蜂

罪知らぬ子等の集ひクリスマス 吹竿

クリスマス心置なき集ひかな 蘭哉

樂の音に聖火のクリスマス 肯穂

伴奏は牧師の妻やクリスマス 葩蜂

抜けかけて遊女がもも西の市 子鳴

芋提げて歸る二人や西の市 吹竿

人中をぬけ出て寒し西の市 蕉村

〔動物〕

霜踏む鹿 鹿臥せし處斑らや霜の芝 晋風

霜を踏む鹿の契りかれぐに 杉亭

霜踏みて片足ふるや濱の鹿 閑雨

神苑の霜に跡をく小鹿かな 吹竿

銛立ちて渦巻き起す鯨かな 雲山

鯨吼ゆる玄海灘の月凄し 桂南

竹法螺に漁村色めく鯨かな 暮山

洋上の兒に無電の句 朗月

いざさらば跳る鯨を見て行き 朗月

軍艦に悠然と見る鯨かな 都雲

鯨追ふ波のしぶきや八挺櫓 猶青

朝風ぎを銅羅打つ濱や寄り鯨 葩蜂

笛啼に覗けば瀧の涸れてあり 子鳴

笛啼や熱海へつゞく蜜柑山 朗月

笛啼を厠に聞くと藪小寺 閑雨

笛啼や藪を透して湖見ゆる 葩蜂

笛啼や詣つ御廟の朝な〜 猶青

鶴 鶴 鶴 鶴 鶴 鶴 鶴 鶴 鶴 鶴

鶴 鶴の影も止めぬ早瀬かな 五黄

鶴 鶴や蛇籠止めたる杭の先 朗月

木 木 木 木 木 木 木 木 木 木

木 木重二十重敵のこまや木兎の啼く 猶青

木 木兎啼いて弦月暗し杉木立 杉亭

木 吹き尖る木の間の月や木兎の聲 蕉村

木 星一つ流れて淋し木兎の聲 同

木 木兎啼いて亡命客の嘆じけり 子鳴

梟 梟や寄添ふて寝る母の側 吹竿

三十三才 茶殻干す小策の椽や三十三才 朗月

三十三才 隠居所の障子明るし三十三才 猶青

味噌部屋の壁の破れ三十三才 雲山

木屋町に灯ともす頃や川千鳥 幾京

小夜千鳥舸夫が寝酒も覺る鳧 五黄

千鳥群れて大海原は明けんき 猶青

事なほ千鳥は啼きぬ雨の須磨 同

雨聴けば微かに千鳥啼く夜哉 同

須磨は散り明石は群と啼く千鳥 吹竿

荒磯の岩打つ波や小夜千鳥 雲山

海照に閉ざす障子や啼く千鳥 葩蜂

龍宮の夢見て居るか浮寝鳥 子鳴

荒磯や見えつ隠れつ浮寝鳥 都雲

古沼や水鳥暮れて月が浮く 吹竿

鍋洗ふ女に遠し浮寝鳥 葩蜂

水鳥や岸近く芥湖る 同

枯枝に背ふくらすや寒雀 曉花

井の端にふくれて啼くや寒雀 雲山

軒の陽や二つ並んで寒雀 葩蜂

大河豚の齒を怒らして膨れ鳧 同

河豚喰き河豚の夢見し其夜哉 吞于

海鼠

くねくとすれど角を海鼠哉 五樂
噛み切らず滑り込みたる海鼠哉 閑雨
かくてまた箸を逃るゝ海鼠哉 蕉村
缺け齒から海鼠つると迂り鳧 子鳴

冬の蠅

室出せし麴の箱や冬の蠅 晋風
ほとぼりの甕離れず冬の蠅 吹竿
冬の蠅小猫は耳にうるさがり 肯穂
折々に灯の蓋打つや冬の蠅 みのる
電燈の笠に動かす冬の蠅 都雲
うなひ兒に押えられ鳧冬の蠅 蘭哉
冬の蠅足に重たくとまりけり 吞于
冬の蠅打つ氣になれず逃し鳧 雲山
ケツチンの張り天井や冬の蠅 朗月
天井に灯の輪明るし冬の蠅 葩蜂
冬の蜂羽震るはせて歩きけり 吹竿
闇の夜や時々騒ぐ御濠鴨 閑雨
卵屋のもみ箱に一つあまり鴨 同
鳩啼いて蘆間に赤き入日かな 蕉村
來る波を沈みて待つや鳩 蘭哉

冬の蜂

鳩

風下に型さまよや鳩の群 みのる
落日に潜るも忙しかいつむり 蛙人
鳩の群矢走によるや比叡風 杉亭
あらぬ方についと浮びぬ鳩 雲山
水亭の障子に陽ありかいつむり 葩蜂
鳩一つもぐりそこねて浮み鳧 同
鳩浮くや水輪にゆるゝ松の影 吹竿
寒鮒や貴賤をつゝむ頼冠り 肯穂
寒鮒や簀にはねたる尾の飛沫 蘭哉
寒鮒や桶に放てば潑漑と 都雲
鈎呑んで動きもやらず寒の鮒 吹竿
寒鮒や陽筋移らふ沼の底 葩蜂
古狸の出る噂の寺の廁かな 閑雨
狸飼ふ麓の宿や暮早き 葩蜂
濱茶屋の庭何もなし牡蠣の殻 吞于

寒鮒

狸

牡蠣

寒梅

〔植物〕

寒梅に淡き夜明の煙りかな 都雲
寒梅に不受不施の寺荒れけり 木公

寒梅によき友なれや月と雪 蘭哉
寒梅や落胤の姫歌に泣く 冲舟
寒梅や綺麗に住める寡婦どち 吞于
寒梅の鉢のせてあり具足櫃 猶青
寒梅や雀水呑む手水鉢 葩蜂
寒梅の横枝白らむや夕雲 閑雨
松に交る寒梅の枝や花まばら 同
寒梅や襦袢忘れし垣の外 子鳴
寒梅に國寶の襖古びけり 同
寒梅や香一炷の廣書院 杉亭
寒梅や主の髻の美しき 同
温泉烟に曇る玻璃戸や寒椿 葩蜂
枇杷の花 羽目を蹴る厩の馬や枇杷の花 吹竿
枇杷咲くや陽に温まりし廁窓 葩蜂

山茶花

歸り花

八手の花

落葉

茶の花や小家疎らに新開地 葩蜂
霜崩れして山茶花の眞晝かな 同
山茶花やうら若き身を墨衣 蕉村
朽ち残る小町櫻や歸り花 松宇
片枝は夢見て咲くか歸り花 蕉青
歸り花咲きて聖の遷化かな 終一
名も知らぬ鳥啼く枝や返り花 蕉村
尼寺の庭の老木や歸り花 桂南
養蜂の箱並びけり歸り花 朗月
石造の大玄關や花八ッ手 閑雨
數へ日となるや八手の花盛り 雲山
落葉して傾く儘の鐘樓かな 五黄
駕下りて落葉踏み行く一人哉 都雲
落葉焼く烟の空を落葉かな 蕉村
ふと踏めば落葉の下は水なりし 同
一人行はば山路ざわつく落葉哉 子鳴
落葉してあらはに寒き佛かな 吹竿
ふと見たる母の涙や夕落葉 葩蜂
谷落葉底に囁く小川かな 閑雨

茶の花

茶の花や名利を餘所の庵の主 蘭哉
茶の花に日影慌たし鳥の啼く 子鳴
茶の花の枯蔓引けばこぼれ鳧 吹竿
茶の花や山門内に野菜畑 雲山
茶の花やさびて氣高き古社 蕉村

寒椿

枇杷の花

茶の花

茶の花や山門内に野菜畑 雲山
茶の花やさびて氣高き古社 蕉村

堂裏も古井も銀杏落葉かな 同
魚逃げて跡に浮立つ落葉かな 同
枯萩や松風寒き高臺寺 吹竿
冬木立 赤壁のきわ立ちて見ゆ冬木立 幾京

葱 幼児や葱の枯葉を吹破る 肯穂
葱畑の掛藁あさる雀かな 雲山
井の端や霜にちらばる葱の屑 葩葩
霜日和白菜車つゞきけり 葩葩
洗ひ上げし大根寒し夕月夜 松宇
大々根すつほり抜けて轉び鼻 吹竿
大根干す廂に寒き入日かな 五黄
大根に蒔着せたる軒端かな 雲山
馬洗ふ水波む背戸や枯尾花 幾京
明残る月より高し枯尾花 桂南
何の骨か知らねど白し枯尾花 木公
丘の上に誰招くらん枯尾花 冲舟
枯れくして日の蔭寒き尾花哉 蕉村
牛遅し屠所の小徑の枯尾花 好石
武藏野に不二のみ白し枯尾花 猶青
撫で廻す地藏の顔や枯尾花 雲山
雨に晒す觸體一つや枯尾花 同

吹き暮れて月残りけり冬木立 同
炊煙の上る藁屋や冬木立 雲山
藁垣の家皆低し冬木立 葩蜂
枯柳や船に吹き込む砂埃り 吹竿
冬牡丹 半開の蕾久しや冬牡丹 猶青
伽羅の香の書院明るし冬牡丹 蘭哉
新宅の構へふさはし冬牡丹 都雲
深窓に寒さも知らじ冬牡丹 蕉村
卷煙草乏しき箱や水仙花 晋風
水仙やあるかなきかに日ある 吹竿
カーテンに水仙活けし机上哉 芽風
水仙や薄日のあたる窓の上 雲山
卓上に伏せし歌集や水仙花 葩蜂

冬草 日溜や雞が啄む冬の草 矢明
冬草にしがむ地蜂や庭暗る、 吞于

水仙

〔雑〕

船暈に引くカーテンや冬の旅 晋風

〔前置句〕

聞青牛君詠

雪折の骨にこたゆる寒さかな 吹竿

大震災の跡

霜置くや榮華の跡の焼け瓦 蕉村
恵まれし衣短き寒さかな 同
バラツクの屋根に騒がし玉霰 同
歪みたる家其まゝや冬籠り 同
冴ゆる夜や金龍山の残る鐘 同
落葉する梢もなくして假り社 雲山
時雨るゝや灰搔く人の頬冠 同
月寒しトタンの屋根に光る霜 同
冬ざれて佛塚に人もなし 同

大震災の復興著し

町々や冬日あたゝかに鑿の音 葩蜂
競ひ打つ槌の響や小春風 同



月白く只風のみを芒かな

春宵

海鼠くねくねとすれど角も海鼠茂

雅號及氏名 (いろは順)

吞	暮	木	忍	露	吹	蕉	子	み	猶	幾	杉	肯	雲	閑	都	葩	朗	雅	
于	山	公	々	溪	竿	村	鳴	の	青	京	亭	穂	山	雨	雲	蜂	月	號	
故	加	川	松	伊	菅	(以上編輯同人)	篠	小	小	佐	能	内	高	川	立	吉	中	池	二
藤	越	村	藤	野	野	原	原	田	池	野	勢	藤	橋	合	岡	野	森	宮	氏
元	龜	四	良	善	茂	茂	茂	切	子	邦	士	頼	直	卓	秀	太	英	義	名
直	齡	郎	儀	治	氏	氏	氏	泰	一	實	松	太	涉	爾	四	二	義	朗	氏
氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏

紫	松	峽	蛙	丁	公	公	好	五	五	不	月	曉	溪	月	蘭	芽	竹	竹	雅
海	宇	石	人	山	逸	孫	石	樂	黃	山	光	雪	楓	洲	哉	風	栖	生	號
中	伊	遠	高	杉	竹	金	間	富	高	鈴	島	林	中	小	中	北	武	古	氏
村	藤	藤	橋	浦	内	子	野	安	田	木	村	真	島	池	村	川	井	谷	氏
五	半	嘉	仁	式	幸	一	二	貞	貞	源	慎	輝	宇	千	富	敏	彦	竹	名
六	次	德	兵	式	一	一	一	一	一	次	藏	輝	一	萬	晴	一	作	八	氏
氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏

雅號
晉風 勝峰 晉三
鐘朗 本田 照良
春宵 和澤 重雄
青牛 故市 川勝 雄氏
石韋 竹内 勝雄 氏
青洲 松本 錫次 郎氏

以上の外今姓氏を詳にせざるものほ之を略す。



昭和四年五月十五日印刷
昭和四年五月十五日發行

非賣品

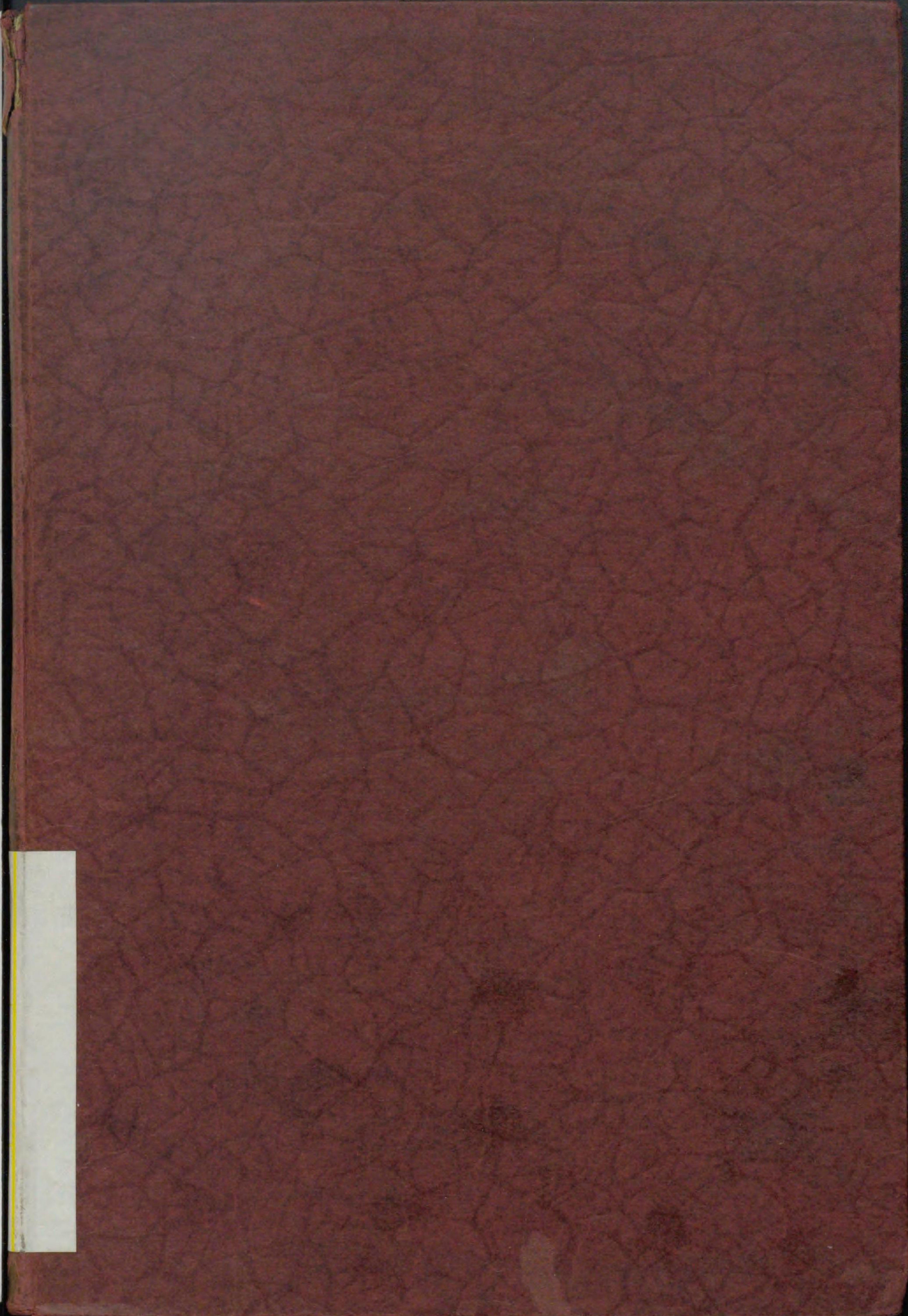
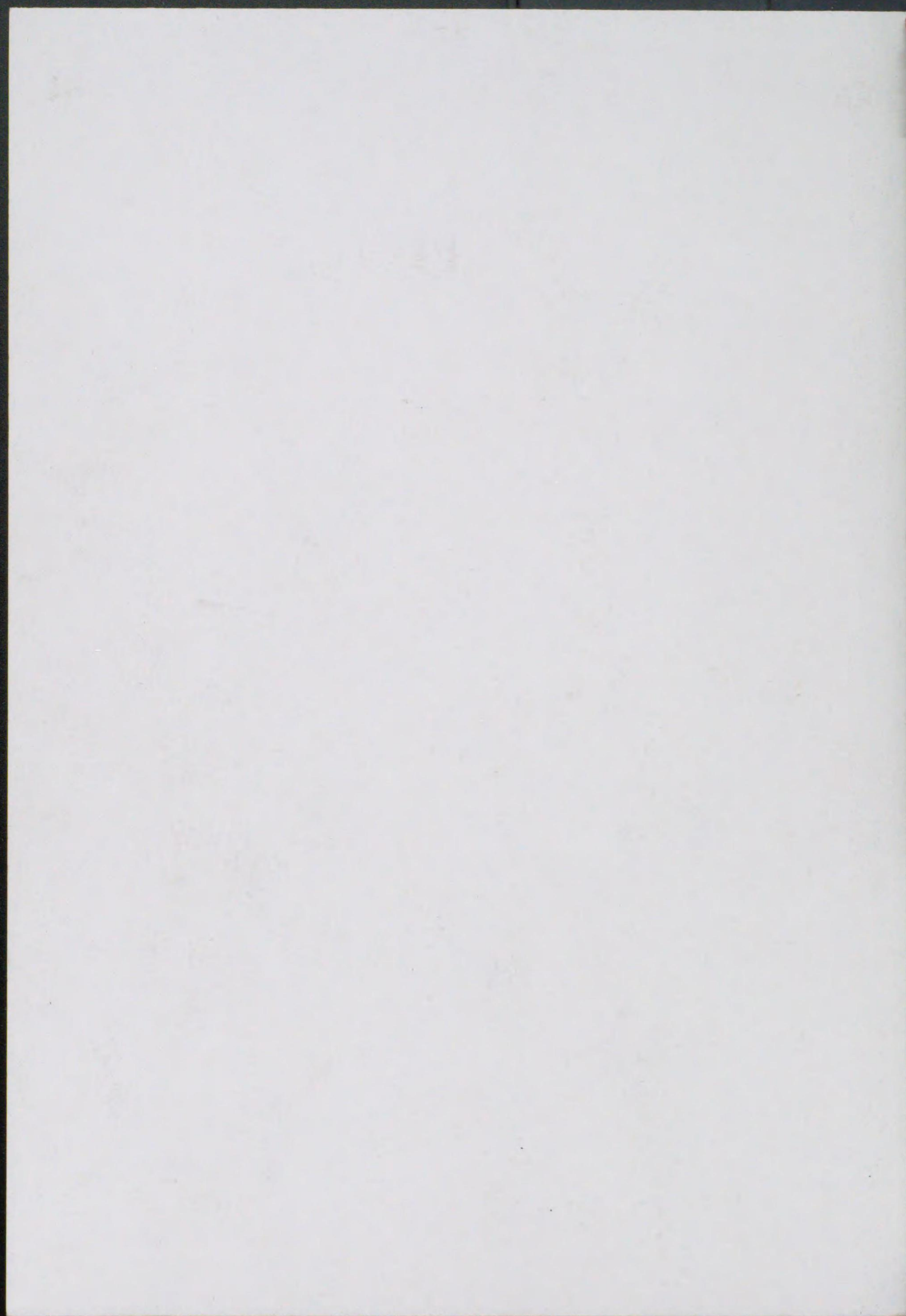
編輯人	東京市本郷區本郷四丁目三
篠原茂	
印刷人	東京市小石川區駕籠町一八五
林芳次郎	
印刷所	東京市小石川區駕籠町一八五
倭文社	
發行所	春雨會社

海鼠くねくね可己自海鼠皮二巻

海鼠皮

海鼠皮
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

海鼠皮
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

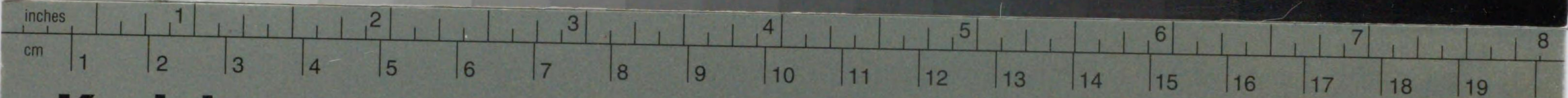


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

